
ローデンフロートのフラスコ

山羊ノ宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ローデンフロートのフラスコ

【Nコード】

N1597I

【作者名】

山羊ノ宮

【あらすじ】

リニユールに伴い、今まで書いてきた短編をまとめたものです。内容は修正しておりません。

取扱説明書 + あるふぁ

リニユールに伴い、過去の短編をまとめたものです。
内容は過去のものとなり変わりありません。

警告のカテゴリーは題名の後ろにつきます。

残酷な表現があります・・・(残)

R15・・・(R15)

となっております。

いただいた感想は、あとがきの方に移しております。

(残)は残念な作品づくものではありません。

ご注意ください。

なお、『終わりつつある世界、始まりつつある世界』のあとがきは
使えませんので、こちらにいただいた批評を載せたいと思います。

午雲先生

山羊ノ宮先生、終わりつつ、作品、読ませてもらいました。
すぐ想い起こしたのは、やはり二次元なロール・プレイング・ゲー
ムの世界です。

炭素・基・生物の我々には彼らと異なり、触覚と痛覚とが有ります
ね。

ただし神経・信号は生物・電気・・・これは静電気が起こす
エネルギー・・・だそうで、その点、彼らと通じるものがあ
ります。

生命体が滅んでも、植物は滅び無い。

逆に、植物が滅びかけたら、確実に生命体は滅んでしまう。

すると、この世界において、植物の方が生物より優位なのは、
（尿素は生物の腎臓からしか生成され得ず、しかも植物にとって最
高の肥料と成るとか。）さらに、有機物には死が待たせられども、無

機物には死が無いと見える。
無機物とは何を考え、存在し続けて居るのでしょうか。
そんなかんがえが浮かんで巡ってしまいました。
感想でした。

栖坂月先生

システムが新しくなりましたが、あえて旧来通りのスタイルで（笑）
なるほど、前書き後書きも含めて一つの作品という仕掛けですね。
しかも読者に向けてのメッセージという体を整えていることによっ
て、本文とも言い切れない仕様になっています。
これはまた巧妙ですね。

そして、本文だけでは何が起こっているのかわからないながらも、
後書きを読んだ時点で背景が思い浮かぶような仕組みになっていま
す。
内容云々よりも、色々チャレンジングな作品でしたね。
そういうえば最近ゲームをしなくなったなー、などと淋しい眩きを漏
らしてみようと思いました。

タケノコ先生

色々深い考えに触れることができ良かったです。考えられる作
品でした。

以下の文はおまけ要素として書かれたものであります。
お気を付けください。（いったい何を気をつけるのだろうか？）

軽快な音楽

「どーも、文ばんわー、『文ラジ』パーソナリティーの神野守です」

「皆さん、文ばんわー、『文ラジ』パーソナリティーの宮野美鈴です」

「いやー、始まってしまいましたね。宮野さん。まさか本当にやるとは思わなかったです」

「そうですね」

「一応この番組の説明をさせていただくと、この『文ラジ』はいつもは聞いて楽しむラジオを見て楽しもうという企画番組です」

「また無謀なチャレンジを・・・」

「また内容どころは別にしてくか言われそうですね」

「というか雑誌で対談しているのとかと変わりないと思うのですが・・・」

「ですよー。まあ、始まったものはしょうがないですよ。あきらめましょう、宮野さん」

「そうですね」

「とにかく、今回は初回ということでコーナーの説明をしながら番組を進行していきたいと思います。もちろんお便りなど一切届いていないので、番組スタッフが一生懸命書いたメールを紹介という形ですね」

「はい」

「それでは一抹の不安を抱えたまま。番組、スタート！」

「皆さま、貴重なお時間いただきませぬ？」

「この番組は『小説家になろう』の提供でお送りいたします」

CMへ

「ちよりゃー」

闇夜に響く奇声。

彼女に一体何があったのか？

その真実を君は知ることになるだろう。

『トヤさん日記 SS』NOW ON SITE!

C M 明け

「という訳で、始めました『文ラジ』。やっぱり宮野さんも初回放送ということで緊張とかされるんですか？今はすごく落ち着いて見えますけど？」

「いえいえ、そんなことないですよ。私だって、今、すごくドキドキしてますよー。緊張しっぱなしです」

「ホントですか？全然そんな風には見えませんか？」

「よく言われます。(笑)何か、私って感情が表に出ない人間にみたいで」

「でも、落ち着いた雰囲気大人の女性って感じで、いいじゃないですか」

「(笑)褒めても何にも出ませんよー」

「いえいえ、宮野さんの笑顔が一番の御褒美ですよ」

「・・・」

「な、なんか言ってくださいよー！」

「ごめんなさい。普通に引いちゃった？」

「何気にひどいなー。まあいいや。では、早速番組コーナーに行きましょうか？」

「はい」

ヒロイックなテーマ

「熱き思い君に届け！『ディイイブインパクト!!!』」

「このコーナーは何気ない普通のセリフを気合入れて紹介しようというコーナーです。では早速お便りを紹介します。P・N・正月からお百度参りさんの今日のセリフ」

「ウニは！海産物です！！！！」(爆発音とエコーを入れてください)

「・・・」

「・・・」

「面白いんですか？このコーナー？」

「字が大きくなるらない・・・ウニのセリフは本当は三倍ぐらいの大

きさで書かれてあつたのに・・・」

「やはり企画倒れですね」

「めげずに次行きましょう」

「はい。では続きましてP・N・パンチピンチポンチヨさんの今日のセリフ」

「今日の次は明日だ！」（爆発音とエコー入れてください）

「・・・」

「・・・」

「これは少ししましかも」

「おお、意外な評価！」

「なんか物語を想像出来るよね」

「え？どんな？」

「今日の次は明日だーみたいな」

「いや、分かんねえよ」

「はい。このコーナーでは皆さまの普通のどこにでもあるセリフを大募集しております」

「サラッと流しましたね。宮野さん」

「みんなー、待ってるからね？」

アイキャッチ

「続きましてのコーナーは『ツクリマンチヨコのおまけはシールですか？それともお菓子ですか？』です」

「いわゆるフツオタのコーナー、普通のお便りのコーナーです」

「それではメールを読ませていただきます。P・N・カワウソかわいそうさんからのメールです。お二人さん文ばんわ」

「文ばんわ」

「文ばんわ。実は私、今恋をしています」

「おー、ひゅーひゅー」

「好きな彼に思いつきって告白しようと思うんですが、勇気が出なくてできません。どうしたらいいですか？」

「初回に恋の相談とか、ハードル高いなあ。うーん。で、宮野さん

はどうしたらいいと思う」

「うーん。そうだなー。私なら放置」

「えっ？放置？」

「多分好きになったら、あれこれ考えてもしかないんだと思う。好き好きって気持ちが高まったら、自然と告白できるよ。そういうもんだよ。多分」

「それは何、宮野さんの経験から？」

「私にもいろいろあったことですよ」

「でもよく考えるとこれじゃあ、いつまでたっても告白できないんじゃない……」

「それはそれで、甘酸っぱい思い出になっていいかもだよ」

「甘酸っぱい思い出か。それなら僕にもたくさんありますよ」

「え？神野君にも甘酸っぱい思い出があるの？」

「そりゃあ、僕にだって甘酸っぱい思い出の一つや二つ」

「で？どんな、どんな？」

「それは……ヒ・ミ・シです」

「……」

「な、何か言ってくださいよー」

「ごめん、神野君。普通に気持ち悪かった」

「何気にひどいですよね、宮野さん。それじゃあ、まとめましょうか。カワウソかわいそうさんに宮野さん、一言」

「思いがあふれたら告白しなさい」（エコーを入れてください）

「カワウソかわいそうさん、恋実ると良いね」

「はい」

CMへ

その男の能力は微妙だった。

本を脇に挟むと一瞬で理解できる能力。

そんなどうでもいい能力を持った男の結末は意外なものだった。

『ある能力についての考察』NOW ON SITE!

C M明け

「はい。皆さま。楽しんでいただけましたでしょうか？」

「『文ラジ』もうお別れのお時間となりました。どうでした、宮野さん？今日の感想とかがありましたら、どうぞ」

「そうですね。始まる前まではこんなの本当にできるのかなーって不安でしたけど、何とかなるもんですね」

「そうですねー。ホント、僕もそう思います」

「でも、神野君。実際問題、この番組って次回あるのかなー？」

「いやー、微妙でしょー」

「あー、やっぱり」

「気が向いたら次回あるかもしれないですけどってな感じじゃないですか？」

「そうだよねー。まあ、仕方ないよね」

「とりあえず、次回があると信じてみんなーまったねー」

「次回も貴方の貴重なお時間いただきます？」

「この番組は『小説家になろう』の提供でお送りいたしました」

しずく

ぼたぼたとしずくが落ちていた。

落ちたしずくは波紋を描き、音をたてた。

川のせせらぎは聞こえなかったが、森の中の静寂の中にいるようだった。

そして、そのしずくが落ちるさまを眺めなる自分はただおっくうに横たわっていた。

なんだかもつたいないなと思った。

そのしずくを手のひらですくい、飲み干さなければという衝動に駆られた。

けれど、体はけだるく、起き上がろうとするのだけれど、一向に体が動くことはなかった。

怠惰が罪だというのなら、今まさにこの状況こそが罪なのだろう。

そのしずくは大切なもだとわかっているのに、流れゆくままにしてしまっている。

その罪の意識に耐えきれずに思わず声が出た。

その声はくぐもっていて、まるで自分の声のようではないように思えた。

まるで獣が鳴くようなみじめな声だった。

その哀れな様子に神様が同情したのか、腕が少しだけ動いた。

ああ、やっとそのしずくに触れられる。

「あなた！あなた！わかる。わたしよ。聞こえる？」

ぼんやりとした白い世界の中で、そのしずくがきらきらと輝いていた。

「一応ご主人の意識が戻られたみたいですね。もちろん油断はでき

ませんが、峠は越えたとみていいでしょう」「
私はあふれるしずくを拭いたかったが、相変わらず体はけだるく動
かなかつた。
手のひらに落ちるそのしずくを飲み干すことはできなかつたが、
私はよく知っていた。
その塩辛く、愛しいその味を。

あつい

白い霧が辺り一面を覆いつくしていた。

ここがロンドンであれば、それなりにさまになっていたんだろう。残念ながらここはロンドンではない。

湿気という気持ち悪いベールに包まれた日本だ。

昨夜の雨のせいで、湿度はお風呂の中のような。

このところ雨は降ったりやんだりを繰り返し、ダムを潤しながら、不景気を振りまいていた。

蝉のうるさい鳴き声を思えば、梅雨が明けたところで僕の不快感は変わらないだろう。

なぜこんなにも夏は暑いのだろうか？

地球温暖化？

ヒートアイランド現象？

それとも僕の部屋にエアコンがないせいだろうか？

答えは三つめだろう。

答えがわかっているのならば、その解決策を模索するのが筋というものだろう。

ひとえに、これは日本経済のひずみが僕の財布にひどく干渉しているせいであろう。

ならば政治家にでもなって、この日本を変えなければいけないのだろうか？

それとも経済界を引っ張っていけるような大企業の社長にならなければいけないのだろうか？

否。

僕にそのような実力が無いのは、僕自身がよく知っている。

ではどうすれば・・・

脇に挟んでいたアイスノンがぬるくなったので、ここでいったん思考は中断した。

冷えたものに交換したのはいいが、今度は冷えすぎていて脇が痛むほどであった。

仕方ないので、今度は股に挟んでおくことにした。

どこまで行っただけ・・・

そう、自分の実力のなさについてだった。

そもそも自身の力のなさをおおっぴろげに宣言するのมどうかと思うのだが、己を知り、そして相手を知れば百戦危うからずということではないか。

要するに、自分が何と闘っても負けると知っていれば、戦う前に逃げられるということである。

であるからして、今日まで何もかもから逃げ出してきた僕はこの部屋で一人寝っ転がっているのだが、夏の暑さから逃げられないでいた。

自分を知り。

お金がないので、エアコン買えない。

相手を知れば。

夏が暑いのは仕方がない。

百戦危うからず。

そして、僕は夏の暑さに頭をやられて、思考の海を夏らしく泳いでいた。

青ヒゲ

その猫の名前は青ヒゲといった。

若々しく、そのしなやかな体から繰り出される猫パンチには、ご近所中の猫たちが一目置くほどであった。

青ヒゲの特技はその名の通り、その長く美しいひげを自由に動かせることであった。

普通の猫であったならば人間でいう耳が動く程度の特技であったが、ただ青ヒゲのひげはほぼ光速に近い速度で動かせたという噂であった。

その青ヒゲがいつも通り町のパトロールをしていたある日のことであつた。

「ワシに何か用か？」

青ヒゲは目の前に立ちただかる者に対して啖呵を切っていた。

猫の世界では目を合わせるのには礼儀知らずである。

にもかかわらず、目の前の者はおくびもなく青ヒゲをじつと見つめていた。

同族なら自慢のフックのかかった猫パンチがさく裂するのだが、いかんせん相手は人間だつた。

しかも子供である。

これは猫にとつて天敵であるともいえた相手である。

時に持ち前の好奇心で敏感な尻尾などを握りつぶし、時に泣き声で鋭敏に研ぎ澄まされた聴覚にプレッシャーをかけてくる。

こういう相手には、君子危うきに近寄らず。

逃げ出すのが筋である。

しかし、青ヒゲは対峙していた。

その威風堂々たる姿に、ご近所中の猫たちが一目置くのもわかるよ
うな気がする。

「ワシに用がないのなら早々に立ち去るがよい」
青ヒゲは尻尾を悠々と持ち上げそう言い放った。
もちろんその子供にはニャオンとしか伝わらないのだが。
ガッ！

不意に子供が青ヒゲを捕まえようと手を伸ばした。
もちろんそう易々と捕まるような青ヒゲではない。
残像を残しながら、一瞬で飛びのいた。

「馬鹿めが！ワシが貴様などに捕まると思うてか！」
そう言い放ち一瞥しようとしていた青ヒゲの前に何かが通り過ぎた。
その優れた動体視力は、相手を逃さず、すかさずストレート猫パンチ。

当たりはしたが、完全に捉えてはいなかった。
(なかなかやる。しかし、これならどうかな?)

再び襲いかかるそれに、必殺の猫アップパーを食らわせた。
世界広しといえども、この猫アップパーを繰り出せるのは数えるほど
しかない。

そう、青ヒゲはその数えるほどの猛者なのだ。
しかし、その青ヒゲをもつてしても相手を完全にノックアウトする
ことはできなかった。

相手が地べたをはいずるように、逃げていくのが見えた。

「逃がさでか！」

まるでキタキツネをほうふつさせるようなジャンプで相手の動きを
止めた。

「ふっ。他愛もない。・・・????.!!!!」

青ヒゲは気づいた。

その足元にいるものの正体を。

それは、

猫じゃらしだった。

「しまった。ブービートラップか！」

しかし、気付いた時には時すでに遅かった。

もうすでに魔の手は迫っていたのだ。

「フ、フギャー！」

陽気のいい昼下がりに、公園では青ヒゲの絶叫がこだましたのだった。

青ヒゲ（後書き）

栖坂月先生

ここまでの三作品、一度に読ませていただきました。簡潔で読みやすく、所々に挟まれるコミカルな表現も気が利いていて心地良いです。良し悪しはともかく、個人的に『好み』の文章でした。

もちろん、アイデアも描写も素直に巧いと思います。強いて言えば、最後の『青ヒゲ』は文学にするよりコメディに分類された方が合っていたような気がしますかね。もちろん『これは文学じゃない』などと主張するつもりはありませんよ。ただ、文学とコメディだとジャンルとしての人氣に格差があるので、良く出来た作品がスルーされることも多いんです。無理には申しませんが、ジャンルを分けて投稿することも御一考してみてください。とりあえず私は楽しみましたので、また寄らせていただこうと思っています。頑張ってください。

机の中の手紙

私は自分が嫌いだった。

鏡を見てもただ記号のように取り付けられたパーツが、まるで機械のようだと思った。

長めの黒髪は、ずっしりと重い。

切ればいいのだが、母親からせつかなのだから伸ばしなさいと言われ、そのままにしている。

何かしゃべろうとするとどもる。

いや、まず誰かと話する機会というもの自体なかった。

親は共働きで、友達もいなかった。

一日中ずっとしゃべらない日だってさらではなかった。

私のいる空間だけぽっかりと穴のあいたような感覚によくなる。

そもそもこんな自分になってしまっているのは、親や先生、学校の同級生のせいなどではないとよく知っていた。

原因は外的要因ではなく、内的要因である。

人と接することがひどく億劫な時期があった。

その時期は一時的なものであったが、他人と隔離して自分の殻に閉じこもることにひどく安心感を覚えた。

その安心感は、まるで麻薬のように私の体に染み込み、孤独である自分に陶醉していた。

しかし、その一方でそれではいけないという自分がある。

そんな非社会的な人間はこの世にはいない。

自分ひとりで生きているなどと、そんな考えは傲慢以外の何物でもない。

そんな呪いのような言葉をかけてく自分を私は嫌いだった。

要するに私は私のことが嫌いなのだ。

ある日のことである。

机の中に何かが入っていた。

かわいらしいキャラクターの描かれた便せんである。

私は一応女性であるが、こういった一般女性が喜びそうなキャラクターに疎かった。

目と鼻の位置が近いことによつて、赤ちゃんをほつふつさせるため、このようなキャラクターをかわいいと感じるそうだが、私はそうは感じなかった。

もしかしたら、私は人ではないのかもしれない。

もしそうならいいのと思ひながら、封を開けた。

そして、私はその内容に絶句した。

恋文である。

しかも放課後に体育館裏に来いとは、どこの気違いであろうか。宛名を見てまた絶句する。

彼は非常に活発な性格で、簡単に言つと私と真逆の人間であった。

友人は多いし、よくしゃべり、うるさいほどである。

顔もモデルのようとはいかないが、まあ見れたほうである。

ただ欠点は背が低いことである。

ちびは嫌いだ。

人は自分がないものを恋人や配偶者に求めるといふが、こつも違つとその一般論に疑問符をつけざるを得ない。

興味の全くない人間に好きだなんて言われるなんて、罰ゲーム以外何でもない。

罰ゲーム・・・

そうかと、私は心の中で柏手を打った。

これは罰ゲームなのだ。

じゃんけんで負けた者があいつに告白するとかいうゲームである。

たいていこついう時に選ばれる相手とは、クラスにおいて嫌われ者であると相場が決まっている。

今までいじめられてきたことがなかった私は、ついにこの時が来たのかと神妙な心持だった。

これから降りかかるであろう災難に対して、私は決して屈することなく立ち向かうと誰にたく宣言したい気持だった。

そんじよそこらのいじめられっ子とは、違っのだと、全身の血肉が沸き立っていた。

「おはよー」

澄ました顔でちびが教室に入ってきた。

ちびがこちらをちらりと見た。

私はキツとちびを睨めつけてやった。

首を洗って待っているがいい。

そうして放課後がやってきた。

案の定ちびは一人ではない。

ちびの友人が二人後ろで、がんばれーやら男だろーと野次っている。

「手紙見てくれたかな？」

私は見たと、どもりながら答えた。

「突然で驚いたと思う。でも前から君が好きだったんだ。もしよければ付き合ってほしい」

ちびはもじもじとしながら、そう告白してきた。

これも演技だとすると、お粗末な芝居である。

男ならばもっと堂々と告白するものだろうと、心の中で笑い飛ばしていた。

そして、どもりながらいいよと答えた。

ちびは目を見開き驚いていた。

それもそうだろう、罰ゲームで告白してわけもわからない人間と付き合わなければならいとなると、その気の動転の仕様は尋常ではないだろう。

「本当に？」

私は心の中で高笑いを浴びせながら、意地悪そうにどもりながらも一度いいよと答えた。

ちびは友人たちのもとに走り出した。

不測の事態に作戦会議だろうか？

しかし、作戦会議は行われず、ちびたちはなんだか喜んでいる。ちびがまた私のほうに駆けよってくる。

「じゃ、じゃあ、今度の日曜日、空いてるかな？」

息を切らせて、早口でちびが質問する。

私はなんだか違和感を感じた。

もしかしたら私はとてつもない勘違いをしているのではないか？

「だめかな？」

私はどもりながら、だめじゃないと答えてしまった。

喜々とするちびをしり目に、私は全身から血の気が引いていくのを感じた。

机の中の手紙（後書き）

桜羽先生

すごく、私が

好きな内容でした。

読んでいて

とても楽しかったです。

続きがあれば

絶対に買いたいです！！

すごく続きが

気になっちゃいます・・・

紙本先生

主人公の気持ちが変わりました。引っ込み思案だけれど、そんな自分を客観的に見ている彼女の冷静さの裏側には、寂しさを感じました。この

作品の長編があったら、買うかもしれません！！

招待

「ようこそいらっしやいました。お待ちしておりました。マスター」
深々と頭を下げる執事。

「マスターは物書きとして大成され、今も多くの執筆作品を抱えられ、お忙しいというのに。私などの願いを聞き届けていただけるなど、恐悦至極でございます」

黒のシルクハットに、折り目正しく着こなしている白いストライプの入ったスーツ。

そして、その間には男の柔らかな表情があった。

「本来ここはマスターのようなかたが来られる所ではありません。何せここは墓場なのですから」

薄紫の空に、ガラス細工でできた木々。

神秘的な風景。

私はここをそんな恐ろしいところのようにには思えなかった。

その疑問に答えるように執事はにっこりと笑った。

「ではこちらに」

執事はガラス細工の森を案内するよう先行した。

私は執事の後を追い森の中へとはいつて行った。

奥へ進むにつれて、あたりは暗くなっていく。

舞台は暗転していく。

「あそこです」

執事の声に導かれたように、そこに一筋の木漏れ日がさしていた。

木漏れ日のスポットライトの中に一人の少女が立っていた。

純白のワンピースに、ピンクの帽子がよく映えた。

彼女は執事同様になっこりと笑った。

そして、お姫様のようなお辞儀をうやうやしくした。

「マスター。彼女のことを覚えておいでですか？」

私は首をかしげた。

私の記憶には彼女のような可憐な少女の知り合いはいない。

「そうですね。少々意地悪な質問をしてしまいました。お詫びいたします。マスターが覚えておいでにならないのは、当然なのです」
私はげんな表情で執事を見た。

執事は変わらぬ笑顔を向けていた。

「ここはマスターに忘れ去られたものいきつくところ。マスターが物語を紡ぐたびに、作り出され、作り出されたものの、一度も表には出られず、処分されるところでございます」

そういえば彼女のようなキャラクターを出そうとしていた芝居があっただろうか？

いや、今度の小説に出すはずのヒロインの一案だったようにも思える。

「彼女の名をまだ覚えておいでですか？」

彼女を注視するが、とんと思い出す兆しがなかった。

覚えていないと執事に答えた。

その瞬間少女はガラスとなり砕け散った。

突然のことに目を丸くしている私に

「彼女は完全にマスターの記憶から消去されました」

執事は答えた。

目の前の事象に対して自身の処理能力が遅れている私に、執事は真摯な顔でゆっくり、そしてやさしく語りかける。

「ここは墓場なのです。マスターの記憶のゴミ箱と表現したほうがいいでしょうか？彼女はゴミ箱に残っていた記憶の断片です。ごみ箱がいつぱいになる前に記憶を処分してしまいます。忘れ去られた者たちは、ただその時を待ちながらここを漂っているのです」

その言葉に、私ははっとなり周りを見回した。

気がつけば辺り一面砕け散ったガラスが散乱している。

このガラスの破片も彼女のようなれの果てだというのか。

彼女も消えゆく時を待っていたというのか？と執事に問うた。

「はい。ですからマスターに彼女の名を聞きました。マスターに彼

女の処分の許可をいただくために」

私は自分の滅びを望んで生きるなんて納得ができなかった。

それはあまりにも悲しい気がしたからだ。

それに私は彼らのマスターだ。

何とかできないものか思案した。

うろろろとしながら、口元をなでた。

そして、問うた。

もし彼女の名を私が答えていられたのなら？
と。

「そうですね彼女は処分されなかったでしょう。ですが、それは叶わないことです。ここは忘れ去られた者のたまり場ですから」

でも、という私に、執事はおもむろにスーツを脱ぎ去り、肌をあらわにした。

「マスター。私の名前覚えておいででしょうか？」

服の下にはもうほとんどガラスになりつつあった執事の体があった。私は驚愕したが、それと同時にもう時間がないことを一瞬で悟った。私は今まで書きあげたキャラクターの名前を次々に連呼していった。記憶の糸を手繰りながら名前を叫ぶ私の姿を、執事は先ほどと変わらずにこやかに微笑んでいた。

そして、執事はガラスとなつて砕け散った。

その日、珍しく目覚ましが鳴る前に起きた。

そして、久しぶりに夢を見た。

もう何の夢だったかも忘れてしまったが、ここ最近夢見ることもなかったなので、不思議な心地だった。

どんな夢だったか思い出そうとしていたら、目覚ましが鳴って温い布団の中から出てこいとせかされた。

そして、今日も一日平和に過ぎた。

招待（後書き）

栖坂月先生

私にも居ますね、消えていったキャラ達が。

もちろん、大成した先生とは比べるべくもありませんが。

とはいえ、こんなご時世ですから、エコっぽく再生して出てくる可能性もありそうです。発想も有限ですからね。大切にしたいものです。

作品としては簡潔にまとまっていますし、消えそうな記憶をガラス細工にしたのも悲壮感が漂っていて、なるほどと感心しました。

ただ、さすがに『夢オチ』はちょっと安易かな、と。

別に『ナシ』とは思いませんが、もっと書けるのでは、という期待から作品評価は星三つとさせていただきました。また来たいと思います。頑張ってください。

椎名実行委員会先生

デスクトップのゴミ箱を空にする時の音が聞こえました。

これから先その度に思いだしそうな気がします。

朝顔

軒先に朝顔が咲いていた。

その花弁には朝露をたたえ、暑い夏に涼を届けてくれた。

「こんなところにいらしたんですか？朝食ができておりますからどうぞお食べになってくださいまし」

「わざわざありがとうございます。ほどなく行きますので」

「お体に触ります、どうぞお早くお越しく下さい」

生返事を返し、じつと朝顔を見つめる男。

その様子を見て女は、男の隣にすっと腰を落とした。

「朝顔でございますか？」

「ああ、あまりに美しいものだからつい見とれてしまって」

「そうでございますね。季節の花というのは、趣があつてようございますね」

「なぜ朝顔というのは朝にしか咲かないのだろうか？なぜだと思つて？」

「さあ。なぜでございますよう」

「私は思つのだよ。朝顔は自分の咲くべき時を知っているのではないかと。こうやって花でさえ自分の咲くべき時を知っているというのに、私は何をしているのだろうか」

女は悲しそうに男を見た。

「ほかの維新志士の同志たちは、身を砕いて頑張っているのに、私は自分の体さえ満足に動かすことができないでいる」

「そう、ご自身を責めてくださいますな。誰もあなた様を責めるものなどおりませぬ。今はご自身の健康のことだけ考えてくださいまし」

「そうだな。誰も私を責めてなどいないのかもしれない。ただ、私は私を許せない。このふがない私とこの体が恨めしい。何も出来ぬ自分が、苛立たしい」

男はギラリとした目つきで、やせ細った自分の腕をねめつけた。

「何も出来ぬわけではありませんね」

「この体で何を……」

「信じてくださいます。維新志士のお仲間を、未来を支えるこの国の民を」

「信じるだと、そんなことで何が変わる」

「この国はあなた様だけの国でございますか？違いますでしょ。だからこそ皆様と一緒にこの国を変えたいとお思いになられたでしょ」

「それはそうだが……私は何も変えられてはいない」

「人生は何もなさずには長すぎ、何かをなすには短すぎます。だからこそ人は子を生み、後世に思いを託すのです」

女は自分の腹を愛おしくさすった。

「信じてくださいます。お仲間を、未来のこの国の民を、自分の子供を」

男は女を抱き誓った。

「そうだな。信じよう。たとえ朝顔になれなくとも、私はそれを潤す一滴の雫の朝露となろう」

バラの香り

彼女からはバラの香りがした。

通勤途中の電車の中でのことである。

通勤するときには大体同じ電車の同じ車両に乗る。

この車両に絶対のらなければいけないという決まりはないのだが、なんとなく使う車両が固定されるものである。

同じ車両の人たちは自然と顔見知りになっていくものである。

別段話しかけたりはしないが、この人は何処から来てどこで降りるかというのを覚えてしまうものである。

目の前に座っている人は次の駅で降りるから、次座れるなどといった風である。

彼女は最近この車両に来た新参者である。

込み合う車内において、香水のきついにおいは迷惑以外の何物でもないのだが、彼女のおいについては嫌な気はしなかった。

彼女が別段好みだったわけではない。

俺はもつとグラマラスなほうが好みだし、髪は短いのよりも長いのが好きだし、童顔よりも目鼻立ちがしっかりしているほうが好みである。

ただ彼女の匂いが気になるだけである。

もしかしたら自分でも気づかないうちに恋に落ちていたりするのだろうかなんて考えたこともあったが、もし彼女に話しかけるとしても

「君、いい香りがするね」

とでも話しかけるのだろうか。

それこそ、その日から痴漢扱いされること間違いないだろう。

まだ若いのに、そんなことで人生棒に振るのは御免だ。

要はなぜ彼女の匂いがこんなにも気になるのかを突き止めればいいだけなのだ。

俺はバラの香水を買うことにした。

そして失敗した。

デパートのアロマコーナーには、男っ気は全くなく、完全に浮いていた。

下着売り場がちょうど隣にあるのも悪い。

何の後ろめたいことはないのに、挙動不審になる。

堂々としていれればいいと思うのだが、一度舞い上がった心を落ち着かせるのは至難の技だった。

結局店員さんに声をかけられた。

「何かお探ですか？」

親切な店員の問いかけから、取調室の刑事のようなプレッシャーを感じる。

彼女の笑顔の裏に、さいぎ心が見え隠れしていたのは事実だった。

決して俺の被害妄想ではないと確信している。

「バラの香水を」

やっとのことで絞り出した勇氣に、店員は流暢に店の品を説明した。

俺ははあ、そうですね、生返事するしかなかった。

はつきりいつて店員の言いなりであった。

結局予算よりも高いものを買ってしまった。

帰りしな、後悔しながらも謎の解ける期待に胸を膨らましていた。

食事と風呂を済まし、いよいよ包みを開けた。

まるで宝箱でも開けるような気持ちであった。

店で品物を確認しているにもかかわらず、香水が姿を現したとき、思わず、おおっと感嘆してしまった。

まるで品物を鑑定するように香水をいろんな角度から見た。

シュツシュツと恐る恐る香水の頭を押してみた。

バラの香りがした。

当然である、俺はバラの香りがする香水を買ったのだから。

もしこれでキンモクセイやユリの香りがしようものならクレームをつけに行かねばならない。

理科の実験をするように、手であおいで嗅いでみるが何か違う気がした。

やはり何かにかけてみないといけないのだろうか。

枕やカーテンにかけてみるが、なんだか違う気がした。

やはり人につけないといけないのだろうか。

いろんなところにかけてみた。

うなじ、手首、脇、ひざの裏、足の裏。

かけては嗅いでみるが、彼女の時とは違う気がした。

やはり女性につけないと意味がないのか。

さすが道行く女性に香水をかけるわけにもいかないので、とりあえず寝ることにした。

香水はまだたくさんある。

結論を出すにはまだたくさんの実験が必要なだろう。

俺はその日も同じ電車の同じ車両に乗り込んだ。

瞬間車両内の視線が一気に自分に向けられた。

理由が自分の匂いにあることに気づくには遅すぎた。

バラの彼女が乗車してきた。

彼女もほかの乗客同様俺を見た。

そして眉をひそめた。

俺はできることなら電車をすぐに止めて家に帰りかった。

泣いてもいいよと言われたら、号泣できるだろう。

結局、次の日からは時間帯をずらして、違う車両で通勤することになった。

もう彼女のバラの香りが気になることはなくなった。

後にはまだたつぷりとあるバラの香水と、心に深い傷だけが残った。

バラの香り（後書き）

這沢 りん

過去の作品一覧を見たら、このタイトルに目が留まったので読んでみました。読みやすかったです。すっと、作品の世界に入れました。香りに関して無知な彼が、可笑しく、哀れで、可愛かったです。結構リアルな話だなと思いました。

指摘する点など無いんですが、彼女から漂う香りがどんなものだったのか、知りたいところです。

栖坂月先生

コレもある意味『ミイラ取りがミイラ』なんでしょうかね。

生真面目であったが故の誤った選択、とでもいうべき状況なのかなと、勝手に解釈させていただきました。文体が柔らかいので読みやすく、話そのものはとても面白かったです。

ただ、それが故に誤字は少し残念でした。

一つは『顔見しになっていくものである』 『顔見知りになっていくものである』で、もう一つは『結局定員さんに声をかけられた』 『結局店員さんに声をかけられた』という二ヶ所です。

何だか揚げ足取りみたいで、ミスの指摘はあまり好みではないのですが、せっかくの軽快な文章が小さなミスで途切れるのはもったいないと思ったので、あえて指摘させていただきました。

これからも面白い文章、期待しています。

Re：十年後の自分への手紙

背中に翼がほしかった。

たとえ背中に翼に生えたとしても空は飛べるわけではないだろう。

人の体は飛ぶには重すぎるだろうし。

その体重を飛ばすだけの力があるだろうか。

それでも翼がほしかった。

空を飛んでどこへ行きたかったのだろう。

何かから逃げたかったのだろうか。

生きていれば煩わしいことなんて山ほどある。

生きることから逃げたかったのだろうか？

だからそんなにも死にあこがれたんだろうか？

一言いっておくことがある。

死ぬことは君が思っているほど美しいものではないし、

崇高なものではない。

すぐく身近にいて、まるで気がつかないほどのものである。

苦しいし、痛いし、

まして歯医者に行つて、あうあう言っている君には耐えきれぬものではない。

生きる権利があるというのなら、死ぬ権利もあるはずだ。

君はそういった。

生きようという意志と同時に、死にたいという欲求も並列して存在するのだとも言った。

その通りだと思つた。

私も過去そのような経験をしているから、そのことには否定しない。しかしだ。

ならばなぜ君は今生きているのだ。

君は知らねばならない。

生きるという欲求の根幹の深さを。

よく考えてみるがいい。

人がこれほど歴史を積んでいるのにまだ自滅していない理由を。

それはひとえに生への執着心の表れであろう。

こんなくだらない世界生きている価値ない。

君はそういった。

はつきり言おう。

社会の価値と君が生きる価値とはまるっきり別物である。

社会がどんなに腐っていようと、君が死ぬ理由などにはなりえない。生きる理由とは自身の中にこそあるのだから、外に求めるものではない。

まして他者に求めるものではない。

もう一度言おう。

自分の存在価値は、自分で決めるものである。

落ち込んでいるのなら、歌いなさい。

声をあげて思いつきり泣いてみるのもいい。

苛立っているのなら、笑いなさい。

声をあげて、思いつきり笑いなさい。

そして、ゆっくりでもいい。

立ち上がりなさい。

私は待っているから。

そして語り合おう。

自分たちの価値を、将来の夢を、この世界のことを、たくさん、そうたくさん語ろう。

私はそんな日に来るまでずっと待っているから。

未来の自分から過去の自分へ愛をこめて

帰り道

夏の夕焼けの海岸線を俺と由紀は歩いてた。

俺の押している自転車には、由紀と俺の二人分のカバンが乗っており、自転車の後部には部活の道具が乗っていた。

そのためか時折ふらふらとしていた。

由紀は身軽になって、俺の前を先導して歩く。

彼女はまるで弾むように歩く。

「涼ちゃん。去年もこの道一緒に歩いたよね？」

「去年もっていうか、一昨年も、昨日も、一昨日も一緒だっただろ」

「んっもう、デリカシーないなあ。人がせっかくロマンティックな気分浸っているっていうのに」

「デリカシーないとかいうな。っていうか、この道歩くのも高校卒業するまでだろ」

「そういうところがデリカシーないって言うんだよ」

「じゃあ、どうしろっていうんだよ」

「そういう時はー。海を見つめてー。・・・そうだねって呟くんだよ」

俺は海を見つめ、

「そうだね」

「似合わないーい」

「じゃあ、やらすな」

彼女はころころと笑った。

彼女の笑顔は本当に可愛い。

俺がもう一度恋に落ちてしまいそうなほどだ。

「太陽、おっきいね」

夕日はことさら自分の存在をアピールするかのよう大きく。

夕日の光は、彼女の白い制服をオレンジに染め上げた。

「腹減ったのか？」

「なんでそうなるのよ」

「由紀は色気よりも食い気だろ？」

「違うもん。食い気より色気だもん」

「俺も食い気よりも色気かも」

俺は自転車を止め、彼女に向けて手を広げると、彼女はちょこちょこ歩いてきて、俺の懐にスポツと収まる。

唇を重ね、

彼女をぎゅっと抱きしめると、

彼女のおなかがグルルとなった。

「やっぱり色気より食い気じゃねえか」

「違うもん。何かの間違いだもん。っていつか涼ちゃんの舌。おいしいんだけど、もしかして涼ちゃんって食べれる？」

「食べれるわけねーだろ」

「食べてもいい？」

「馬鹿！食べるな！」

彼女はまたころころと笑う。

俺は一体彼女の笑顔にこの先何度恋に落とされるのだろうか。

もう彼女にはまりきっているというのに。

帰り道（後書き）

栖坂月先生

上手いですね。

正直言うと苦手なんですよ、恋愛物って。

読むのも書くのも苦手です。

でも、この彼女は魅力的だと感じました。短い文の中に存在がしっかりと浮かび上がり、なかなかに見事です。描写で外観を、台詞で内面を表現するあたり、手本になりそうだとさえ思いました。

あとはそうですね。描写に視覚以外の表現が加われば、幻でない彼女に化けそうな気がしました。

これだけの短い文章ですので、いささか贅沢な注文かなと思います。が、この情景があまりに見事だったので、あえて申し上げておくことにします。

また来ます。これからも質の高い文章、期待してますよ。

四方の壁

探偵中野直志は、不覚にも捕らえられてしまった。

薬で眠らされている間に、両手、両足を縛られ、口にさるぐつわをかまされていた。

「ここは・・・」

中野直志は、もうろうとしながらも目覚めた。

周りに人の気配がないのを確認してから、袖からナイフを取り出す。そして、器用に手首の縄を切り、足の縄とさるぐつわをとった。

「どうしたものか・・・」

捕らえられていた場所は、四方を白い壁に囲まれていた。

天井は高く、とても届きそうにない。

窓や扉もなく、正面の壁には空気穴が小さく開いていた。

そして、部屋の中央に机が一つあった。

机の上には、三つのカギがあった。

それらのカギはそれぞれ独特の形をしていた。

一つは丸い形、一つは三角、一つは四角である。

「カギのようだが、どこかに扉があるのか？」

何処にもそれらしいところはない。

中野直志は懐からリラックスパイポを取り出し、口にくわえた。

彼はいま禁煙中である。

中野直志は、吸い口のプラスチックのところがりがりと噛みながら、壁を叩いていった。

一様に同じ音がした。

「普通に考えれば、ここだろうな」

彼は空気穴の前にしゃがみこんだ。

覗き込んだ空気穴も変わった形をしていた。

空気穴は六ボウ星の形をしていた。

「変わった形をした空気穴に、それに合うはずのない形をしたカギ・

・
」

中野直志はぼんやりと空気穴を眺めながら考えた。

（たばこが千円になるって聞いて禁煙し始めたけど、すぐすぐなるってわけじゃないんだよな。まあ、実際高くなってるっちゃなってるけど。昔はよかったなあ。コーラのむみために気軽に買ったのに。今じゃ吸う場所まで考えなきゃいかん世の中だし、せっかくだしこのまま禁煙するか）

彼はよっこらせと掛け声をかけて、立ち上がる。

「一応試してみるか」

中野直志はおもむろに机をつかんだ。

三つのカギがころころと地面に転がっていく。

そして、壁に投げつけた。

壁はバリバリと音を立て破れた。

「空気穴を見て、壁薄いなあと思ったけど。ベニヤ板って。手抜きしすぎだろ」

中野直志は穴をくぐり、外へと出た。

「まあ、犯人は分かっているから。とりあえずとっちめに行くか」
指をぼきぼき鳴らす中野直志だった。

四方の壁（後書き）

水守中也先生

密室、三つの鍵、六芒星と謎を盛り込み、さらにはたばこネタでハードボイルド風に演出して、ラストのオチは・・・
いい意味で脱力させていただきました。

密室も、中野を眠らせている間に、壁を囲むように作ったのなら、ベニヤでも仕方ないかと（笑）

向日葵（ひまわり） （残）

小高い丘に一輪向日葵が咲いていた。

その向日葵は二メートルほどもある大輪で、遠くからもよく見えた。そこいらの土地は痩せていて、作物は育たない。

まして花なんて咲きはしなかった。

そこに住んでいた人たちは不思議がった。

あの向日葵は何で咲いているのだろうと。

やがて、その向日葵は国中でうわさとなり、観光客が訪れるほどになった。

健康祈願の象徴として、その向日葵はもてはやされ、種はお守りとして売られた。

そして幾年か過ぎたところである。

今年も向日葵は一輪だけ丘に咲いた。

向日葵を拜むのに長い列ができていた。

その列を挟むように、屋台が並び、土産や、涼を得るものなどが売られていた。

年を追うごとににぎやかとなり、村は潤った。

巡回中の村の若者が、変わった老婆を見つけた。

老婆は手に大きなシャベルを持っていて、並んでいる参拝客をかき分け丘を目指していた。

「ちよつとそこのおばあさん。そんなに急いでどうしたね？」

老婆は若者を一瞥しただけで、えっちらおっちら丘を登っていく。

「ちよつと待ちな。そんな物もって、まさか丘の向日葵堀に行くんじゃないだろうな」

「そつだよ」

老婆は吐き捨てたように言い放ち、また丘を目指す。

若者は夏の陽気におかしくなったのかと、げんなりした。

そして、仲間を呼び、老婆を村の詰め所まで連れて行った。

「何するんだい！」

「まあ、おばあさん。落ち着いて」

詰所には若い駐在さんが一人、ほかには村の男衆が幾人かいた。

駐在は老婆をなんとかだめながら席に着かせる。

「なんでまたあの向日葵を掘ろうとするんだい？あれはこの村のご神体みたいなものなんだよ。この村の人たちにとって大切なものなんだ。なのにそれをとったらみんな困るだろ」

駐在が老婆に対して、ゆっくり落ち着いて話しかける。

「はん。何がご神体だ。あれはそんな大層なものじゃないよ。単なる目印さ。私がほしいのはその下に埋まっているものなんだ」

「あの向日葵の下に埋まっているもの？」

駐在は村人を見回したが、皆一様に首を振った。

「何が埋まっているんだい？」

老婆が駐在を見つめ、重く口を開く

「私の孫娘さ」

そこにいる皆が驚愕した。

何かの事件かと思いい駐在は調書の用意をし、老婆にまた質問をした。
「なんであの向日葵の下にあなたのお孫さんがいると、お思いになられたんですか？」

「孫娘は、何年か前に駆け落ちして私の村から出て行ったんじゃ。ずっと連絡もなく心配して居ったんじゃが、何日か前に孫娘が夢枕に立っての。駆け落ちしたその男に殺され、今は向日葵の下に埋められていると言ったんじゃ」

なんだと太話かと村人の一人から嘲り笑う声が聞こえた。

老婆の妄言で話が収まろうとしたとき、一人の村人が言った。

「でも確かに、俺たちはあの向日葵の下に何が埋まっているのか知らない。もしかしたらあの向日葵の秘密がわかるんじゃないか？もちろんあの向日葵の下に死体が眠ってるなんて、思ってもみないけどな」

老婆が一人わななく中、皆一様に笑い声をあげた。

それから夜になって、丘の向日葵の下を掘ることにした。

もちろん老婆の言葉を信じてというよりも、その下に何かあるのではという好奇心からである。

夜の帳の中を、シャベルの土を掘る音が静寂をかき乱した。

がりつと何かに当たる感触。

「何かあるぞ。光をくれ」

カンテラに照らされたそれは、

白骨化した死体だった。

老婆がうめきを漏らし、村人たちは閉口した。

死体の体には向日葵の根がくまなく絡みつき、まるで血管のようだった。

「ほら見たか。私の孫娘じゃ」

老婆は死体に近づき、しわしわの頬を白くくすんだ骨にすりつけた。

「一人でこんなところで苦しかったろうに、つらかったろうに。今

ここから出してちゃんと供養してやるからな」

やさしく老婆は語りかける。

掘りあてた死体が、本当に老婆の孫娘かは確かめようもなかった。

死体となったものが語るべくもないのだから。

「ささ、はよう掘り出しとくれ」

「それはできない」

一人の村人が言った。

「なんじゃと」

「掘り出したら向日葵が枯れてしまつかもしれない。そうしたらこ

の村はまた貧しい時に逆戻りだ。だからできない」

「ふん、それじゃ私一人でもやるよ」

老婆は腕をまくり、シャベルを構える。

その様子を見て、先ほどできないと言った村人の男がシャベルを持った。

男はシャベルで老婆の頭をつしるから殴った。

老婆は動かなくなった。

生きているか、死んでいるか分からなかったが、とりあえずは動かなくなった。

その動かなくなった老婆を穴に放り込むと、その男は上から土をかぶせていった。

男の周りの村人は、悲痛な顔の者や、非難の表情で見る者もいたが、誰も彼にとってかかろうというものはいなかった。

その男がやらなければ、違う誰かが手を出していただろう。

その男を殺しても罪をかぶる人間が変わるだけである。

皆一様にそのことをわかつていた。

その男は一人で土を盛り、向日葵を植え直した。

周りにはただその男の様子を見つめるだけである。

そして、また幾年か流れた。

人々の関心は移ろいやすく、向日葵の信仰は徐々に薄れていった。

次第に村もさびれていき、さびれるにつれて向日葵の扱いもぞんざいになっていった。

もうお参りする人間など皆無となってしまった。

そして、今年も丘にはたった一輪向日葵が咲いている。

向日葵（ひまわり）

（残）（後書き）

栖坂月先生

面白かったです。

私も死体と植物というネタで一作構想しているのですが、こちらの方がテーマもストーリーも洗練されている印象でした。いずれ書くと思いますんで、そんな話が出てきたら笑ってやってください。

それにしても、この話は綺麗だと思いました。

出来事自体はファンタジックな印象があるのに、背後に見え隠れする事実が妙に現実的で、それが胡散臭い昨今の報道を見せられているかのような、現代でも転がっていきそうな話にも思えましたね。むしろん、死体が埋まっているからといって都合良く向日葵が咲くことはないでしょうから、実際にはあり得ない話でしょうが。

そういう印象も含めて、これは面白かったです。

これからも期待しています。それでは

紫陽花（アジサイ）

しとしとと降る雨に紫陽花が喜んでいた。

園芸部の仕業だろう。

土質の違いから、紫陽花は赤、青、紫のグラデーションができていく。

あの葉っぱにかたつむりでもいたら絵になるだろうにと、少年は思った。

線で描けそうなやせ細った雨粒を少年はずっと見ていた。

放課後の教室に、少年が一人いた。

ほかにはだれもいない。

彼は課題をするために教室にいるのだが、一向に進みはしなかった。

彼の机には紙切れが一枚。

それが彼を困らせる課題だった。

課題の内容はこうである。

自分評価。

学習面、運動能力、自分の長所、短所。

以上四つの項目を書き込むと言ったものであった。

学習面、運動能力は五段階評価し、長所、短所についてはいくつ書き込んでもいいというものである。

黒板の上にかかげられた時計が、カチコチと彼をせかせるのだが、彼を思考の眠りから目覚めさせることはできなかった。

ここに書き込むべき自分とは、一体どの自分であろう、彼は悩んでいた。

1、 自分しか知らない自分

2、 他人しか知らない自分

3、 自分も他人も知っている自分

4、 自分も他人も知らない自分

彼にとって一体自分というものはどう表せばいいかわからなかった。

自分というものを深く考えれば考えるほど、自分という像の輪郭がぼやけてくるのだ。

長男である自分、学生である自分、日本人である自分、男である自分、人間である自分。

それらすべてが自分を構成する存在であるにもかかわらず、自分自身を表すのに一つたりと適した自分はいなかった。

結局ペンは進まず少年は、窓の外ばかりを見ている。

もしあの雨粒一つずつが、意識を持っていたとしたらどうなるのだろうか？

もちろん科学的にそんなことはありもしないことだと思っ。

たとえ脳内の思考が電気信号のやり取りなのだとしても。

だが、ほかの学問ならどうだろうか？

たとえば哲学など。

少年は哲学をよくは知らなかったが、曖昧なものを学問に昇華するものとして思考の後ろ盾とした。

降り注ぐ意識は、地面に落ち、水たまりとなる。

水たまりの中での個々の意識は、混ざり合い、一つとなる。

そこには大きな一つの意識ができるのであろう。

ちょうどあそこに咲く紫陽花のように。

個々の花が集まり、大きな花となる。

やがて地面に染み込み、植物の中へ、動物の中へ、意識は移ろうのだ。

日は傾き、雨がやんだころ。

今まで沈黙していた彼のペンは紙を書きなぐった。

学習面、5。

運動能力、5。

長所、全部。

短所、ナシ。

雨がやみ、先ほどまで悩んでいたのがウソのように思考は晴れやか

だった。

もしかしたら、自分はだれなのかと悩んでいたのは彼の思考ではなかったのかもしれない。

降り注ぐ雨粒の意識。

水たまりの混合した意識。

植物に取り込まれる意識。

それとも彼自身の三分の二を占める水分だったのだろうか。

ハンカチ

私は雑踏の中を全力疾走していた。
もう少し私に、恥も外聞もなければ、

「待ちやがれー!!」

と叫んでいただろう。

チラリと見かけた男の姿に、少し体が硬直して動かなかった。

その間に男は私の目の前から消えてしまったのだ。

もう少し早くに話しかけようとしていれば、こんなに走らなくてよかったのだ。

勇気のない自分が嫌になる。

こんなことなら部活ぐらいしておくんだった。

息も切れて、体も重い。

さすがにかかどで踏みつぶしたスリッパのようなローファーでは走りづらい。

明日からスニーカーで登校しようか、思うほどである。

男発見。

私は声をかけず、男の肩をたたいた。

そしてポケットの中のハンカチを取り出した。

「これ・・・きの・・・うの・・・」

はあはあと、息を整え、そういった。

そう昨日のことである。

寝冷えしたのか、鼻風邪を引いた。

へチツ、へチツとくしゃみが止まらなかった。

人目を気にせず、ティッシュを鼻に詰めようかと思っていた時、男が声をかけてきた。

「よかったら、これ使って」

普段なら警戒して、手は出さなかっただろうが、私の頭はあいにく

風邪でマヒしていた。

差し出されたハンカチで、鼻をかんだ。

その様子を見て、男はニコツと笑って立ち去って行った。

その場で汚れたハンカチを渡すわけにもいかず、家に持って帰った。後になって、お礼さえ言っただけでなかった事に気が付き、後悔した。

そして、今日偶然にも男を見つけることができたのだが・・・

男は差し出されたハンカチを手に取ると、私の額の汗を拭った。

「女の子なんだから、汗ぐらいふきなよ」

誰のせいでこんな汗をかいていると思っただけなんだ、こいつは！

私はハンカチをひったくり、汗を拭いながら男を睨んだ。

男はにっこりと笑うと、また立ち去ろうとする。

そうはいくかと、私は彼の服の袖をつかみ

「次はいつ会える？」

そう聞いた。

男は少し驚いた様子で、少し思索した。

「じゃあ、明日同じ場所で、同じ時間に」

そして、男はニコツと笑って立ち去った。

私は男の姿が見えなくなっただけで気がついた。

しまった。

男の携帯の番号か、メールアドレスを聞いてればよかった。

今からまた走るだけの体力はなかった。

とりあえず明日はスニーカーである。

そういうわけで、友人たちに告ぐ。

明日私が街中で全力疾走していても、声をかけないように。

私は今恋しているのである。

カエルのケロ助

カエルのケロ助は、ケロケロ村を出て、旅に出た。

自分探しの旅などとぬかして出てきたが、本当にそうかと聞かれると、あまり自信がない。

ただうまいものを食べたいぐらいのことしか考えてなかったかも。

ある村で黄金のハエがいる村があると聞いたケロ助は、とりあえずその村に行ってみることにした。

道中一匹のカエルを見つけた。

「すみません。ちょっとお尋ねしますが、このあたりでゲロゲロ村という村を知りませんか？」

「ケロケロケロ。ゲロゲロ」

「ああ、どうもすみません。ありがとうございます」

かなりきつい訛りがあったが、発音と表情から推測して、道は正しいようだ。

満月のきれいな夜に、キリギリスが話しかけてきた。

「やあ、私の名前はマルモノ。君の名前は？」

バクツ。

おいしかった。

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり・・・

しかし、俺はまた罪もない小さな虫の命を絶ってしまった。

ああ、俺は何のためにそんな事をしてしまったのか？

この目的もない愚かな旅を続けるためか？

ケロ助はふと考えた。

カオスとは何か？

それはものの始まりであり、そして終わりである。

この説が正しいというのならば、今この時点においてもカオスの中

にいるのだろうか？

そうなれば秩序などというものが、いかに不確かであいまいなものなのか、痛感させられる。

こういう感情を得るために、俺はあのギリギリスを犠牲にしたのだ。それが良いことなのかさえ俺には分からないが、それが運命なのだ。運命とは、秩序的に成り立っているのではなく、カオスによって成り立っているのだ。

だからこそ運命とは、不確かで、時に残酷なのだ。

まあ、なにが起ころうとケロ助の旅は続くのだった。

カエルのケロ助（後書き）

栖坂月先生

不覚でした。

まさかいきなり食われるとは……。

こう、せめて黄金の八工の情報とかを聞いてからとか、そういつ発想がないところが素敵です。

やはり、一発ネタはこうあるべきですね。

また来ます。それでは

昔の詩

悲しい歌はもう心に響かない

胸いっぱいのはきは

それだけで幸せにする

心地よいぬくもりに

ただ身を任せ

とろけていく

薄れいく意識の中で

もう二度と逃したくないと

必死で抱きしめる

ああ・・・この恋よ終わるな

昔の詩（後書き）

桜羽先生

こう．．

心に染みるって
いうんでしょかね。

読んでいて

柔らかい気持ちに
なったというか．．。

説明下手くそで

すみません。（T|T）

この短い文章で

ここまで心を打たれたのは初めてでした。

詩が

好きなので．よく書いたり見たりするんですけど
今までで

一番好きな詩です。

ありがとうございました

読めて、良かったです！！

山の茶屋

夏にはいつも登山に行った。

それほど装備を整えなくてもいい場所をいつも選ぶ。

山はいい。

山で出会う人は、もうそこにいるだけで友人になれるのだ。

あいさつ一つで、人っていいなあと思えるのは山ならではの楽しみだろうか？

今年も東北のとある山にいた。

ちょうど中腹辺りに珍しいものを見つけた。

茶屋である。

まるでそこだけ時代が切り離されたようだ。

「すみません」

「はい」

奥から出てきたのは、美人の若い女性だった。

「お茶を頂けますか？」

彼女はにっこりと笑って返事した。

空は青く、通り過ぎる雲さえない。

彼女は奥からお盆に載せた急須と湯のみをもって、俺の隣に座った。そして、俺の目の前でついしてくれた。

彼女は着物の袖を抑え、お茶の入った湯のみを差し出してくれた。

「どうぞ」

湯呑からは湯気が立ち、正直飲みづらかった。

それでも、お茶に口をつけたのは、彼女が隣でじっと俺のことを見ていたからだ。

「・・・おいしい」

素直にそのおいしさに驚いた。

冷たいお茶のように、爽快感があるとはいかなかったが、熱いせいでお茶をゆっくりと味わうことができた。

俺が驚きながらお茶を飲む様子を彼女は楽しそうに隣で見ている。

「おかわり入れましようか？」

「はい」

彼女と少し話をしながら、結局三杯も飲んでしまった。

始終彼女は楽しそうにニコニコしていた。

「じゃあ、お会計お願いしてもいいですか？」

「お会計？」

そろそろ行くかと会計をしようとした時、彼女は不思議そうな顔をした。

「おいくらでしょう？」

「いえ、お金はいりませんから」

「無料なんですか？」

「じゃあ、お客さんの楽しいお話がお代ということだ」

「そうですか？じゃあまた来るときにはもう少し話のネタを仕込んでこないといけませんね」

「はい。楽しみにして待っています」

それから毎年夏が楽しみになった。

ほかの季節では味わえない、暑い日差しと熱いお茶、そして彼女。

そしてある年である。

その年もその山を登っていた。

「おい、兄ちゃんどこ行くんだ。危ないぞ」

おじさんに声をかけられた。

「そんな獣道いつちゃ、道に迷うぞ」

獣道？

その山は結構整備されていて、獣道なんてあったけど思った。けれど目の前には確かに獣道があった。

「兄ちゃん、大丈夫か？何なら一緒に登っか？」

「そうですね」

俺は仲良くおじさんと話しながら山を登った。

「ここの山の茶屋が目的でよく登るんですよ」

「そうだな。ワシもふもとの喫茶店よくいくよ。あそこオムライスがおいしいんだよ。兄ちゃんもよかつたら今度食べてみてみるかい」

「ふもとの？山の中腹になかったですか？茶屋が？」

「そんなものねえな。ワシずっとここの山の登つとるけど、そんなもん聞いたこともねえな」

そんなはずはない。

そう思いながら、いつも通り山をいつも通り登った。

茶屋はなかった。

翌年もその山に登っても茶屋はなかった。

山はいい。

君も登ってみるといい。

きつとやみつきになるだろ。

そして、もし君が彼女に出会うことができるなら、どうか俺の代わりにとびきりの話を彼女にしてやってほしい。

おいしいお茶と彼女の笑顔が待っているから。

山の茶屋（後書き）

YAS先生

最近山登りに興味を持っており、先生の作品をふと目にして読ませ
ていただきましたが、とつても心にきゅっと来ました。

少しだけ背中に涼しい感じもありましたが、でもそんなオカルトな
感じではなくて、アリスのような少し不思議な世界に紛れ込んでし
まったような、そんな印象を受けました。

私も山登りする際には、面白いネタを仕込んで行ければと思います。

栖坂月先生

私は昔話が好きで、ネタとしてもよく使うのですが、これは見事な
ダイレクトアタックですね。

タヌキやキツネなどに化かされる話というのは昔話の典型パターン
の一つですが、大抵は敵対関係にあります。実は私、その構図には
昔から少し疑問を持っていましたよ。そもそも、本当に何か目
的 食べ物であれ何であれ、それを求めての行動であったなら、
騙すだけなんてあり得ないと思うんですよ。持ち物を奪ったり、あ
るいは殺したり、いつそ食べてしまったりすべきですね。

もちろん、そういう話もあります。ただ、騙すだけの話の場合、も
っと違う目的があったのではないのかなーと思ったのです。例えば、
今回の話みたいなパターンはありでしょう。

まあ、昔話の元になった体験談は、大半が自分の失態を隠すための
ゴマカシであったり、目を逸らすための方便であったりというのが
実情だと思っていますから、結局は人間のエゴなんだろうと思いま
すがね。

何だか感想とは言えないような話になってしまいました。この話
が何だか微笑ましくて、つつい思い出してしまいました。
また来ます。駄文失礼しました。
それでは

羨望の音

うらやましいな。

そう私は素直に思った。

姉は買ってきたオルゴールをリビングの中央において、ねじを巻いた。

オルゴール独特の物悲しく、繊細な音色が響いた。

そこには両親がいて、姉がいて、私が出た。

きれいな音色だと両親がほめていた。

姉は朗らかにそれにこたえる。

私は、その光景をただ見ていた。

「よかつたらあげようか？」

私は指くわえて見ている子供ではない。

そんなに物欲しそうにしていたのだろうか。

馬鹿にされた気がした。

「いない」

私が冷たく言い放つても、姉の笑顔はゆるぎなかった。

姉はできた人間だった。

そそくさと立ち去る私を見ても怒りはしない。

だからこそ自分が余計にみじめな感じがした。

うらやましい。

いつもそう思っていた。

けれど、もうそうは思えなくなった。

姉が死んでもう数週間たつ。

今ではあのオルゴールは、私の机に飾られている。

「消えてしまいたい」

そう声に出してしまうほど、私は後悔していた。

姉のせいにして自分のあさましさが、姉のいなくなったせいで

どんどんと露呈していくのである。

自己嫌悪の渦の中、私は一人部屋でふさぎこんでいた。

「いいよ」

部屋の扉がバタンと大きな音を立てて閉まる。

扉を見るが誰もいない。

ああ、そうか。

風通しが良くなるように窓を開けていたから、急にしまったんだと思っ、窓を閉めた。

「消えたいのなら、お手伝いしてあげる」

ささやく声が耳元にした。

オルゴールが巻いてもないのになりだした。

私の頭もついにいかれたらしい。

声を無視して眠りにつくことにした。

「あなたもお姉さんと同じ、消えたがっているのよね？」
姉と同じ？

私は思わず幻聴に答えてしまった。

「そんなわけないだろ」

そして、鼻で笑った。

あの姉が何で消えたいと思うのだ。

「彼女は演じていたの。完璧な自分を。そして、そんな自分を嫌悪していた」

まさか？

姉は完璧なのだ。

怒りたいときでも、泣きたいときでも笑顔を絶やさない素晴らしい女性だ。

「そして、あなたのことをとてもうらやましがっていた」
私を？

それこそ冗談だ。

目の前に少女が現れる。

どうやら声の主はこの少女らしい。

「本当よ。自由で、素直に自分の感情を表現できる人間らしい妹だと」

「うそよ」

「それに引き換え、私はまるで人形のようにだと」

少女は私の腹に手を当て、私の顔を見上げる。

「心当たりあるでしょ？」

ないと言えばうそになる。

気づくのが遅すぎた。

姉に対してすまないという気持ちでいっぱいになる。

「消えたいのなら手伝うわ。大丈夫。痛くもないし、苦しくもないわ」

少女は私の体から何かを取り出した。

少女の言う通り、痛くも、苦しくもなかった。

ただ意識がなくなっ・・・た・・・

少女がとりだした何かをシャリシャリと音を立ててかじっていた。

「やはり最期になって、恐怖心が芽生えたのかしら、少し味が落ちてくるわ」

その部屋には死体が一つ。

オルゴールが、その独特の物悲しく繊細な音を鳴らしていた。

足首の手 (R15) (残)

ベッドで寝ていると、足を引っ張られた。

ぐいぐいと強く引っ張るものだから、せつかく気持ちよく寝ていたのに目が覚めた。

時計を見るとちょうど食事時である。

ベッドの下の彼女が、催促しているのである。

このごろ、彼女に食事を与えるのがおっくうでしょうがなかった。最初のうちは、何でも喜んで食べたものだが、今では注文が多い。やれ、肉付きのいい男がいい、若い女がいい、子供がいいなどである。

調達する身にもなってほしいものである。

彼女がぐいぐいと足を引っ張ると、長く鋭くなった爪が食い込んで痛い。

俺はベッドを動かすと、彼女の注文を聞いた。

そこには舞台の奈落のような穴がある。

「・・・欲しい・・・」

「よく聞こえない。ちゃんと喋れ」

しゃがみこんで彼女を見る。

らんらんと輝く彼女の瞳が、闇の中に浮かんだ。

「お前が欲しい」

「プロポーズか？」

グンと体が引っ張られ、俺は奈落に落ちた。

俺は彼女に組み伏せられ、のど元に口づけされた。

ちよつと肉食動物が獲物をしとめるときのように、気道に牙がたてられた。

呼吸が困難になるにつれて、意識が遠のいた。

俺が死んだのを確認して、彼女の食事が始まる。

俺は臓物を食われながら心配していた。

次の彼女の食事はどうしようかと。

足首の手 (R15) (残) (後書き)

桜羽先生

怖かったです・・・!!

2・3回読み直してしまいました。

物語のはつきりとした

始まりがあれば

もっといいものになったと思います。

Aの決意

「彼女が欲しい」

Aは何思ったのかそう呟いた。

「がんばれ」

俺は励ました。

「欲しいだろ、お前も」

「いや、いらん」

「今、はやりの草食男子気取りか？」

「枯れ草の間違いだろ」

「なんでそんな興味ないの？信じられん」

「めんどくさいだろうが。わざわざなんでそんなことに首突っ込みにやならんのだ」

「お前には男としての本能はないのか？たぎる情熱はないのか？パツシヨン！」

「ない」

「実はお前、本当は女の子とか言う設定？」

「そんな気色悪い設定作るな」

「海行こう。海」

「脈絡ないな」

「ひと夏のアバンチュール。俺に触れると火傷するぜ」

「行きたきゃ勝手に行け。一人で好きなだけナンパしてくりゃいいだろ」

「だって。その・・・一人で女の子に声かけるのって恥ずかしい・・・」

「だからって巻き込むな」

「いちごミルク、宇治金時、ブルーハワイ・・・」

「うっ・・・」

「夏の暑い日差しに、冷たいかき氷。おいしいだろうな」

「お前のおごりな」

「やった！つて言うかお前本当に甘いもの好きだよな。女みたい・・」

「好きなものはしょうがないだろ」

「ちよつと服脱いでみる？」

「こんなにヒゲ生えた女がいるのか？」

「うーん」

「考えるな。さつさと行くぞ」

Aと俺は海に来た。

「帰ってもいい？人に酔った」

「いや、何しに来たんだよ、ここまで」

「かき氷食べに・・・」

「ちがーう。運命の女の子との出会いを見つけにだよ。まだ何もイベント起こってないし」

「じゃあ、さつさと振られてこい」

「ひどいよ。お前」

しよんぼりするA。

Aと俺は少し離れた公園でかき氷を食べていた。

「信じられん」

「本当だよ」

「なんで練乳売り切れなんだよ。普通あるだろ。ストックが。これじゃいちごミルクが、ただのいちごだろうが！」

「だから一人で行くの嫌だったんだよ。心に今も深々とげが刺さってるよ。これもみんな甘いもの魔人のせいだよ」

「もうわめくな。うつとおしい」

「練乳一つで延々と愚痴言われる身にもなっつてほしい」

「もついいだろ。目の保養ぐらいにはなっただろ」

「お前意外とエロいな。澄ました顔で、いけない妄想大爆発だな」

「俺をそんな変態扱いするな」

「実は女の子だしな」

「その設定いつになったら消えるんだ」

「俺に彼女ができたら」

「じゃあ、お見合いけ。お見合い」

「・・・まだ、俺結婚ははやいかな？・・・なんて・・・」

「くねくねするな。うっとおしい」

「よし！彼女つくるぞー！」

「がんばれー」

俺はA を励ました。

Aの決意（後書き）

栖坂月先生

やっぱりコメディは落ち着くなー。

すいません。最近夏ホラーのせいでホラー系ばかり書いてるもので、軽快な会話ですね。描写がなくても成立するような工夫も見られて、特に引掛かりや混乱もなく最後まで楽しめました。Aという人物を描く、という点に関しては成功しているように思います。

ただ、会話にこだわったのかなーと見受けられたのですが、それでも小粋な合いの手としての描写は、もう少しあっても良かったのかなと思います。それと、オチが必要かどうかは個人差もあるので強要はしませんが、少なくとももう少しシツカリした締めは欲しかったですように思います。

とはいえ、会話そのものは楽しませていただきました。また来ます。それでは。

緑ねこ

流行りの草食系 枯れ草の間違いだろは面白かった

父親ビギナー

「なあなあ」

俺は妻を揺り起こした。

眠そうに、なあにと起きる妻。

「恭介。なんか熱くないか。熱あるかも？」

俺と妻の間で眠る三歳の我が子は、確かに熱かった。

汗もすぐくかいている。

妻は恭介のおでこに、手を当てた。

「ほんとな。熱あるかも？」

「どうしようか？とりあえず病院連れて行こうか？」

「熱高かったらそうしようか」

妻は体を起こし、救急箱をぐそぐそとあさる。

そして、そこから体温計を取り出し、恭介の脇に挟む。

「ちよつと持つてて」

「あ、うん」

薬箱に戻り、風邪薬を探す妻。

その間俺は、体温計の数字が上がるのをドキドキしながら見ていた。

ピピッと体温計が鳴る。

「37度6分」

「やっぱり熱あるわね。明日保育園お休みかしら？」

おろおろしているだけの俺とは違い、妻はいたって普通だった。

妻はシロップの風邪薬をもって戻ってくる。

「恭介〜」

妻に体半分起こされた恭介は、熱のせいか寝ぼけているのか、うつろだった。

「はい、飲んで〜」

妻が口元に薬をやると、条件反射のようにコクンと飲み込んだ。それから水も少し飲んだ。

「やっぱり病院連れてった方がいいんじゃないのか？」

「明日になつても熱が下がらなかつたら連れて行くわよ」

「でも・・・」

「しつこいわね」

起こされた妻の機嫌は悪かった。

触らぬ神にたたりなしである。

おとなしく妻に従った。

それから妻は氷枕をタオルでくるみ、恭介の着替えを用意した。

妻と一緒に恭介を着替えさせ、エアコンを切り、窓を少し開けた。

「お前、なんか手慣れてるよな。普通母親とかに習うもんなのか？」

「いや、私んとこ歳の離れた弟いるから自然とね」

「そういうもんか？」

「そういうもんよ」

女というものは、自分の子を十月十日腹に宿す間に、母親の気概というものが培われるらしい。

子供が生まれる前の妻は、もっとしおらしくった気がする。

たんに猫かぶりだったのか、母親らしくなったのか分からないが、

少なくとも今の俺よりはましである。

おろおろしているだけの俺。

何とも情けない。

子供が生まれて三年たつというのに、今だ俺は父親ビギナーらしい。

妻はタオルケットの上から恭介のおなかをポンポンと叩く。

そして、うちわで自分と恭介を仰ぐのだった。

「かわるよ」

「はっ？何を？」

「扇ぐのかわってやるよ」

「いいわよ。明日仕事あるでしょ？」

「有給だいが余ってるから、明日は何とか休む」

「そう、別にいいけど」

「いいから。かわれ」

妻からうちわを受け取って、扇ぎ始めた。

十五分ほどしたら、恭介と妻から静かな寝息が聞こえた。二人とも気持ちよさそうに寝ている。

俺はうちわを扇いで、父親レベル1上がった気がした。

父親ビギナー（後書き）

真浦塚真也先生

こういう小説、僕は好きです。

父親の情けなさというか、弱いプライドみたいなのが感じられて、
楽しんで読むことができました。

上ずる声

彼女を抱きしめると、彼女の髪からシャンプーのいい匂いがした。同じものを使っているのに、俺からはそんないい匂いはしない。俺は彼女の耳元に愛していると囁く。

使い古された陳腐な言葉だが、それ以外に俺の気持ちを表現できなかった。

彼女はくすりと笑う。

声が上がっているわよと。

言いなれないからなと、照れる俺に彼女はそうねと微笑んだ。

彼女は俺の腕を抱きしめ、手に口づけした。

そして、愛していると囁いた。

流暢に、きれいな声が静かな時間に響いた。

上ずっていないかと、指摘する俺に、言いなれているからと彼女は悪戯っぽく笑ってみせる。

妬いた？と尋ねる彼女に、妬いていないときっぱり答えた。

拗ねた？と尋ねる彼女に、拗ねてないときっぱりと答えた。

彼女は俺を抱き寄せ、ごめんごめんと謝る。

彼女はどうやら俺の反応を見て、楽しんでいるようだ。

俺は彼女を抱きよせ、彼女の柔らかな頬に口づけする。

彼女の細い首に口づけする。

彼女の艶っぽい唇に口づけする。

そして、愛していると囁いた。

上ずってないと、彼女が残念そうにつぶやく。

これから言いなれるからなと、俺が言うと彼女は満足したように微笑んだ。

彼女の髪からはシャンプーの匂いと、彼女のいい匂いがした。

上ずる声（後書き）

澤またし先生

拝読しました。色気があって実に良かったです。言葉巧みというか、文章のリズムがよくて惹き込まれました。大人の恋愛って言うんでしょうか、落ち着いた雰囲気が好きです。

DMK作戦

彼は大学生だった。

高校生の私とはそんなに歳は離れていないのに、その差は大きかった。

よく子ども扱いされてしまう。

この前の花火大会の時もそうだ。

私は母に頼んで、浴衣を着つけてもらっていた。

「由香、イベント事は男と女が盛り上がるチャンスよ。今日こそ決めるのよ」

「分かったわ。母さん」

奥の方で、父がこほんと咳をする。

どうやら羽目を外しすぎるなよと警告したいらしい。

父よ、残念だったな。

もう私はあなたの知る子供ではない！

彼と付き合って三カ月、そろそろキスぐらいさせてもらっても文句は言わせない。

いや、実際三カ月も付き合ってるのにキス一つもないって、正直どーよっと思うわけだ。

本来こういうものは男性がリードするものだろう。

彼は、律儀なのか、それとも本当は私に興味がないのか。

うーん。

そんなこんなで悶々と悩んでいたら、彼が待ち合わせの場所に現れた。

「おまたせ」

Tシャツにジーンズという極めてラフな格好である。

それにカメラの入ったカバンをもっている。

「浴衣か。風情があつていいね。似合ってるよ。かわいい」
彼の言葉に、私は嬉しくて爆発しそうだった。
母よ、いい仕事をした。

いや、いかん。

こんなことで舞い上がっては、先が思いやられる。

「じゃあ、あとで二人きりで写真撮る？」

彼は私の言葉に、目を丸くしていた。

そして、

「そうだね。せっかくだから、記念に取っておかないとね」
とにっこりと笑った。

どうやら私の先制パンチはヒットしたようだ。

もう戦いは始まっているのだ。

そして最後には、

うっへっへっへっ・・・

などと妄想していたら、花火の見物会場に着いてしまった。

人込みをかき分けながら、丘の方へ向かっていく。

いろいろな屋台が並び、祭りを彩っていた。

ふと奇妙な屋台が目がいく。

「ヨーヨー釣り？」

「知らない？紙の先についた針で、ヨーヨー釣るやつ」

「知らない」

「やってみる？」

「うん」

おじさんに渡された紙の釣竿で、釣ろうとする。

ブチッ。

紙は、いとも簡単に切れた。

詐欺だ！

「残念だね、嬢ちゃん。じゃあ、一つ好きなのもっていきな」
どうやら釣れなくても一つはもらえるらしい。

おやじ、いいやつじゃねえか。

ヨーヨーの輪ゴムを指に通し、ポンポンついてみる。
意外と跳ねる。

おお、跳ねるぞと調子に乗ってついていたら、じっと見ている視線に気づいた。

彼は私がヨーヨーで楽しそうに遊ぶ姿をにんまりとみていた。

「楽しそうだね。見ていて面白い」

しまった、こんなところにトラップが！

恐るべし、ヨーヨーの魔力。

彼の中の私の子供っぽさゲージが上がったことは悔やまれるが、一度の敗北は、一度の勝利であがなえばいいと、常勝の偉い人も言うていたではないか。

ここは気にせず、作戦ポイントに急ぐことにした。

しかし、試練は続いた。

「綿菓子いる？」

欲しい！

しかし、ここは心を鬼にして耐えねばなるまい。

「ううん。いい」

「そう、じゃあ自分の分だけでも買ってくるよ」

彼はそう言っつて綿菓子の屋台に並んだ。

ぽつんと残される私。

・・・

嫌々、おいてかないで〜。

あわてて彼をつかむ私だったが、彼は私の行動を予測していたのか、私を見て満足そうに笑うのだった。

敵も手の込んだ真似を！

それから、なんとかかかんとか花火の見えるポイントまでたどり着いた。

花火はもう始まりつつあった。

「結構人いるね」

「河川敷の方だと席料取られるから、少し眺めが悪くてもここに結構集まるんだ」

「ふーん」

ここにきてようやく作戦が実行されようとしていた。

名づけて『どさくさにまぎれてキスしちゃおう作戦』。

略してDMK作戦である。

母曰く、

『私とお父さんが結婚した時もどさくさにまぎれてしたようなもんだから、大丈夫。結果よければすべてよしよ。ねえ、お父さん』
奥の方で、父がこぼんと咳をする。

どうやら父は、恥ずかしがっているようだ。

正直父と母の馴れ初めなどどうでもいいが、私は覚悟を決め、決行する。

「ねえ」

私はわざと小声で、彼に話しかける。

花火の音で、私の声はほとんど聞こえないのだろう、彼は私の口元に急接近する。

今だ！

私はすきを見て、彼の唇にめがけ突撃した。

ガコツ。

うおおお、は、鼻がー！

私の鼻は、彼の頬骨にぶつかった。

彼はというと、痛がりながらも笑っていた。

そして、うづくまる私をよしよしする。

頭をなでるな！髪型が崩れるだろうが！

私は痛みと切なさで泣きそうだった。

DMK作戦（後書き）

栖坂月先生

あまり敗北が過ぎると金髪の小僧に叱られますよ（笑）
個人的には浮いた言葉を羅列されるより、こういう態度をされる方が弱いですね。

それにしても、キスはともかくとして、どさくさで結婚とかするのはどうなんだろう。

まあ、楽しいのでアリってことで。

ともかく、軽快な文章が心地良かったです。

また来ます。それでは

魔女ジルルキンハイドラへの依頼

深い森の奥に一人の魔女が住んでいた。

魔女の名は、ジルルキンハイドラ。

その姿は幼女の姿をしているが、数百年の歳月を生き、その知識は海よりも深く、ありとあらゆる妙薬の知識をもっていた。

そして、遠くを見渡せる千里眼をもち、彼女の知らないことなどこの世にはないとさえいわれている。

俗世を嫌い、一匹のペットと暮らしている。

ペットの名はトットルツチエ。

人語を解する稀有な黒いライオンである。

ある日のことである。

一人の客人が、彼女の元へ訪れた。

「すみません。どなたかいらっしゃいませんか？」

「ふあ~~~~い」

階下から呼び出されたジルは、階段をドタドタとおり、そして踏み外し、

「はわわわわわ」

客人の前にごろごろ転がり、現れる。

「大丈夫ですか？」

「うつつ、痛いです」

「あのジルルキンハイドラ様ですよね？」

ジルは何事もなかったようにすまして答える。

「はい。そうですね、今日はどういったご用件ですか？」

ジルは腰をさすりながら、客人に部屋の中央にある席を勧め、自分も向かいに座った。

「今日はジルルキンハイドラ様にお願いがあつてまいりました」

「お願いですか？お願いの内容にもよりますが、一応聞きますよ

うか？」

「実は私、身分違いの恋をしているのです。彼女に何度思いのたけを伝えようと、まったく相手にされないのです」

「はあ、そうなんですか。大変ですね」

客人は美形で、線が細くまるで女性のようなのである。

もてそうなのに、とジルは思った。

身なりはそれほど悪くはなく、中流貴族といった感じである。

「そこで思ったのです。何としても彼女を振り向かせたいと」

ジルはお茶をすすりながら、ふむふむとしてる。

「そんな折、あなた様のお噂を聞き、ここまで足を運んだのです」

「要するに惚れ薬が欲しいんですね」

「さすがジルルキンハイドラ様、お察しが良くて助かります」

「ですが、タダというわけには・・・」

「もちろんお金は用意しております」

貴族の男は、テーブルの上に袋を一つ取り出した。

ジルはそれを手にすると、紐をほどき、テーブルの上に中身をぶちまけた。

金貨がテーブルの上を踊った。

「足りませんでしょうか？」

ジルはテーブルの上の金貨を見つめ、うーんと唸る。

「少し足りないかもです。もしよければ、あなたの手の右小指いただけますか？」

「え？右の小指ですか？」

「はい。右の小指です」

貴族の男が後ずさりした時、玄関の戸が開いた。

「ジル、ただいま」

「おかえり。トットルツチエ。えつと、またウサギ？」

「うん。この前ジルに教えてもらった罨いいね。狩りの下手な僕でも簡単に獲れるよ」

「でもでも、ウサギさんばかりだとかわいそうかも」

「でも好きでしょ。ウサギ鍋」

「うん。好き」

玄関から現れたのは、黒いライオンだった。

貴族の男にしてみれば、前門の虎後門の狼である。

男は意を決して、懐から短剣を取り出しかざす。

「・・・では小指を落としますので」

「ま、待つて！そんな物騒なもの仕舞ってください」

「えっ、ですが小指をご所望なのは・・・」

「そんな血なまぐさいことしなくても大丈夫です」

ジルは男の指を花を手折るように、ぱきりと採った。

男は痛みなく自分の指がとれたことに、目を丸くしている。

「じゃあ、惚れ薬探すので少し待つててくださいね」

そうしてジルは奥から薬を探し、男に渡した。

男はジルに感謝し、帰っていった。

「ジル、その指どうするの？」

「惚れ薬の材料にするの」

「さつき渡した薬、また作るの？」

「うん。結構楽しいよ。トットルツチエもやる？」

「・・・僕、遠慮しとくよ」

「そう、楽しいのに」

数日後、貴族の男がまたジルの家をたずねに来た。

「すみません。ジルキンハイドラ様はいらっしやいますか？」

奥の鍋の前にジルはいた。

「すみません。ジルルキンハイドラ様。またお願いがあつてまいりました」

返事はない。

「すみません。ジルルキ・・・」

「うるさい！黙れ！とりあえず三回死んでこい！」

ジルの剣幕に、呆然とする男。

「あー、この前の兄ちゃんだね。今ジルに話しかけない方がいいよ。テーブルと食器棚の狭い空間に、トットルツチェは挟まっていた。」

「あの、ジルキンハイドラ様はどうしたのですか？」

「あー、調査中のジルはいつもあんな風だから、気にしないで。」

「そ、そうなのですか。ではまた出直した方がいいでしょうか？」

「なんなら僕が用件聞くけど？」

動物に相談するのも妙な感覚だと思いつつも、男はトットルツチェに語りだした。

「実は、あの後件の彼女とはうまくいったのですが、その後違う女性も好きになりました。もちろん前の彼女のこと愛しています。」

ですが一度火のついた恋は止められないのです。ここはあの薬の定番だと思い、使いましたところうまくいきます。味をしめた私は、あの薬を使い続けてしまいました。そうしたならば、あれよあれよと関係をもつ女性が増えていき、今ではこの体が持たないほどののです。」

「そうなんだ。」

そう言われれば男の様子も前回訪れた時よりも、やつれて見える。

「ですからジルキンハイドラ様に、薬の効き目をなくす方法を聞きにまいったのです。」

「ふーん。」

「どうしたらいいんでしょうか？」

「どうしたらいいんだろうね？」

二人の間に沈黙が流れる。

どうやらトットルツチェは本当に話を聞いただけらしい。

そんな二人の沈黙を、ジルのできた！という叫び声が切り裂いた。

「あれ、トットルツチェ？お客さん？」

「うん。前の惚れ薬の効き目をなくす薬が欲しいんだって。」

トットルツチェは男から聞いた話をジルに聞かせた。

「そうなんだ。お代の方はお持ちですか？」

「はい」

男は前回のように入った袋を取り出し、ジルに渡した。

「うーん。少し足りないかも？左手の小指ももらっていいですか？」

男は前回の経験から、快く承諾し、今度は惚れ薬の効き目をなくす薬をもらった。

男はジルに感謝し、帰って行った。

「ジル、その指でまた薬を作るの？」

「うん、今度は効き目をなくす薬」

「なんであの薬渡しちゃったの？薬の切れた女の人からどんな目にあわされるかわからないのに」

「いいのよ」

「あの人死んじゃうかもしれないよ？」

「だって私、女だったらしつて嫌いだもん」

「ジルにも男に泣かされた過去があるんだね。なんだか興味あるな」

「トットルツチェ。好奇心猫をも殺すって言葉知ってる？私、猫は殺せても、ライオンは死なないのか興味があるなあ」

「ごめん。ジル。僕が悪かったよ」

その後あの男がどうなったのか誰も知らない。

魔女ジルルキンハイドラへの依頼（後書き）

夢念先生

平易な文章は読みやすく、テンポがいい。

薬の材料が物語りに何らかの影響を与るともって面白くなる気がします。文句を言うのは簡単ですが考えるのはなかなか大変ですね。

楽しく読めました。

魔女ジルルキンハイドラへの要請

深い森の奥に一人の魔女が住んでいた。

魔女の名は、ジルルキンハイドラ。

その姿は幼女の姿をしているが、数百年の歳月を生き、その知識は海よりも深く、ありとあらゆる妙薬の知識をもっていた。

そして、遠くを見渡せる千里眼をもち、彼女の知らないことなどこの世にはないとさえいわれている。

俗世を嫌い、一匹のペットと暮らしている。

ペットの名はトットルツチエ。

人語を解する稀有な黒いライオンである。

ある日のことである。

一人の兵士が訪れた。

「すみません。ジルルキンハイドラ様はいらっしゃいますか？」

「ふあ~~~~い」

ジルは奥の方から、スプーンをくわえたまま玄関にやってくる。

手にもった皿の上では、木イチゴのゼリーが少しえぐられているもののプルプルしている。

「失礼いたします。私はルークベニア王国からまいりました。国王様から親書を預かっております。どうぞ」

兵士は口ウで封をされた手紙を手渡した。

ジルはゼリーを落とさないよう慎重にテーブルに皿を置いた。

「どうしたの？手紙？」

「うん」

トットルツチエが奥から出てくる。

顔にはイチゴジャムがいつぱいまとわりついていていた。

手でぬぐっては、ペロペロとなめている。

「なになに、どんな内容？」

ジルは乱雑に封を切ると、手紙を読みだした。

「えつとねえ、戦争するから、従軍しろって」

「戦争？」

「はい。現在隣国のアッシュラント王国が不審な動きをしていると報告があります。そこでジルルキンハイドラ様の千里眼で、敵国の状況を知りたいと国王は仰せです」

「そう言えば、アッシュラントの方は日照り続きだったから不作続きで大変だろうからね。今の状況じゃ攻めてくるかもしれないね」

「そうですね。アッシュラントはそれほど豊かな国ではありません。ですが、山岳の民というのは屈強で、兵の士気も高いのです」

「それを相手にする兵士さんも大変だね」

「はい。こんなことを言うのはどうかと思うのですが、私も彼らを相手に正直戦いたくありません」

「強いもんね。僕も大きい熊とか見つけたら逃げるもん」

「はい。ですが私は兵士ですので、逃げるわけにはいきません」

「兵士も大変なんだね」

「はい」

トットルツチエと兵士が話している間、ジルはずっと手紙を見たまま無言だった。

「どうでしょう？ジルルキンハイドラ様。私と一緒に来ていただけますか？」

ジルは少し悩み、そして答える。

「お断りします」

兵士は啞然とした。

しかし納得したように、

「・・・そうですね。それでは、もしもの時は力づくでもお連れするよう国王様から仰せつかっております故」

兵士は剣を抜いた。

「ほんと、兵士は大変なんだね」

「ええ、全く」

トットルツチエと兵士の間には緊張が走る。

「ルークベニアは豊かな国です。ですが今回の戦、確実に負けるでしょう。私はわざわざ負け戦に行きたくはありません」

「お言葉ですが、ジルルキンハイドラ様は何故今度の戦が負け戦になるとおっしゃっておられるのでしょうか？」

「ルークベニアでは大商人たちが保身のために大量に人を雇っている。思うように兵が集まっていけないはずですよ」

「そこまでご存知でしたか。さすが、魔女ジルルキンハイドラ様です。ですが、それだけでは負け戦の要因にはならないでしょう。国の手前であれば大商人たちも兵を貸します」

「ルークベニアは地理的に守るに難く、攻めるに易い。それは誰の目に見ても分かることです。だからこそその前の関で敵兵を止めなければいけないが、それができない」

「なにもかもお見通しというわけですね。ですが、だからこそジルルキンハイドラ様のお力を何としてもお借りしなくてはけません」
兵士はいまにもとってかかりそうである。

トットルツチエは牙をむき、のどを鳴らし威嚇する。

「私に策があります。少し待っていてください。国王あてに手紙を書きますので」

ジルは二人の対峙をよそに、手紙を書き始める。

そして、それを兵士に渡す。

「従軍はしません。ですが、この手紙通りにすればルークベニアが負けることはないでしょう」

兵士はまじまじと手紙を見る。

「中身を拝見してもよろしいでしょうか？」

「ええ、もちろん」

「・・・これは?!」

手紙には、

国中の民を連れて、北の街道を使い、アッシュラントを攻めるべしと書かれていた。

目を見開く兵士に対して、ジルはにっこりと微笑んで見せた。

「ジル。あんなのでほんとに戦争に勝てるの？」

「えっ？私は勝てるなんて言ってるよ」

「なんかそれって騙したんじゃない？」

「だましてないよ。いちばんいいと思った方法を提案したんだから」

「ならいいけど」

「あと、トットルツチエにお使いお願いしてもいい？」

「お願いの内容と報酬による」

「お願いはアッシュラントに手紙の配達、報酬は新しい罫を教えるのでどう？」

「うん、分かった。いいよ」

数後日、兵士がまたジルのもとを訪れた。

「すみません。ジルルキンハイドラ様はいらっしやいますか？」

「あー、この前の兵士さん」

トットルツチエは、壁についた耳かきの梵天のようなモフモフで耳掃除していた。

「先日は失礼いたしました。あの、ジルルキンハイドラ様はいらっしやいますか？」

「今ジルは昼寝中だから起こさない方がいいよ。寝起きすごく悪いから」

「そうですね。一言お礼を申し上げようと思ったのですが」

「その様子だとうまくいったみたいだね」

「はい。我が国の被害も少なく、無事アッシュラントを攻めとることができました」

「これから大変だね」

「そうですね。治水に開墾、道路網の整備などやることは山のようにあります」

「ルークベニアの方はどうなの？」

「あそこにはもう何もありません。物資は全部アッシュラントに運びましたから。あるといえば土地と海ぐらいなものでしょう。攻めとられてもいたくもかゆくもありません」

「ふーん」

「それではこれは国王からの謝礼です」

兵士は金貨の入った袋を渡すと帰って行った。

「ああ、おはよ」

「う・・・ん。トットルツチェ。誰か来てた？」

「前に来てた兵士さんが。ジルにありがとうってさ」

「そうなんだ」

「でもさ、ジル。これでよかったの？」

「何が？」

「結局とつかえっこしただけだし」

「いいのよ。アッシュラントに住んでた人は豊かな土地が欲しかった。あそこには海も森もあるわ。それで彼らは十分なの」

「じゃあ、ルークベニアに住んでた人は？」

「開墾するための牛馬もあるし、治水整備やら道路整備するための資金は十分にある。今頃今度は何で儲けようかみんな考えているかも」

「なんか今回のジルっていつになく真剣だったていうか。かつこよかったよ」

「だって私戦争嫌いだもん」

「よく言うよ。この前散々僕のこと殴ったのにさ」

「あれはトットルツチェが悪いんでしょ。ジャム全部食べちゃったから。なんか思い出したら腹立ってきた」

「駄目。ジル。戦争反対！」

その後二国間にはしばらくの間平和な時間が流れた。

魔女ジルルキンハイドラへの要請（後書き）

水守中也先生

会話のやり取りが軽快で楽しめました。

ただ、ジルとトットルツチエのどっちのセリフか、わかりにくいところがあったかもしれません。

戦争の話なのに両国ともにみんなが幸せになるエンドは絶妙ですね。

魔女ジルルキンハイドラへの誘惑

深い森の奥に一人の魔女が住んでいた。

魔女の名は、ジルルキンハイドラ。

その姿は幼女の姿をしているが、数百年の歳月を生き、その知識は海よりも深く、ありとあらゆる妙薬の知識をもっていた。

そして、遠くを見渡せる千里眼をもち、彼女の知らないことなどこの世にはないとさえいわれている。

俗世を嫌い、一匹のペットと暮らしている。

ペットの名はトットルツチエ。

人語を解する稀有な黒いライオンである。

ある日のことである。

一人の商人が訪れた。

「すみま・・・」

「待ってました！」

商人が玄関の扉を開く前に、ジルとトットルツチエは飛びだした。

まるで子供のように目を輝かせる二人に、商人はにっこりと笑った。

「お待たせしました」

ジルは商人にテーブルの席をすすめ、自分も反対側の席に座った。

そして、テーブルの上に置かれる品物にうっとりしていた。

「それではまずトットルツチエ様の分ですね。依頼書通りのものが入っているか確認してください」

商人は袋の中から長さの違うねじやバネを取り出した。

「うん。わかった」

「では、こちらが先日いただいた依頼書ですね」

商人は紙を一枚トットルツチエに渡す。

トットルツチエは紙を見ながらねじを一本ずつ数えるのだった。

「そして、こちらがジルルキンハイドラ様の依頼のものですね」

「はふ〜」

「あの、ジルルキンハイドラ様？」

「ふえ？」

「ご依頼の品、こちらでよろしかったですか？」

「はい！もちろんです！こんな素晴らしいものありがとうございます！ごさいます。いますぐお代もつてきます」

「満足していただいて何よりです」

ジルは奥から金貨の入った袋を取り出し商人に渡した。

「おじちゃん。悪いんだけど」

「なんでございましょうか？トットルツチエ様」

「これ長さが一本違うよ。ほらここ、数が合わない」

「それは失礼いたしました」

「うー。また入荷するまで待たないといけないのかー」

「いえいえ、これは短くするだけですから大丈夫でございます」

商人は懐から変わったハサミを取り出し、ねじの長さを測って印をつけ、パチンと切った。

「すごい！何それ？」

「ねじを切る道具でございます」

「もしよかつたらでいいんだけど、それ僕に売ってよ」

「申し訳ございません。こちらは売り物ではございませんので」

「そうかー」

うなだれるトットルツチエ。

「ですが同じものが手に入りましたら必ずお持ちいたします」

「ほんと?!」

一転して喜々とするトットルツチエを商人は微笑んで見ていた。

「それではまた。何かありましたらお気軽にお申し付けください」
商人はぺこりと会釈して帰って行った。

「ジル。ちょっとジル！ずっとほけつとしてどうしたの？」

「ああ、トットルツチエ何？」

「もういいよ。というかその本の山なんなの？古文書とか、薬の調合レシピとか？」

「うん。これはもう滅んでしまった国で書かれた物語なの」

「ふーん。面白いの？」

「うん！これなんかすごいよ！ポリリン又っていう作家が書いたものなんだけど、これは彼女の処女作の地底戦記アシユラ王っていう作品の幻の七巻。作者の死後、遺書と一緒にこの原稿が出てきて本になったんだけど、版權を争っているところで争いが起きて、結局自費出版になっちゃたものだから冊数が限られていて勝手に入らないレアものよ。あと、これなんかは・・・」

「僕、材料揃ったから新しい罫作ってくるよ」

「ちよつと！トットルツチエ！まだ話し終わってない！」

数日後、商人がまたジルのもとへ訪れた。

「駄目！来ちゃダメ！」

「トットルツチエ様!？」

商人が玄関を開けると、トットルツチエが飛び込んできた。

奥からゆらりゆらりとジルが現れる。

「ジルルキンハイドラ様?! 一体どうしたのですか、ジルルキンハイドラ様は？」

「あれからずっと本を読んでいて、一睡もしていないんだ」

「あれから。ずっとですか？」

「うん。ずっと。だからまた本を渡したら、絶対寝ずに読み続けるに違いないんだ」

「うへっ、本・・・本 本」

「だから早く逃げて、おじちゃん」

「逃がさないわよ・・・私の本」

異様なジルを前に二人は後ずさる。

「誠に申し訳ないのですが」

「何？おじちゃん」

「今回本は持つてきていないのです」

ジルの歩みが止まり、硬直する。

商人は懐から変わったハサミを取り出した。

「先日、トットルツチエ様に依頼されたものです」

「あー。ねじ切るハサミ！ありがとうございます、おじちゃん」

「いえいえ」

「今お金持つてくるから」

トットルツチエは奥から金貨の入った袋をくわえて、商人に渡した。

「それではまた何かありましたら、お気軽にお申し付けください」

商人はぺこりと会釈して帰って行った。

「本・・・ない」

「うん。そうみたい。残念だったね、ジル」

その瞬間ジルは静かにその場に倒れた。

「ジ、ジル?!」

ジルは、穏やかな寝息を立てていた。

「ああ、おはよ。トットルツチエ」

「なんか言うことあるでしょ、ジル」

「私は本が好き」

「・・・違うでしょ。ほんと心配したんだから」

「ごめんなさい。私が悪かったわ。トットルツチエ」

「うん。分かってくればいいよ」

「これからは徹夜は一日おきにする」

「懲りてないでしょ」

「だって私本が好きだもん」

その後ジルルキンハイドラ様を見つけても、本を与えてはいけな
いという噂が広まった。

魔女ジルルキンハイドラへの誘惑（後書き）

栖坂月先生

魔女三部作、読ませていただきました。

三つ目は少しネタ的に弱い気がしましたが、短編集として考えれば全体的にレベルの高い作品であることは間違いないと思います。軽快でありながら、しっかりと謎を含ませて展開し、最後は綺麗に締められています。本当にストレスなく、作品を楽しむことができました。

長編にするの内容的には難しいと思いますが、シリーズ化はアリのような気がしますね。これで終わってしまうのは、ちょっと惜しいような気すらします。

また来ます。それでは

井戸の底 (残)

私は生きている。

たぶん生きているのだろう。

ここは暗くて、何も見えない。

日の光も、月明かりでさえ入ってこない。

体は全く動かないけれど、髪も爪も伸びている。

腹に刺さった包丁のせいで、熱くうずく痛みは絶え間ない。

今も腹からは血が流れ続けている。

時々桶が落ちてきて、私の血で赤く染まった水を汲んでいく。

人の声もたまには聞こえる。

その声がたまらなく恨めしくもあり、恋い焦がれるものでもあった。

ある日、私は気づいた。

髪の毛の先が少し自分の意思で動かせることを。

この髪を井戸の外まで出すことができれば、もしかしたら誰か私に気づくんじやないか、そう思った。

私の髪は、まるで植物のツタのように井戸の壁を這っていく。

少しずつ伸びる髪が、たまらなくうれしくなった。

早く伸びろ、早く伸びろ、そう念じた。

ジャポンと水の跳ねる音がした。

誰かがいたずらで小石を投げ込んでいるのだろうか？

早く止んでほしい。

しかしそれが止むことはなかった。

今度は私の体にドサツと砂がかかった。

私は気づいた。

この井戸は今埋められている。

髪はまだ井戸の入り口には達してはいない。

たぶん気づかれないだろう。

私は叫びたかったが、声は出なかった。

私は生きている。

私はここにいる。

誰か助けて。

無情に降り積もる砂。

そして、私は埋められた。

私は生きている。

たぶん生きているのだろう。

息苦しく。

体中の骨がきしんでいる。

相変わらず腹に刺さった包丁は、私に熱くうづく痛みを与えている。

髪の毛は以前と同じように少し自分の意思で動かせるが、砂の重みで思うように動かない。

私は絶望した。

ある日、私は気づいた。

爪の先が少し自分の意思で動くことに。

私の爪は地上を目指した。

それは発芽する芽のように、確実に土をえぐり地上を目指す。

髪の毛の伸びる速度に比べると、やはり遅いものだが、私はたまたまなくうれしくなった。

私は祈った。

爪が地上に出て、私の存在を示すことを。

私が生きていることを示すことを。

私の爪は今も地上へ向かい伸び続けている。

空蝉の子

俺は散歩に出ることにした。

たまった仕事をほったらかしにして、気ままに外に出るのは存外いい気分である。

しかし、夏の日差しはきつく、俺はすぐにばてた。

近所の公園を探して、休むことにした。

ベンチに腰をかけ、タバコをくゆらす。

夏休みに入っているのだろう、小学生が楽しそうにはしゃいでいる。できることなら俺にその元気を少し分けて欲しいくらいである。

俺にも夏休みが欲しい。

俺にあるのは、くだらない仕事の山だけである。

仕事を忘れるために散歩に来ているのに、散歩して仕事のことを思い出すとは、いつから俺はこんな真面目人間になったのだろうか。

立派な大人になったものだ。

嬉しくて反吐が出る。

少年たちよ、決してこんな大人になるんじゃないぞ。

はしゃいでいた少年たちはもういない。

元気なことである。

いるのは一人だけである。

ぼつりと一人だけ男の子がいた。

その男の子はじつと木の幹を見ていた。

何かあるのだろうか、少年のそばに寄ってみると蝉の抜け殻があった。

「蝉か・・・」

「うん」

「珍しいもの見つけたな、坊主。これは蝉の抜け殻だ。蝉の幼虫が成虫になった時のものだ」

「これは蝉のおうちじゃないの？」

子供の発想には驚かされる。

俺は立派な大人になりすぎて、彼の言うことに笑ってしまった。

「おうちじゃないな。蝉は大人になったらもうここには入らないよ」

「そっか・・・じゃあ、僕が住んでもいいのかな？」

「坊主が住むのか？ここに？」

俺は思わず、住めるものなら住んでみるがいいと言いそうになって、言葉をのんだ。

子供の純真な心を目の前にすると、自分がいかにすさんでいるかをまざまざと実感させられる。

「駄目かな？」

「まあ、無理だろうな」

「そっか・・・」

「坊主にもうちがあるだろ？それで我慢しろよ」

「でも、僕お母さんに追い出されちゃったし・・・」
「なんだ、家出少年か？」

またややこしいのに関わっちまったなあ。

少し声をかけたことに後悔し、とりあえず警察かなあと携帯を取り出す。

「なあ、坊主。今警察呼ぶから、おまわりさんに君の母さん説得してもらおう」

俺は少年をあやすように頭をなでようとした時、少年は驚いたように後ずさった。

ああ、こいつは俺と一緒に。

少年はおびえたような眼で俺を見ている。
知ってるもんなあ、この眼。

俺は携帯をしまい、少年の目線と同じになるまでしゃがんだ。

そして、俺の手がちゃんと見えるように、下から彼の顔にゆっくり手を近付けた。

彼の頬を指でなでてやる。

しばらくなでやると、安心したのか、頭をなでも逃げなくなっ

た。

それから抱きしめてやった。

少年は落ち着きなさそうにまごまごとするが、放してはやらなかった。

彼の呼吸に合わせて、抱きしめた腕の上からトントンと心地よい振動を与えてやる。

少年はコクリコクリとしながら睡魔と闘うが、ついに負けてしまう。俺は少年を抱きかかえ、ベンチの方に連れて行く。

少年の服をたくしあげると、やはりそこにはあった。

昔自分の体にもたくさんあったあざである。

しかし、弱ったなあ。

気楽な散歩が思わぬ拾いものをしてしまった。

これからのことを考えると非常に憂鬱だ。

俺に出来ることは限られているとはいえ、乗り掛かった船である。

何も知らんふりはできなかった。

とりあえず俺に出来ることといえば、眠っている少年に、俺みみたいな立派な大人になるなよと語りかけることぐらいだった。

空蟬の子（後書き）

栖坂月先生

これは上手いですね。

始まりから終わりが全く予想できませんでした。少年の少年らしさに感心する辺りまでは普通の印象だったのですが、その後の展開が急激でありながら無理がなく、主人公の大人びている部分を説明することなく深く納得させてくれました。

これは鮮やかです。

山羊ノ宮先生には一人称が向いているのかもしれないね。改めてそんなことを思いました。

それでは

夢念先生

読んだ2作続けて展開がほぼ同じだったので結構びっくりしました。

夏休み（土師海月先生・その他）を、この作品の前に読みました。

両者共に自分の過ぎてしまった夏休みに思いを馳せる筆者が、少年に語りかける物語なのですが、僕自身は等身大の過ぎてしまった夏休みに対する率直な侘しさみたいなものをもっと詳細に読んでみたいなあと思いました。むしろ少年との距離がもっとあったほうが、リアルで面白く語れるんじゃないかなと。

七曜の花　　・月の花―

森の中に一輪の花があった。

夜にしか咲かない大変珍しい花で、月光を浴びキラキラと輝いていた。

その花には精霊が宿り、花の手入れをしていた。

葉を食む虫やカタツムリなどを引っぺがし、近くの泉から水を汲んでは与えていた。

キカン坊のイノシシにこのあたりを荒らしてくれるなど注意したりもした。

また、時折やってくるフクロウなどと一緒に、神々への賛歌を歌ったりもした。

花の精霊は、花の世話をすることに喜びを感じていた。

ある日、一人の狩人が道に迷い、森の奥へとやってきた。

そして泉で精霊と出会う。

「何と美しい」

思わず狩人は声に出していた。

泉で水汲みをしていた精霊は狩人の気配を感じると、そこに水をぶっつけた。

「立ち去りなさい。人間。ここは、お前のような卑しきもの来るところではありません」

「帰りなさいと言われても、私は道に迷いここまで来たのです。何処をどう行けばいいのやら」

ずぶ濡れになりながら狩人は弁明する。

「では、案内するものを紹介しよう。そして、さっさと立ち去るがよい」

精霊はフクロウを呼び出し、狩人にフクロウについていくよう言った。

そして、精霊は踵を返し、立ち去った。

（美しい。あの美しさは人外のものなのだ。人の身に余る美しさという訳か）

狩人は一目で精霊に恋に落ちていた。

フクロウに連れられて森を出る間、ずっと精霊のことを考えていた。森を無事出ると、狩人はフクロウに礼だと言い、昨日捕らえた獲物を差し出した。

そして、

「フクロウよ。この恩、感謝してもきれない。どうか明日も供物をもってくるので受け取ってはくれないか？」

と言った。

フクロウは了承したのかしていないのか、狩人の上をくるくる回って森の方に消えていった。

翌日、狩人はフクロウと別れた場所に獲物をおいて、フクロウを待った。

フクロウが来てくれるか心配だったが、無事来てくれて獲物を受け取ってくれた。

そして、狩人は森に消えたフクロウの後を急いで追った。

追いながら今度は迷わぬよう、木々に傷をつけていく。

うっそうとした森を抜け、たどり着いたのは精霊にあった泉である。

そこには精霊はいなかった。

落胆する狩人。

狩人は夜露に濡れることも気にしないで、その場に寝転がり、目を眺め、星を数え、彼女を待った。

「そこで何をしている」

狩人がうとうとしかけた頃、声をかけるものがいた。

狩人は飛び起き、声の主を見る。

（やはり美しい）

そこには精霊が立っていた。

「何をしていると聞いている」

「また道に迷ってしまつて・・・」

「そうか、ではまた使者を呼ぼう。そしてとつと失せるがいい。人間」

そう言つて踵を返し、立ち去ろうとする精霊をあわてて呼び止めた。

「待つてくれ。すまない、嘘をついた。実は君に会いに来たんだ」

「私に？」

「実は君に一目会つたときから好きになつてしまつたんだ」

「戯言を」

「これは嘘じゃない。真実だ。信じてくれ」

「くだらない。人間、言葉を選べ。貴様のはらわたこの場でぶちまけたいのか？」

「本当だ。愛している」

精霊は鼻で笑い、立ち去つた。

「俺はまたここに来る。君に俺の気持ち伝わるまで、何度でも、何度でも」

精霊の答えは返つては来なかつた。

狩人は肩を落とし、森を後にした。

その日から狩人は、精霊のもとを毎日のように訪れた。

そして、毎回のよう拒絶の言葉を浴びせられ、落胆して森を後にするのである。

時には狼や熊をけしかけられたこともあつた。

それでも狩人は精霊のもとを訪れ、愛をささやくのである。

だが、月日とともに少しずつの変化はあつた。

それが、狩人にとってたまたまなく嬉しかった。

やがて、精霊のかたくなに閉ざしていた心の扉は開かれ、狩人に興味をもつようになった。

興味は、好意に変わり、精霊は自分でも気づかぬうちに狩人に恋していた。

しかし、

「私は怖い」

「怖い？何が？」

「例えば、もし、仮にだ。私たちが恋人同士となったとしたら、どうなるのだ？」

「どうにもならない。こうやって二人で過ごす幸せな時間を噛みしめるだけだ」

「だが、人間は短命なのだろう？そんな時間はあっという間に過ぎてしまう」

「精霊はそれほど長寿なのか？」

「分からない。私は気づいたころにはここにいたからな」
「そうか」

二人は月光の中、寄り添い座っていた。

普段傲慢ともとれるほど強気な彼女が、うなだれている。

狩人は何とか励ましたいとは思っただが、何もいい言葉は浮かばない。

何か良い手はないものかと、思いは巡るだけである。

ふと、狩人は一輪の花に目がいく。

おもむろに狩人は、花を手折り、彼女の髪にさした。

「美しい」

彼女は髪にさした花に気づき、

狩人に向かい、

につこりと微笑んだ。

そして、彼の懐の中で光の粒となって消えた。

彼女の消える様を見て、狩人は驚き、彼女を求めて森を探しまわった。

彼女の名を叫び、森を駆け回った。

彼女のことを森の動物たちに聞いて回った。

彼女はもういなかった。

後には手折られた花が月光に照らされているだけである。

七曜の花　　・火の花―　　（残）

「バルカス。ああ、どうか無事で帰ってきて」

「分かっているよ。ウル。きつと君のもとに帰ってくる」

二人は抱き合い、熱いベーターを交わした。

コホンと一つ、咳ばらいが二人の後ろから聞こえた。

「すまないが、そろそろ出発しようと思うのだが」

「神官長様。すまない、ウル。それじゃあ行ってくるよ」

「本当に気をつけて」

二人は再び抱き合い、また唇を重ねた。

神官長は、げんなりした顔でその様子を見ていた。

いつまでたっても終わらない二人のやり取りに、神官長は業を煮やし、バルカスの首根っこを引っ張って、連れ出した。

「ウル！必ず戻ってくるよ！」

「バルカス！愛しているわ！」

「俺もだ！ウル！愛しているよ！」

二人の愛の告白が、村中をこだました。

神官長は何も聞こえないと無視して、ほかのメンバーのいるところへバルカスを連れていく。

その村では習わしで、火山の火口に咲く花を年一回奉納する儀式がおこなわれていた。

当然その儀式は危険を伴い、何年かに一人は事故死するものもいた。それでも儀式が行われ続けてきたのは、ひとえに村の近くにある火山への恐怖なのだろう。

今年、花を火口に取りに行く役目を受けたのは、バルカスという若者だった。

今年結婚したばかりで、役目に対しても腰が引けていた。

だが、村のため、ひいては自分の妻のためであると、神官長の説得

で役目を引き受けたのである。

バルカスの一団は、火山の火口に着いた。

「この穴を降りたところに、花は咲いている。くれぐれも慎重に頼むぞ」

神官長はうなだれるバルカスに言い聞かせる。

「やっぱり俺には無理だ。誰かかわってくれないだろうか？こんな底も見えない穴の中に飛び込むなんて、俺にはできない」

土壇場になって、バルカスは臆病風に吹かれたのか、穴に下りようとしぬい。

それを見た村の男の一人が、バルカスに言い聞かす。

「俺も去年降りた時は、そう思ったぜ。でも一人だけが降りるんじゃないんだ。ちゃんとお前の命綱、俺たちが持つてやるから、信用しろ」

「本当か？」

「本当だ」

「本当に本当か？」

「本当に本当だ」

「本当に本当の・・・」

「しつこいぞ。バルカス。何なら命綱なしで今から穴の中に蹴落とすでもいいんだぞ」

「わ、分かった」

バルカスは嫌々ながら、命綱をつけて穴の中へと降りて行った。

穴の中はあつく、長い道のりをゆっくりと降りていくと、底に着いた。

その花はすぐに見つかった。

小さく白い花であった。

バルカスは、その花を手早く探ると、命綱を二度強く引つ張った。

綱は自分の体を持ち上げ、上へと向かった。

バルカスは緊張しながらも、頭の中では愛しのウル笑顔でいっぱ

いだった。

もうすぐウルに会える、そう思った時、不意に体が浮いた。突然のことに浮いたと思ったのだらう、実際には落ちていた。体を支える綱はなく、体を岩肌にたたきつけられながら底へと落ちた。

「これでいいんですかい？神官長様？」

「ああ、今ので確実に死んだだらう。十年に一度の贄だ。毎回のことだが、気がめいるよ」

「俺も去年聞いた時には驚きました。花の奉納の儀式自体がカモフラージュだったなんて」

「そうだな。贄と言うと村のみんながみんな納得してという訳にはいかないからな。仕方なしにと言ったところだよ」

そう言つて、神官長は切れた綱を神妙な面持ちで見っていた。

「これ、そんな人間。もう死んだか？」

「誰だ・・・何も見えない・・・誰か居るのか？」

「我か？私の存在などどうでもよかるう。それよりもじゃ、貴様の摘んだ花を返してはくれぬか？我には大切なものじゃ」

「ああ・・・構わない」

バルカスは懐から花を取り出した。

「俺からも願い事してもいいか？」

「何じゃ？言うてみい」

「妻のウルに会いたい・・・一目でいい。ウルに・・・ゴフッ」

「死の淵にして、妻のことを思いやる。人間にしては殊勝なことじゃのう。いいじゃる。かなえてやらんこともない。だが、生きてという訳にはいかんが・・・」

バルカスは答えない。

彼は、もうこと切れていた。

「なんじゃ、もう死んだのか。他愛もない」

バルカス無き一団が下山しようとしている時、それは起こった。地響きがしていた。

「何だ!？」

「何が起こっている!？」

村中が混乱していた。

「神官長様!これは一体?」

「・・・何故?分からない。私には分からない!」

一人逃げ去ろうとする神官長を、取り押さえる村の男。

「逃げるな!」

「しかし・・・」

ドスンと音を立てて、男たちの間に石が落ちた。

男たちは皆一様に石のもとあつた場所を見た。

火山が轟音を立て、噴火していた。

灼熱の灰と礫が、降り注ぎ、マグマはほどなくして村を溶かしこんだ。

そこには冷徹な死しかなかった。

やがて、数年がたち、そこにはもう誰も住まなくなっていた。

いまでは村の跡に小さな白い花々が美しく咲き乱れているだけである。

七曜の花 - 火の花 - (残) (後書き)

夢念先生

暑苦しい夜に読みました。

ウルは、最後死んだと想像するのですが、どうなったのか気になりました。簡単にでも説明があるといいかもしれません。

七曜の花　　・水の花―　　（残）

「すまない。どうしてもその花が必要なんだ」

「でも・・・」

「無理を言っているのは十分に分かっていて。でも、君以外に頼ることはできないんだ。その花がないと俺は破滅してしまうんだ。お願いだ、ジュネ」

「・・・分かったわ。愛するあなたのお願いだもの。なんとかしてみるわ」

夜の海上に二人の影が、忍ぶように漂っていた。

「でも、今すぐにはいかないわ。次のお世話当番の来週になるわ」

「ああ、それでかまわない。こちらも用意しておくよ。二人で、地の果てにでも逃げよう。でも、無理だけはしないでくれ。一番心配なのは君のことなのだから」

「ありがとう。ベネトン。きっとあなたのもとに花を届けてみせるわ」

「ありがとう」

そう言つて、二人は別れた。

そして、それぞれが帰るべき場所へ、帰っていった。

人であるベネトンは陸へ、人魚であるジュネは海底へ。

その花は海の底に咲いている。

人魚たちに守られながら、海の神の寵愛を受け、青く咲き続けているのである。

人間たちにその存在が知られたのは、ある探検家の伝記によるものであるが、数々の偽物の存在によって、その花を追い求めるものは少なくなつた。

しかし、その数少ないものの中に一人の男がいた。名をベネトンという。

ジユネの花の世話当番の日がやってきた。

ジユネが思っていたよりもスムーズに、花を奪い去ることができた。日頃のジユネの勤勉さが功を奏したのである。

高鳴る心臓を抑え、彼女はベネトンのもとへ急ぐ。

「ジユネ！」

低く囁くようにベネトンは名を呼んだ。

普段より大きな船がそこにはあった。

「ベネトン！」

「こちらへ。大きな水槽を用意している。これで一緒に逃げよう」

「分かったわ」

ジユネはベネトンに抱きかかえられ、船内の狭い水槽の中におさまった。

水槽の中でジユネは想像した。

これからのことを。

決して楽な未来ではないだろう。

だが、愛するものと二人寄り添って生きていけるのだ。

これほど幸福なことはない。

ジユネが想像の羽をはたかせていると、笑い声とともにベネトンがやってきた。

「ベネト……」

ジユネは彼の名を最後まで呼ぶことができなかった。

ベネトンの隣に女がいたからだ。

「隣りの女は何？」

「ああ紹介がまだだったね。彼女は俺の恋人のカーラだ」

「恋人？私に囁いた愛しているという言葉は嘘だったと言うの？」

「いや、愛しているさ。俺の大事な商品なんだから」

ジユネの顔はこわばり、全身が金縛りにあつたような衝撃が走った。

「この花だよ」

「本当に本物なの？」

「ああ、本物さ。もし信じてくれなくても人魚と一緒になら、信じてくれるさ」

「それでも駄目だったら？」

「人魚だけでも珍しいものだ。それなりに金になるだろ？」

「それもそうね」

ベネトンたちは来た時同様、笑い声をあげてジユネのもとと去っていった。

自然とジユネの瞳からは涙が流れた。

情けないやら、悔しいやら、悲しいやら。

ただただ涙は、溢れてくるのである。

「まったくもって情けないわね」

ジユネの目の前には、花に宿る精霊がいた。

「あなたは泣くしか能がないの？何でもつと言い返さないの？何なら私が今から行って、あの男の頭かち割ってやるうかしら！」

憤慨する精霊に、ジユネは目を丸くしていた。

「でも一番ムカつくのは、人魚に花の世話をまかせっきりにしてこんな羽目になっている私自身ね」

「いえそんなことは。今回のことはすべて私のせいでございます」

しゅんとするジユネに対して、鼻を鳴らす精霊。

「まあ、いいわ。それよりも早くここから出るわよ」

「え？一体どうやって？」

「その花を飲み込みなさい」

「そ、それでは精霊様は一体どうなるのです？」

「私のことなんか気にしないで早くしなさい。時間は刻一刻と流れているのよ」

「はい」

ジユネは精霊の言われるがまま、花を飲み込んだ。

それがどのようなことになるのかも分からず。

ジユネは水槽から出た。

ただたどしく両足で体を支え、何とか船外に出ることができた。人間の姿になっても、海の中で息ができるらしく、ジュネはなれない足で必死に泳いだ。そして水底に。

「お前はしたことの重大さを分かっているのか？」

「はい」

ジュネの前には海の神がいた。

ジュネはただひれ伏すだけで、何の弁明もせず、そこにいた。

「ではこれからどうなるのかも分かっているな？」

「はい」

「そうか。ではこれより刑を執行する。誰かこの者を連れて行き、岩に張り付けにして、串刺しにするがよい」

「すまない」

刑を執行するものが、そうジュネに言った。

「いいのよ。私が悪いんだもの。あなたは気にしないで」

「できるだけ苦しめないようにするから」

「ええ、お願い」

海の神も残酷なことをするとジュネは思った。

目の前にいるのは、ともによく過ごした友人だった。

しかし、誰にもみとられずに死にいくよりは、幾分かましかとも思った。

「では、刑を執行する」

友人の手に握られた槍は、深々とジュネの体を貫き、その傷跡からは血が漂っていた。

血の匂いに誘われて、サメが早々とジュネの周りをまわっている。

そんな中、血のもやとともに精霊が現れた。

「まったく、ひどい目にあったわ。・・・その人魚。早くそいつの臓物から花を取り出しなさい。早くしないと花が溶けてしまうわ」

友人は苦虫をつぶしたような表情でジユネの腹をえぐる。

出てきたのは、花の種。

「それを植えて、また一から育てるのよ。分かったかしら？では、私は忙しいから後はお願いなね」

そそくさと消える精霊。

あとに残されたのは人魚たちと花の種だけである。

今でもその花は人魚たちに守られそこにある。

海のそこで青く咲き誇っているのである。

七曜の花　　・木の花―

初めは何の変哲もない森だった。

その変った一本の木が生えるまで。

その木はほかの木とは違い、一切花をつけなかった。

その木はただ真っ直ぐに上へ上へと、伸びていった。

花をつける養分も、実にためる養分も、全てがその木の成長に使われた。

木はやがて森自体を覆うほど巨大になった。

森にあつたほかの木々は、日陰となりやせ細っていった。

当然その木への不満はつのも、木々たちは神に奏上することにした。

「あの木はどんどん天へ伸びております。あの木は愚かにも神々の住む天上を目指しているのです。どうかあの愚かものに、自身の立場というものを分からせてやってほしいのです」

神はその話をうのみにし、憤慨した。

すると、瞬く間にその木の上空に雷雲が立ち込めた。

神の鉄鎚とばかりに、稲妻がその木を真つ二つにした。

そして、また普通の森へと戻っていった。

ある日、その森に木こりが一人やってきた。

「おや、どうしたんだね。怪我でもしたのか？」

「そんなところよ」

森の中で、木こりは少女に出会う。

少女は、這いつくばったまま、動こうとはせず、ただ木こりを見ていた。

うつろな瞳は焦点があつておらず、しつかりした口調とは裏腹に、どこか寂しげであつた。

「何なら家まで送ろうか？娘一人、こんなところじゃ危ないぞ」

「ええ、そうね。それではお言葉に甘えるところでしょうか」

木こりは少女を背負い、少女の指さす方へと進んでいった。

「ここでもいいわ」

「ここかい？何もねえでねえか」

そこには、稲妻に裂かれたその木があった。

裂かれた木は、苔むして良い苗床になっている。

「ここでもいいのよ。私はこの木に宿る精霊なのだから」

「へー、おつたまげた。精霊さんなんて初めて見るぞ」

「初めて会う精霊が、こんな腐った木の精霊なんて残念ね」

「そんなことないぞ。俺は木こりだからな、木の精霊なんてものには嫌われて当然だから、多分もう一生精霊なんかに会うことはねえだろう」

「そう、嫌われ者なのね。私と一緒にだわ」

くすくすと少女は笑った。

「そうだわ。これも何かの縁ね。ひとつお願いしてもいいかしら？」

「何だね？お願いってのは」

「この腐った木で花を彫ってほしいの」

「彫りもんかい？俺はやったことねえから無理だよ」

「へたくそでも構わないわ。あなたが彫ることに意味があるのよ」

「そうかい。そんなんだつたら、引き受けなくもねえが」

木こりは少女の言う通りの場所の部分を取り、材木を手に入れた。

「花ができたらまた来て。待っているわ」

木材をもちかえった木こりは、湿ったそれを天日干しして乾かし、彫ることにした。

出来上がったそれは、おおそ花とは呼べるものではないが、これは花なのだと主張すれば、なんとなく花に見えないこともない出来だった。

木こりはその花をもって、少女のもとを訪れた。

「あら、また大変なのが出来上がったわね」

「だから言っただろ。無理だつて」

「ふふふ、失礼。じゃあ、そこに置いてもらえるかしら」
精霊は裂かれた木の中心を指差した。

「これで何が起こるんじゃ？」

「まあ、見てなさいつて」

不格好な花は、その場に置くと、枯れていった。

そして実をつけ、実は育ち、種を落とす。

種からは芽が出て、苗木に、そして大きな木へと変貌していく。
木こりたちの目の前にはかつてあった巨大な木があった。

「こりやすごいな」

「そうね。これもあなたが手伝ってくれたおかげよ。褒美にこのあたりの木は全部あなたにあげるわ」

「そりやすげーや」

あたりの木々が戦々恐々とするさまを見て、少女はシニカルに笑った。

「じゃあ、この木がいい。いい材木がとれそうだ」

木こりは巨大になった木を指差し、斧を振りかざした。

「ちょ、ちよつと待ちなさい！」

カツン。

森じゅうに乾いた音が響いた。

「その木は駄目！あんた正気なの？」

カツン。

「駄目つて言ってるでしょ！さつきやつと蘇った木なんだから！」

斧が奏でるリズムは、やむことなく続いた。

少女が脱力してへばつていると、木こりが汗をふきやつてきた。

「そろそろ倒れるから、危ないぞ」

「あんた、私があこの木の精霊だつて言ったの聞いてなかったの？」

「ああ聞いたよ。だからまた俺が花を作つてやればいいんだろ。もしたらまた木が生えて、俺はその木で大もつけできる」

「あんた馬鹿？」

バキバキと轟音を立てて倒れる巨木。

それを見つめる木こりと精霊。

「じゃあ、また花彫つてもつてくるから・・・」
話しかけた先に精霊はいなかった。

「何じゃ、せつかちなやつじゃ」

そこには巨大な木の跡がある。

その中心には花のようなものが供えられていた。
ただその花は、苔むした緑色の塊のようである。

七曜の花　　・金の花―　　（残）

あるところに非常に優秀な金細工の職人がおりました。名をコールストン。

彼は最高傑作をもつて王様のもとを訪れました。

「こちらが私の作品にございます」

王様をはじめ、皆一様に感嘆の声をあげました。

コールストンの献上したのは、金色の花でした。

「どうぞ触れてみてください」

王様は恐る恐る花の花弁に触れてみました。

冷たい感触とともに、そのしっとりとした触感に驚きました。

まるで本物の花びらのようでした。

「金は元来柔らかい金属でございます。その柔らかさを花の柔らかさ、葉っぱの柔らかさ、それぞれに合った柔らかさにするのは、この私でも骨が折れました」

コールストンの言葉に、みんなは早く花に触れてみたいと思いましたが、王様は大層気に入ったのか、花をはなそうとしませんでした。「では、褒美をとらそう」

コールストンは少し考えた様子で、

「いえ、褒美は明日頂きます。その花にはまだ仕掛けがございます、それを見ていただいてからでも遅くはないでしょう」と言いました。

「仕掛けとな？」

「はい」

「では明日を楽しみにするでしょう」

コールストンは恭しく礼をして、王様の御前を退きました。

そして、次の日。

コールストンは意気揚々と王様の前に現れました。

「本日もご機嫌麗しく・・・」

コールストーンは周りに流れる空気の変化に気づきました。王様はひどく不機嫌でした。

まるで気に入っていたおもちゃを取り上げられたような、そのような感じでありました。

「これは一体どういうことなのか？」

そこには金色に輝いていた花が、錆びて枯れていました。

「これこそが、私の見せたかった仕掛けでございます。元来金というものは、非常に物質の変化をしない安定した金属なのでございます。金が錆びるなどということは非常にまれな現象でございます」

「では、これは金のメッキがはがれたということじゃな？」

「いえ、これはまさしく金でできた花なのでございます。それがこのように錆びるということは非常に珍しい現象なのでございます」
コールストンの必死の説得も王様は納得していませんでした。

「金属の美しさとは、不変である故価値があるのであって、このような形になってしまつては、価値などありはしない」

「ですが、しかし・・・」

「もうよい。早くその者を断頭台へ連れていけ」

「待つてください。王様！」

「はよう連れていけ。顔も見とうない」

王様は拗ねたように、錆びた花弁をポキリポキリと折るのです。

さびれたお墓の前。

その墓の名にはコールストーンと刻まれていた。

そして、今でも彼の命日の前日、金色の花がそこには咲いているという。

少年はその花を前にして、そんな話を思い出していた。

確か祖母が話してくれたお話の中の一つだったと、少年は思う。

少年はその金色の花をもって、家に帰った。

家に帰った少年は両親に花を見せた。

そして、祖母の話語った。

「そう言えば、俺もそんな話を母さんから聞いたな」

少年の父親が懐かしそうに語る。

「そう言えば、金色の花を探している旅人の話を聞いたわ。結構な額を出すと言っていたはずだけれど」

両親は顔を見合わせた。

そして、少年から花を受け取り、旅人のもとへと向かった。

そして、その夜。

少年は馬車の中にいた。

うつらうつらとしながら、馬のいななきを聞いた。

母親の悲鳴を聞いた。

「何なんだ？あんならは？」

「こんな夜更けに何処に行くのです？まるで夜逃げじゃありませんか？」

「あなたは、さっきの旅人！」

「これが偽もので、それが露見するのが怖かった？それともこの花が、明日には錆びて枯れてしまうから？」

少年は眠い目をこすり、馬車の外を見た。

馬車の外には殺された両親がいた。

「私は何も知らないで、この花を求めていたとでも？」

旅人は父親に刺さった剣を、ぬるりと抜いた。

「少年。君がこの花を見つけたんだね？」

少年はコクリとうなずいた。

旅人は剣を少年の首筋にあてがう。

「君はこの花が明日になったら、錆びて枯れてしまうと思うかい？」

少年はコクリとうなずく。

「では賭けよう。明日になったらこの花は、錆びて枯れているか、それとも何の変哲もないか。賭けてみようではないか？・・・君の・

・・命をね・・ハツハツハツハツハツハツ
暗闇の中、旅人の笑い声が響いた。
そして、金色の花が闇夜に輝いていた。

七曜の花　　・土の花―

世の中で一番美しい花とは一体どんなものか？

そんな議題が自然とわきあがった。

神々は自分が育てた花が一番美しいと言って、誰も譲ることはしなかった。

結局、皆が持ち寄って品評会が行われることとなった。

儂げにきらめく花。

小さく白い可愛い花。

青く澄んだ花。

なんだかわからない緑の塊。

それは花じゃないだろうと、言われようとも持ってきた金細工できた花。

さまざまな花が持ち寄せられた。

しかし、大地の女神が持ち込んだ花は一風変わっていた。

植木鉢の花は何の変哲もない花だった。

何処にでもある雑草のような花で、当然非難が集まった。

「何だ、その花は？」

「そんな花が世界で一番美しい花などであるはずがない」

声を荒げる神々に、大地の女神はにっこりと微笑んだ。

「そもそも美しさとは何なのでしょう？それぞれの花にはそれぞれの美しさがある。はたしてそれを比べることなどできるものなのでしょうか？」

大地の女神の言葉に、神々は沈黙してしまった。

完全に品評会は水を差された形になってしまった。

興をそがれた神々は、散り散りとなった。

ある日、月の女神は、大地の女神が花壇で件の花の世話をしているのを見つけた。

「あら、一体何をしていたらっしゃいますの？」

「あら、お久しぶりですね。今、花と枝を剪定しているところです。こうすると花が良く成長して、長い間咲いてくれるのです」

「そう」

少し思案し、月の女神は皮肉っぽく笑った。

「先日、それぞれの花にはそれぞれの美しさがあると、おっしゃっていたのではなくて？その今切り落とした花は、美しくないのかしら？」

嫌みたっぷりの月の女神の言葉に、大地の女神は微笑んで答えた。

「この切り落とされた花が美しいとおっしゃるのですね？」

「そうじゃないわ。今咲いている花と変わらないと言っているのよ」「それぞれの花にはそれぞれの美しさがあるように、それぞれの花にはそれぞれの醜さもございます。花の違いが分からないとおっしゃるのですしたら、このようなのはいかがでしょう？」

月の女神は、大地の女神がそれほど困っていない様子が面白くなかった。

「例えば、今のあなた様の御様子は、美しいか？それとも醜いか？お分かりになりますか？」

「もういいわ。結構よ」

月の女神は憤慨して、大地の女神のもとを去った。

「あらあら、お忙しい方ですこと」

大地の女神は、また剪定を始めた。

ぽとりと落ちた何の変哲もない花は、やがて枯れて、腐り、土となる。

そして、何の変哲もない花の養分となるのだ。

七曜の花　　・日の花―

太陽の神は、恋をしていた。

しかし、恋に落ちた相手が悪かった。

相手は死者の国の女王であった。

いろいろ悩んだ挙句、太陽の神はラブレターを書くことにした。

君に一目会ったときから、恋に落ちてしまった。

嘘ではない。真実だ。信じて欲しい。

君の青白い頬も、君のいびつな指も私には美しくてたまらない。

君のぎろりとした瞳で見つめられるたび、私の心臓は早鐘のように打ち、

君の低く重い声を聞きたび、私は舞い上がり、太陽に突っ込みたくなるほどだ。

今すぐどうしようという気はない。

ただ君に私の気持ちを伝えたくて、筆をとった次第である。

願わくば、君に私の思いが伝わるらんことを。

太陽の神は、太陽の中に咲くという非常に珍しい花を添えて、死者の国の女王に手紙を送った。

しかし、死者の国の女王は手紙を破り捨て、花を打ち捨てた。

それを聞いた太陽の神は、やはり私のようなものが死者の国の女王に恋に落ちたなど、そう易々とは信じてもらえないのだろうと思い、また筆をとった。

結局百通の手紙が、太陽の花とともに死者の国の女王へ送られた。

そのすべてが破り捨てられ、花も打ち捨てられた。

しかし、百通目の手紙には返事が来た。

嫌がらせもたいがいにして欲しい。

貴様を送ってくるあの花のせいで、死霊どもが嫌がって、暴れまわってかなわん。

それにあの手紙の内容は何だ？

私の頬は青白くないし、私の指はいびつなどでもない。

文句があるなら面と向かって言うがよい。

私はいつでも相手になろう。

太陽の神は、絶句した。

まるで相手に気持ち伝わっていなかったのだ。

それどころか険悪になっている。

太陽の神は涙を抑えきれず、太陽に涙が落ちた。

落ちた涙のせいで、太陽には他より温度の低い黒い点が生まれた。

一方死者の国では、ようやく落ち着きを取り戻し、平和が訪れていた。

打ち捨てられた花は、死者の国へ通ずる道で咲き乱れ、今でも見ることができぬ。

お亡くなりになられた際は、太陽の花を愛でてみるのも一興かもしれません。

七曜の花　　・日の花―（後書き）

栖坂月先生

お花シリーズ（？）を全て読ませていただきました。全てに共通のテーマがあったのかどうかについてはわかりませんが、全体的に無知に対する警鐘のようなものを感じました。

特に恋愛を含む話においては、好意で目を曇らせることが根底にあるように思えてなりません。登場人物は精霊やら女神やら、人間でない存在が多かったようですが、人間になぞらえて考えてみた場合、一過性の恋心というのは本能的な欲求からくる盲目的な感情なんですよね。相手の良い所しか見えなくなったりとか、なかなか厄介な病です。

ここに出てくる者達の大半は、もっと考えていれば幸せになれたものを、という人達が多く、教訓としては上手く演出できている印象でした。

それにしても最後の話、死者の国の女王はちゃんと手紙を読んでいたんですね。そのいい人っぷりに、ちょっと吹いてしまいました。

磯巻　宗春先生

太陽の神さま涙目ですね。ですが最初のポジティブシンキングがすごい。私なら一発で諦めそうです。さすが神さま。

最後の一文を、「ます」で終えたのは、語り部が変わったから、でしょうか？

今後の作品も、期待してます。

神村律子先生

太陽の神が見たのは誰だったのでしょうか？

かつ井ラブソング

「かつ井頼んでやるから正直にはきな」

刑事はそう言った。

「そんな今どき食いもんにつられて、はくやつなんているわけないだろ」

俺は刑事を睨めつける。

「分かってないなお前は、かつ井は一種のツールだ。犯人は刑事の優しさに触れてポロっと本音をこぼすのだ」

「どうでもいいよ、そんなもん。頼むんだったら、さっさと頼めよ」

「まったく最近の若者はせっかちでいかん・・・ああ、ライライ軒さん。かつ井二つ。お願いね」

刑事は電話を切り、俺に迫ってくる。

「それで、どうなのだ。昨日一緒にいた女の子は恋人なのか？んん？」

「気色悪いよ、親父。そんなの関係ないだろ」

そう、この刑事のコスプレした男は、俺の親父だった。

母親が亡くなった俺を元気づけようと、あらぬ方向に走ってしまった哀れな男だ。

「ということは、友達以上恋人未満というやつか。男ならここはアタックだ。アタックチャンス！」

「黙れ。あいつとはそんなんじゃないやねえ。あいつとは・・・その・・・ただの恋人だ」

「赤飯持ってこい！今日は祝いじゃ！酒もってこい！」

親父は叫びだし、窓を全開にした。

「みなさん！私の息子に！恋人ができました！」

「恥ずかしいからやめろ！」

すかさず俺は、親父を抱え込んで飛びあがる。

そして、空中できりもみしながら、地面にたたきつける。

親父は変態なのでこのくらいでは死なない。

「すみません。ライライ軒です」

玄関から声がした。

かつ井が届いたようだ。

「はい。今開けます」

開けたとたん、何か黒い影が、俺の前を通り過ぎた。

「な、何?!」

「ダーリン会いたかったわ」

倒れた親父のそばに一人の女がいた。

名を藤堂律子、親父の仕事の同僚である。

アラウンドフォーティの結婚を焦る、これまた哀れな変態である。

「藤堂律子!」

俺が名を叫んだ瞬間、背後に殺気が走った。

気がつけば、俺の首はしめられていた。

「りっちゃんて呼びなさい。いつも言っているでしょ。何ならお母様でもいいわよ」

「いえ結構です。りっちゃんさん」

「と、藤堂君。こんな日に何の用だね?私は忙しいのだよ」

俺が気を失いかけそうになった時、先に親父の方が目覚め、助かった。

「あら、先程ダーリンの声が聞こえたから駆けつけたのに。今からやるんでしょ、お・い・わ・い」

藤堂律子の手には一升瓶。

親父を酔いつぶして、どうこうしようという腹は明らかである。

変態の父親だけで十分なのに、変態の継母まではいらない。

俺は金属バットをもって、酒を酌み交わしている藤堂律子をしとめることにした。

(藤堂律子、覚悟!)

「甘いわ」

藤堂律子は渾身の一撃を指一本で受け止めていた。

(しまった！)

「そこまでだ」

「また俺を救ったのは親父だった。」

「その手にはかつ丼。」

「これを見る。この卵の半熟具合を、このカツの衣のキツネ色に染まった様を！まさにベーーーーーリーストバランス！」

「親父は三回転して、ポーズを決めた。」

「斜め四十五度の開かれた両の腕、その手にはかつ丼。伸脚している足。」

「これは・・・完全に酔っぱらっている。」

「なんか、もう疲れた。俺寝るわ」

「俺はもう何もかも放っておいて部屋へと消えた。」

「その後のことは知らない。」

「そして次の日の朝食は、赤飯だった。」

かつ井ラプソディー（後書き）

栖坂月先生

えーと、これはやっぱり私に感想を書けと、そうおっしゃっているものと解釈しました。

単純に面白かったです。と同時に、お花シリーズのテーマ縛りに疲れ果てた様子が目に浮かびます。気持ちにはわかりますよ。私も夏ホラーの作品を書いた後は、無性にフリーダムな作品を書きたくなりましたから。

それにしてもこのりっちゃん、アラフォーのクセに元気ですなー。アラフォーくらいになると、もう少し体力と共に気力も落ちてくる頃合なんですけど、よほど精力のつくものでも食べまくっているのでしょうか。羨ましい限りです。

たまにはいいですね、こういつのも。

足立奮闘記

「日本は間違っています」

加藤は突然叫びだした。

「だいたいお盆休みとるために、何でこんなに前倒しで仕事しなきゃいけないんですか？忙しすぎて気が狂いそうです。そもそもお盆休みの在り方が、間違っています。休養は休むためであって、疲れさせるためにあるものではないはずですよ」

「そうは言ってもね、加藤君。目の前の仕事をこなさないことには、休みは来ないのだから仕方ないだろう」

「その通りですね。でしたら私のノルマはもう終わっていますから、もう帰ります」

「ちょ、ちよつと待ちなさい。加藤君」

加藤は足立の制止を振り切って、タイムカードを切った。

「さようなら」

そそくさと帰る加藤を足立は呆然と見ていた。

「まったく最近の若者は協調性のかけらもないな。和を尊ぶということを知らんのか」

足立は愚痴りながらも、仕事に戻った。

「室井君。斉藤君の姿が見えないようだが、外回りからまだ帰っていないのかね？」

足立は、奥にいる室井に声をかける。

「いや、斉藤さんはもう午前中に帰ったつす。何でも実家が坊主やってるそうなんで、忙しいらしいんつす」

「じゃあ何か、自分の仕事をほっぽり出して、実家に帰ったつすいのか？尻拭いする身にもなつて欲しいものだな」

「いや、もう自分の仕事は午前中に全部終わらせたつすってましたけど」

「そ、そうか。さすが斉藤君だ。仕事が早いな」

足立はまたPCに向かい仕事を始める。
それから、一時間二人は会社で過ごした。

「あゝ。室井君。そっちの具合はどうだ？何ならコーヒーでも淹れようか？」

「いや、いいつす。今リオ狩ったんで、雪山でフルルンに会いに行こうかなあと思ってるんですけど、肉足んなくて。今焼いてるところつす」

「ん？何を言っている？」

足立は席を離れ、室井のもとに向かった。

「貴様何をやっている！」

「ゲームつす」

足立の怒声に室井はしれつと答えた。

「仕事をしていたんじゃないのか？そんなことじゃ残業代なんてもちろん出んからな！」

「俺もう仕事終わらせて、タイムカード切っちゃってますよ」

「そもそも職場は、遊ぶところじゃないんだ。仕事するところなんだ。それなんだ、その机の人形どもは。ここは家じゃないんだ。」

もつと社会人としての自覚をもて」

「はあ、そうつすか？じゃあ、俺も帰ります」

室井はゲーム機をしまい、会社を後にした。

「まったく最近の若者は、一般常識というやつを知らんのか？」

足立は結局一人で仕事することになった。

「おい、この文字どうやって打つんだ？『よ』が9にしかならんぞ」

答えるものはいなかった。

「そういえばローマ字表があったな。何処行った？まったくあれほど定位置管理をしつかりしろと言っているのに。こつういぎっていつときに使えないだろ」

足立はやつとのこととでローマ字表を探しだし、仕事を再開する。

「あとはこれを保存だな・・・これでいいんだっけか？」

カチカチとクリックし続ける足立。

「あれ、動かなくなっただぞ。壊れたのか？」

押された回数だけ命令に従うPC。

「まったく。役に立たないな」

足立奮闘記（後書き）

栖坂月先生

会社でモンハンとかやっちゃいけません。

それにしても何ですね。モンハン未プレイの私が、これだけの描写でモンハンだとわかっちゃうんですから、モンハンも出世したもんです。

それにしても足立さん、本当は仕事の出来る人かもしれませんが、全くそうは見えないところが素晴らしいですね。機械に弱いつて人は確かに居なくもないですが、順応性の高い人は年齢とか関係ないものです。

とりあえず、残業社会にはおさらばしたいものですな。

それでは

私の心臓は小動物の如く

「あなたが好きです」

私は天井に向かって言った。

もちろん私は、天井が好きなのではない。

言うはずの相手を想像して、一人で盛り上がりすぎて、ベッドの上でぬいぐるみを抱えてゴロゴロする。

告白を決心したのに、どうしたらいいのかわからなかった。

やっぱりメールで告白したほうがいいのだろうか？

なんか面と向かってだと、緊張してちゃんとできない気がしてきた。あらかじめ書いておいた紙のラブレターを携帯の画面に写しながらそんなことを思う。

本当は、直接会って告白したいんだけど、相手のことを考えただけでどうにかなりそうなのに、本番で正気でいられる気がしない。

携帯の画面は、あとは送信するだけで相手に届く。

やっぱり直接告白しよう。

もし呼び出すことさえできなかったら、メールで告白。

二人きりになって、その時にテンパっちゃたら手紙で告白。

よし、そうしよう。

でもやっぱりなあ……

など考えが堂々巡りしていたら、眠くなってしまって、いつのまにか寝ていた。

朝、いつもなら携帯のアラームで起きるのだが、その日はなかった。まさかっと思つて携帯を見たら、案の定電池切れである。

昨日充電しなかった自分を呪いながら、今日の告白をどうするか迷った。

なんだか運が悪い気がする。

しかし、もう友人に今日のことを話してしまっている。

散々相談して、やっぱりやめるというのも気が引ける。途中で何とか充電するとして、とりあえず彼を選んだ。気合を入れすぎて化粧したら、逆に彼に引かれるわよと、友人の注意通り薄めに化粧した。鏡の中の自分を見ながら、いつもと変わらない様子に不安を感じた。こんなのでいいのか？
本当に？
もしだめだったら友人のせいである。
私はペツタンコのかばんをもって、学校に向かった。

その日の放課後、彼を待っていた。
奇跡的に彼を誘うことができた。

誰だ今日は運が悪いとかいった奴は？

「よう」

「うん」

彼が来た。

普段何気なく話しているのに、意識しているせいで二人とも気まずい。

「あのね・・・」

「分かってる。メールの話だよな」

メール？

彼には結局メールは送ってなかった気がする。
考えられるとしたら、寝ぼけて送信したかだ。

寝ぼけて何をしているんだ、私は！

いや、送信しただけだが。

まずい。

まだ携帯は充電機とともにカバンの中である。

メールチェックしてないよ。

「やっぱりこういうのはちゃんと、面と向かって言わないといけな
いよな。けじめとして」

それは内容次第である。

逃げ出したい！

逃げ出したい！

逃げ出したい！！

「俺と付き合ってくれ」

「え・・・うそ」

「嘘じゃないって、俺も前から好きだった。っていうか。まあ、そんな感じだ」

「なんか・・・信じられない」

「信じられないって。昨日メール送っただろ。あのメールのせいで今日寝不足なんだから。もしかしてお前メール読んでねえんじゃないか？俺があんだけ苦しんで書いたメール」

「そ、そんなことない・・・そんなことないけど」

私は泣いていた。

緊張から解かれて、涙腺もゆるんだのだろう。

「泣くことないだろ。わるかったよ。言いすぎた」

「ちがうの。別に・・・悪くない」

「なら、いいけど」

嬉しくて涙があふれた。

何でこんなに涙が出るんだろう。

そうか。

今まであった悲しいこととか、苦しいこととかが出ていってるんだ。

そうやって空っぽになった私に、彼が入り込んでくる。

これから幸せでいっぱいにするために、

私はそう思った。

ある女性作家の日常

『旦那のところへ帰省してくる。憂鬱だわ』
と友人からメールが入った。

適当に返信しながら、結婚してない私へのあてつけかと突っ込んでしまう。

だが、私の周りの人間で、結婚している人間の方が多い。
たぶん友人も暗に大丈夫かと心配してくれているのだろう。

一生シングルでも構わないと私は思っているが、どうやら私の考えはマイノリティーらしく、シングルの友人の間でも私は浮いている。
合コンいこう？

お見合いいいこう？

はつきり言って、私の性に合わない。

私はタバコに火をつけ、ふかす。

冷蔵庫から良く冷えた酒を取り出し、クツとあおる。

自分でもなんだかオヤジ臭いなど思いながら、パソコンを立ち上げる。

「さて始めますか」

私はお酒の味のする唇をちろりとなめた。

私は活字を使つて物語を書いていく。

同じ生みだすなら、ヒトの子よりも私はこちらのほうが性に合っている。

私は子孫を残すという本能に逆らう、反骨の徒である。

とはいっても酒の肴を食べながら言っても説得力がないが。

三十分後、私はスランプになっていた。

アルコールというブースターをつけた私は、ハイテンションで一気に物語を書きすすめていたが、ブースターは上昇するときだけではなく、下降するときにも機能する。

私は一気にローテンション、泥沼の中である。
ずぶずぶという効果音さえ聞こえてきそうである。
よく分からないことをいろいろ考えてしまう。

それから一時間何も進展しないまま、タバコの吸い殻が増え、アルコールが底をついた。

私は仕方なく近くのコンビニにアルコールを補充に行くことにした。

夏はじめじめした湿気がまとわりつき、気持ち悪い。

多めに買おうかと思ったが、持って帰る時大変なのでやめた。

コンビニで会計をしている時、神が下りて囁いた。

ひらめきとは突然に下りてくるものだ。

私は思わずにやりと笑ってしまった。

コンビニの店員のひきつった顔が滑稽だ。

暑い夏、私はコンビニの店員にささやかな恐怖をプレゼントして、家路を急いだ。

家に着いた私は、とりあえずアルコールでのどを潤した。

私はこの時のために生きている。

「やはりオヤジ臭いな」

私は私を褒めて、喜々としてパソコンの前に立つ。

今回も難産になりそうだ。

ある女性作家の日常（後書き）

和泉 I z u m i - 先生

初めまして、和泉と申します。作品拝読させていただきました。さっぱりとまとまってるらして、無駄のない作品だと思いました。一文ごとに切っていく短い文章の方式を取っていることで非常に読みやすかったです。

モノを書く者のニヤツという舞いあがりそうなひらめきを、結婚妊娠とかけ見事に表現してらっしゃると思いました。次回作も期待しております。以上です。

神村律子先生

何か身につつまされるお話でした（笑）

午雲先生

山羊の宮先生、初めまして、午雲と申す者です。ある女性、作品読ませてもらいました。淡々と軽やかに決まってる感じがしました。そして、最後の一行がフフツて感じます。落語と俳句の中間って感じですかネ。おさえた感じがありました（笑）。感想以上です。

魔女ジルルキンハイドラへの挑戦

深い森の奥に一人の魔女が住んでいた。

魔女の名は、ジルルキンハイドラ。

その姿は幼女の姿をしているが、数百年の歳月を生き、その知識は海よりも深く、ありとあらゆる妙薬の知識をもっていた。

そして、遠くを見渡せる千里眼をもち、彼女の知らないことなどこの世にはないとさえいわれている。

俗世を嫌い、一匹のペットと暮らしている。

ペットの名はトットルツチエ。

人語を解する稀有な黒いライオンである。

ある日のことである。

一匹の金色のウサギが訪れた。

「トットルツチエ、食べちゃダメ」

「はへ？」

トットルツチエの牙は金色のウサギの身の前で止まっていた。

「どうもありがとございます。ジルルキンハイドラ様。お久しぶりです。相変わらず壮健そうですねによりです」

金色のウサギは、ジルに対し、深々と頭を下げた。

「今日は何のようなの？ウルばあちゃんに何かあったの？」

「いえ、ウルリカロナエルザ様に様子を見てくるよう仰せつかって、本日お伺いした次第です」

「そうなんだ」

金色のウサギは礼儀正しくジルに接した。

「なに、ジルの知り合い？」

「うん。こちらはおばあちゃんここにいたメルフォキア。メルフォキア、こっちがトットルツチエね」

ジルに紹介され、黒いライオン、トットルツチエと金色のウサギ、

メルフォキアはお互い挨拶をした。

「どうも僕はジルのところでお世話している、トットルツチエです」
「私、ジルルキンハイドラ様の祖母にあたりますウルリカロナエル
ザ様のところでお世話になっております、メルフォキアと申します」
「トットルツチエ、誰がお世話になってるって〜？」

「だって、僕がいなきゃジル一人で食べ物確保できないでしょ？」
「トットルツチエだって、私の教えた罠がないと満足に狩りできな
いでしょ？」

「だったらジルが自分で罠仕掛けりゃいいじゃん」

「そんなこと言うんだったら昨日のウサギ鍋返してよ〜」

「ウサギ鍋・・・」

メルフォキアは鼻をひくひくしている。

「確かに同胞の匂いがしますね。この家は」

遠い目をするメルフォキアに、ジルとトットルツチエはあせあせと
言い訳する。

「僕たち別にウサギだけ食べてるじゃないんだよ。一昨日はイノシ
シだったし」

「その前はシカだったのよ〜」

メルフォキアは髭をそよがせ、唸っている。

「そういえば家の近くに畑もありますでしたし、まだ治ってない
んですか、ジルルキンハイドラ様？」

メルフォキアはジルをくりくりした目で睨みつけ、その圧迫感にジ
ルはおののく。

「野菜嫌い」

「だって〜。野菜食べなくても生きていけるもん」

「そういえば鍋にいつも入ってないね、野菜。僕に合わせてくれて
るんだと思ってただけけど、野菜嫌いだっただけなんだ」

メルフォキアは大きなため息をつく。

「いつもウルリカロナエルザ様もおっしゃっていたじゃないですか
？野菜を食べないと大きくなれないと」

「だから、ジルはちっこいんだねー」

「別に、大きくなれなくてもいいもん」

完全に拗ねてしまったジルを見て、メルフォキアは妙案を練る。

「では、こうしましょう。ジルルキンハイドラ様と私が勝負して、私が勝ちましたらジルルキンハイドラ様にはこれを食べていただきますよ」

メルフォキアは懐から人参を取り出し、ジルに突き付ける。

ジルはいやいやしながら、トットルツチェの影に隠れる。

「ジルルキンハイドラ様が勝ちましたら、私の可能な限りの願いをかなえましょう。いかがでしょう？」

ジルは散々考えた末、メルフォキアの申し出を受けた。

「いいの、ジル？ウサギさんが可哀そうだよ」

「トットルツチェ、メルフォキアをなめてたら痛い目にあつわよ」

「え、何？何かあるの？あのウサギさん」

「今も着々と私たちに勝つために暗躍している。こっちも全力で行かないと負けるわ」

「ジル、真剣だね。そんなに人参食べたくないの？」

「・・・うん」

後日、メルフォキアはジルのもとをまた訪れた。

「ルールは簡単です。先に相手にまいったを言わせれば勝ちです」

ジルとトットルツチェ、そして、メルフォキアは対峙した。

やや開けた場所に移動した三者。

「いよいよ勝負は、始まる。」

「それでは始め」

「行け！トットルツチェ！先手必勝よ」

「任せて」

ジグザグに逃げるメルフォキア。

それを追うトットルツチェ。

「さすが百獣の王。一撃当たればひとたまりもない」

「当たればねって言いたいわけね」

巧みにフェイントをかけるメルフォキア。

それに引っかかるトットルツチエ。

「もう何してるの？もつと！あゝ、ちがう」

ジルの必死の応援もむなしく、トットルツチエはついにへばってしまふ。

「だらしがないですよ。百獣の王の名が泣きますよ」

「うん。もうどうでもいいや、そんなの。よく考えたら僕が人參食べるんじゃないから、僕が頑張る必要ないかななんて」

「トットルツチエの薄情者！」

「それでは今度はこちらの番ですかね」

グモグモとメルフォキアが鳴くと、ウサギが現れた。

ただその数が尋常ではなかった。

森じゅうのウサギを集めたのかというほどの数である。

「この数は卑怯だよねー」

「そうですか？二対一は卑怯じゃないけど、これは卑怯なんですか？」

あっさりとしるすとトットルツチエは囲まれた。

「どうです？降参しますか？ジルルキンハイドラ様」

問いかけるメルフォキア。

しかし、絶望的な状況にジルの微笑んでいた。

「今よ！トットルツチエ！」

「オツケー！」

「?!て、撤退!?!」

メルフォキアの号令とともに、ジルたちを中心にドーナツのように地面が崩落した。

一気に形勢は逆転した。

「どう？奥の手は最後に取っておくものよ。さあ、メルフォキア。降参してもらおうじゃない！」

身を震わせるメルフォキア。

「さすがジルルキンハイドラ様。なにかもお見通しという訳ですね。私がウサギたちを集めていたのを知っていて、自分たちを圏に一网打尽にしてしまう。さすがです」

エツヘンと胸を張るジル。

「しかし・・・」

ぐもぐもとメルフォキアが鳴くと、ウサギが現れた。

ただ数が尋常ではないのである。

先ほどの倍ぐらいの数である。

「な、何それ〜！」

「ウサギの繁殖力をなめてもらっては困ります」

メルフォキアは懐から人参を取り出し、ガリリとかじった。

結局、ジルたちは兵糧攻めにあつて、三日目に降参した。

「では、約束通り食べていただきます」

「観念して食べなよ、ジル」

「だって人参臭いよ〜」

「人参ですから」

「人参だからね〜」

「・・・パクツ・・・モグモグ・・・」

「おお、食べた」

「いかがですか、ジルルキンハイドラ様？」

「・・・おいしい。なんで？」

「それは良かったです。ウルリカロナエルザ様もお喜びになれます」

「まあ、三日間断食状態だったから、何食べてもおいしいのかもしれないけどね〜」

その後、ジルたちの食卓にウサギ鍋が、上がることはしばらくなかった。

魔女ジルルキンハイドラへの挑戦（後書き）

栖坂月先生

お子ちゃまだ。お子ちゃまがいる。

どうも、栖坂月です。

人参はともかく、野菜を全く食べないのは 栄養が偏りますよー。
肉食動物も内臓とかを食べることで野菜のミネラルを補充してま
すからね。

しかし、基本的には知恵比べ的な内容なんですが、何という力技で
しょうか。しかも最後は兵糧攻めとは。

一体、どれだけの人参を用意していたのか、むしろそっちが気にな
ります。

最後のオチは予測の範囲内でしたが、これはやっぱり外せませんね。
そしてやっぱりウサギ鍋はやめられなかったという辺りが、いかに
もな感じで良かったです。

また来ます。それでは

そもそもひも理論とは・・・

「ああ、であるからして、この閉ざされたひもというのは、ブレーン間の移動。」

つまり、次元を超えることができるわけだ。

それに引き換え、我々のいるこの開かれたひもの世界は、ブレーンにくっついていてるわけだ」

教師が黒板に白墨で絵を描き、子供たちに分かりやすく説明している。

ワイワイと落ち着きない子供たち。

「おい、加藤。えらく楽しそうだな」

教室の中の生徒の一人、加藤の動きが教科書で前の生徒を叩こうとして止まる。

「それじゃ、問い一を解いてもらおう」

「えー」

「何だ、解けないのか？無以前の宇宙は存在していたかどうか？その理由もな？」

加藤はいやいやながら答える。

「答えは、まだ出ていません。マイナスの世界がある。反物質の世界がある。何もなかった。いろいろ説はありますが、また確定した説はありません」

「そうだな。まだ確定していない。非常にロマンのあるフレーズだ。君たちが将来大人になった時そのロマンが紐解かれていることを祈ろう」

加藤は前の生徒に文句を言っている。

チャイムが鳴った。

「じゃあ、次の授業は社会だから、国内総生産と国内総幸福量についての日本と他国の違いだから、ちゃんと予習しておくように」
子供たちは先生の話など聞かない。

子供たちはチャイムが鳴ると、すぐにボールを持って校庭に向かった。

今子供たちの間ではドッジボールが流行っている。

子供たちを見守る二つの影があつた。

この学校の校長と教頭だつた。

「しかし、すごい時代になりましたね」

「そうだな」

「私なんか小学生の時なんか九九が言えなくて泣いていたものです」

「私は読書感想文が苦手だつたね。夏休みよく泣かされたよ」

「これからの日本が楽しみです」

「本当に」

二人は遠い目をしていた。

そもそもひも理論とは・・・（後書き）

磯巻 宗春先生

まさか小学生才子とは。

生徒達も確かにすごいかもしれないませんが、先生の教えている範囲も尋常じゃないくらい広そうですね。私にはちんぷんかんぷんな授業内容でした。

でも、将来頭のいい子供達ばかりだったら、楽しいかもしれませんね。

次回作も楽しみにしています。

ある男性作家の日常

『あんだ今年も帰ってこなかったわね。いつ帰ってくるの』
と母親からメールが入った。

適当に返信しながら、戻ったら戻ったで居心地悪くて仕方ないだろ
と一人呟く。

俺の年代になると周りの人間では、結婚している人間の方が多い。
たぶん母親も暗に大丈夫かと心配してくれているのだろう。

昔は直接結婚しないのかと聞いてきたものだが、今では何も言っ
てこない。

無言のプレッシャーがあるだけである。

俺だって彼女欲しいさ。

結婚だつてしたいさ。

でも、できないんだよ。

仕方ないだろ。

仕方ないんだよ・・・

俺はタバコに火をつけ、一息ついた。

冷蔵庫から良く冷えた酒を取り出し、ぐびぐびと流し込んだ。

自分でももうオヤジだなと思いつながら、パソコンを立ち上げる。

「さて始めるか」

俺はげふつと炭酸を吐き出した。

俺は活字を使って物語を書いていく。

妄想の世界なら俺の自由さ。

この世界において俺は神だ。

敬え。

崇めろ。

ハッハッハッハッハ・・・

三十分後、俺はスランプになっていた。

何で俺こんな話書いてるんだろ。

もっと面白い話なんて他にいくらでもあるし、別に俺が書かなくても・・・

落ちる時にはどん底まで落ちる。

なんか死にたいなあ・・・

それから一時間何も進展しないまま、タバコの吸い殻が増え、アルコールが底をついた。

俺は仕方なく近くのコンビニにアルコールを補充に行くことにした。

夏のじめじめした湿気がまとわりつき、気持ち悪い。

しばらく外に出なくてもいいだけの食料と、アルコールをかごに入れた。

軽くひきこもりである。

コンビニで会計をしている時、神が下りて囁いた。

ひらめきとは突然に下りてくるものだ。

俺は思わずにやりと笑ってしまった。

コンビニの店員のひきつった顔。

しまった、変人と思われたに違いない。

いや、変人だが。

俺は恥ずかしくなって、家路を急いだ。

家に着いた俺は、とりあえずアルコールでのどを潤した。

俺はこの時のために生きている。

「でもおなか・・・」

メタボなおなかをつまみながら、俺はパソコンの前に立つ。

今日も俺の妄想は溢れかえっている。

ある男性作家の日常（後書き）

栖坂月先生

あれ、どこかで見たような、と思ったら数日前に似た文章がありましたね。男女で同一のテーマを扱う。面白い発想です。

しかし男性編は何というか、妙にリアルな感じがしたんですが、気のせいですかね？

山羊ノ宮先生の性別はわかりませんが、やはり男性なのかなーと思っ
てしまいました。

私は性根がドライなので、スランプらしいスランプというのはない
のですが、やはり書ける時期と書けない時期があります。ただ、書
けないからといって酒に溺れることができるほど裕福でないので、
むしろ彼の境遇は恵まれているなーと感じましたね。

ま、軽く引き籠もりなのは一緒でしたが（笑）
また来ます。それでは

午雲先生

山羊ノ宮先生、ある男性作家、作品読ませてもらいました。同じテ
ーマで男女を描き分けてみる、というのは面白い発想ですね。比べ
てみると、心なしか男の方がわびしい空気が強く漂って居るような
……。身体が楽な分、やっぱりメタボに為りがちですかね（笑）。
芸能に金銭でもって評価してくれる物好きなんて、めったと居ない
ものだし、ー寒いくらいのわびしさ感が苦笑を誘います。未はアル
中かな？……。趣味の域にとどめておく方が無難だなアと改めて思
いました。ひとまず感想でした。

アノマロカリスは恋をする

まず初めに私、アノマロカリスの説明をするべきであろうか？
カンブリア紀、恐竜たちが闊歩していた時代よりも昔の時代。

ちょうど脊椎動物の祖であるといわれている、ミロクンミンギアが
生まれた頃だ。

ミロクンミンギアを知らない？

ええい、ややこしい。

昔々のお話じゃ。

活動の拠点が陸上ではなく、海の中であつた頃のお話。

私はいた。

はじめ人間が私の一部を化石として発見した時、エビの化石の一部
だと思つたらしい。

そう思うのは不思議ではない。

何故なら私の体は少し変わっているからである。

私だけではない。

この時代に生きた生物は皆変わっている。

オパビニア、ハルキゲニア皆一様が変わっている。

変わった形をしているが、それを造形美と言うにはいささか問題が
ある。

我らの美しさは、例えるならば、ギリシャの洗練された彫刻のよう
なものではなく、

岩石のような荒々しい野暮ったい美しさなのだ。

そう、まだ彫刻される前の試作の時代である。

のちにカンブリア爆発と呼ばれる生物が多様化した時代である。

何故こんなにも多様化したのか？

その答えを私はこう考える。

男と女が生まれたからであると。

一般的にミジンコはメスだけである。

分裂して繁殖するものだと思われる。

しかし環境の変化によって、メスがオスに変わることがある。

これはミジンコだけに限ったことではない。

他の生き物にも見られる現象である。

私はカンブリア紀、もしくはその少し前に環境の変化から雌雄が生まれたと考えている。

だとしたら、カンブリア紀の海の中で、美しい求愛のダンスがおこなわれていたかもしれない。

もしかしたら、メスをめぐって激しい争い合いがあったかもしれない。

男女の情念はこの時より生まれたのだ。

そう、私は恋していたのだ。

「何これ？」

彼女は手紙を私に突き付けた。

「ラブレターだ」

私はきつぱりと答えた。

「はあ？こんな訳わかんないのが？」

「好きなんだ。付き合ってくれ」

「冗談。勘弁してよ」

そう、もしかしたらアノマロカリスもカンブリア紀の海で、私のように泣いたかもしれないのだ。

アノマロカリスは恋をする（後書き）

小林 太陽先生

最後、笑いました。
久々に…。

栖坂月先生

うん、これは上手いですね。そして私好みです。
しかも、ただ面白いだけでなく、この短い文章の中にたくさんの知識が詰まっています。調べましたという程度では、なかなかこうはならないでしょう。

私も子供の頃は恐竜が大好きで、買ってもらった図鑑をボロボロになるまで読んだ覚えがあります。ダーウィンの進化論を知ったのは、小学生の頃でした。もちろん、当時はへーと思う程度でしかありませんでしたがね。

ただ、それからしばらくは恐竜や古代の生物からは離れていたのですが、この分野ってしばらく見ていないと常識がコロコロ変わったりするんですよ。当時の図鑑には載っていなかった恐竜が、結構ゴロゴロしていたりするんですよ。

大人になって驚いたものです。
ちなみにオスとメスの話ですが、私も支持したいですね。男という生き物が生まれたのは、多様性という戦略を獲得するための戦術だと思っています。聖書の上ではアダムからイブが作られたみたいですが、オスからメスが派生するのは無理がありますね。何しろ、種としての男つてのは大して必要な存在ではありませんから。実に楽しい作品でした。
また来ます。それでは

午雲先生

山羊ノ宮先生、アノマロカリス、読ませてもらいました。こう来ますか！？going my way・・・でも、ふつう撃沈するでしょうね（汗）。しかし、ミジンコの例から推すとオスは奇形？・・・
・なんだか複雑な気分です。どうなんでしょうね（苦笑）。感想でした。

夏の終わり

「今度の決勝、うちの高校勝てたら付き合ってくれ」

「う、うん……」

まるでドラマのようだった。

だが悲しいかな、俺はエースピッチャーでもなく、四番バッターでもない。

ただの補欠であった。

故に出来ることは限られていた。

夏の強い日差しのもと、俺は流れる汗も気にせず、一心不乱に応援した。

かち割りを売る売り子。

吹奏楽部の演奏。

俺は観客席でメガホンを叩き、声をからしていた。

トランペットを吹く彼女を見たかったが、俺はこらえた。

仲間の一挙手一投足に歓声を上げ、嘆息をはいた。

一進一退の接戦。

九回裏、点数は六対七。

うちの高校が負けている。

ツニアウト、ランナー、一、二塁。

バッターは、六番、叶。

(頼む、叶)

俺は願った。

そして、ありつたけの声を上げた。

「叶！打ってくれ！」

カキーン。

金属音が鳴り響いた。

白球は俺たちのほうに飛んでくる。

そして、

相手校の選手のミットの中におさまった。

試合は終わった。

ボールをとった選手は、両手をあげマウンドへ駆けて行った。

「そんなに落ち込むなよ」

隣に座っていた金崎が、声をかけてくれた。

俺がこの試合でどんな約束をしていたのか知っている人間である。

ほかの野球部のメンバーも、一様に俺を憐れみの目で見ている。

そして、その約束をまわりにふれ回ったのも金崎である。

俺はその場を立ち上がり、彼女のもとに行った。

吹奏楽部の連中も同様に俺を憐れんでいる。

もうあの約束は、周知の事実のようだ。

「・・・ごめん。負けちゃった」

「なんで謝るの？近藤君が悪わけじゃないじゃない」

「だって、俺・・・いっぱい応援して、勝てるように祈ったのに・・・

全然あいつらに届いてなくて・・・」

「私だって・・・いっぱい応援したよ・・・でも、でも・・・」

彼女は涙をこらえきれず、それでも俺に何かを伝えようとしていた。

俺も彼女の涙に誘われて、溢れてきた。

そして彼女を抱きしめ、子供のように声をあげて泣いた。

彼女の制服に俺の涙が、染み込んでいく。

俺の肩口にもユニホームの上から彼女の温かい涙が、染み込んでく

るのが分かった。

涙は伝染していく。

吹奏楽部の連中も、野球部のメンバーもその他の観客にだって。

ようやくと涙がおさまり、横隔膜が痙攣しているだけである。

金崎が声をかけてきた。

「お前ら、いつまで抱きついてんだよ」

金崎を見ると、奴の顔はにやにやしていた。

ほかのメンバーも吹奏楽部の連中も一様に同じような顔をしていた。

「ヨツ。青春してるねえ」

酔っぱらいの親父が野次ってくる。

俺たちは、恥ずかしくなって離れた。

慌てていたので、彼女がバランスを崩してこけそうになった。

俺はもう一度彼女を抱き寄せた。

「お前ら何やってるんだよ。さっさと行くぞ」

俺は彼女を見送ると、急いで金崎とほかのメンバーを追った。

こうして俺たちの夏は終わった。

そして、次の季節が始まる。

夏の終わり（後書き）

磯巻 宗春先生

感動系エピソードでしたね。結果が残念でも、いい雰囲気になれた感じがします。

ただ、ちよつと終わり方がふわふわつとなつてて、もう少し展開があつても良かったかなと。今後も頑張ってください。

午雲先生

山羊ノ宮先生、夏の終わり、読ませてもらいました。ありそうな話しな処ろがいいですね！応援団という意味では、補欠クンもプラスバンドも共通体験をして居る処ろが、説得力があります。しかし。なんで野球部だけ・・・こんなにもドラマになるねん。こう思うのは、わたしだけでしょうか？感想でした。

神村律子先生

ヒューヒューって感じですね。

いいなあ、青春！

ぼたり、ぼたりと落ちてきた。

天井に女が張り付いていた。

俺は昼寝を邪魔され、不機嫌だった。

俺は影を伸ばすと、彼女を四方から追いつめた。

彼女はまた俺を見つめたまま、よだれなのか血だか分からないものを垂らしている。

彼女はまだ自分を捕食者だと思っているらしい。

落ちてくる彼女を影ですくい取り、影は口を開き、食べた。

血しぶきが部屋中に飛び、また部屋が汚れた。

そして、俺は血だまりの中で昼寝を再開した。

ピンポーン、ピンポーン。

今度はチャイムが俺の昼寝を邪魔をした。

「おはよー。げんきー」

俺が玄関を開けると、遠藤まどかが現れた。

「ねむい」

俺は糸目をさらに細くした。

「いっつもそうだよね。もしかして昼夜逆転してるじゃない？」

「そうかもしらん」

まどかは玄関に荷物を置くと、勝手知ったる俺の部屋へと向かった。

「ねえ？」

まどかは部屋を見るなり、大きな声を上げた。

「またやったの？」

「うん。さっき来てたから食った」

「また部屋掃除しなきゃいけないじゃん」

「いいよ。別に。どうせ普通の人間には見えないんだから」

「でも、私には見えるの！」

憤慨する彼女に、俺はあくびで返した。

「じゃあ、どうせならもう少し汚してからきれいにしてよ」

俺はまどかを血だまりの中にくみ倒し、唇を奪った。

胸元のボタンにかけた手を、まどかが押さえる。

「ねえ、やっぱりあの話無理かな？」

まどかはうるんだ目で俺を見つめる。

俺はまるで餌を待つ犬のように動けないでいた。

「生きた人間は何で食べられないの？」

「まずい」

「じゃあ、死んだ人間はおいしいの？」

「うまいな」

「じゃあ、彼女を殺したら食べてくれる？」

俺は気持ちもなえて、彼女から手を引く。

(もうそろそろ潮時なのかな)

「ねえ、どうなの？」

俺はしぶしぶ了解した。

彼女は嬉しそうに喜んでいた。

駅前の雑居ビルの前に自縛霊がいた。

俺と自縛霊は見つめあっていた。

自縛霊は目玉をえぐられ、所々骨がむき出しになっている。

足がないのか、上半身だけである。

俺は自縛霊を囲むように、影を伸ばした。

自縛霊も俺の足首をつかみ、引つ張っている。

俺の影は口を開き、自縛霊を飲み込んだ。

足に絡んでいた手を、影の口に放り込むと、その場を後にしようとした。

「なんでそんなことするの？」

俺の背後には女が立っていた。

「さっきの人あんなに苦しそうに助けを求めていたのに、なのにな

んで？」

女は泣いていた。

女の名前を遠藤まどかという。

「佐藤明美さんですね？」

俺は道行く女に声をかけた。

その女は何処にでもいるような女だった。

特別美人で、ナンパしようとしたのではない。

女は当然俺を警戒していた。

「手紙を預かっているのですが」

俺は手紙を取り出し、女に差し出した。

女は手紙を受け取らず、俺を汚いものでも見るような眼で見ている。

「ムカデの女からの手紙だ、と言えば分かるといわれましたが・・・」

「

女の眼が見開かれ、手紙をひったくった。

そしてむさぼるように手紙を見た。

「あなた、どこまで知っているの？」

「さあ、私は頼まれただけです。それでは」

俺は顔の青ざめた彼女を放って、その場を去った。

できれば佐藤には来て欲しくなかった。

しかし、来てしまった。

俺は屋上の給水タンクの上から、様子を見ていた。

まどかと佐藤が相対し、何やら言い争っている。

どんな内容を話しているか分からなかったが、聞く気もなかった。

どうせ結果は分かっているのだ。

まどかは佐藤を殺した。

「ねえ、殺したよー。こいつ食べちゃって！」

まどかはすがすがしい、いい顔をしていた。

俺は影を伸ばして、彼女を囲んだ。

影は口を開き、まどかに歯を立てた。

「なんで？生きた人間は食べないんじゃない？・・・」

「そうだよ」

「じゃあ、なんで私を・・・」

影はまどかを一気に飲み込むと、ぱりぱりとそしゃくした。そして、飲み込んだ。

俺は食後の一服をするため、タバコに火をつけた。

「あんた、一体何者？」

そこには死んだ佐藤明美が立っていた。

（きれいなものだ）

俺は湧き上がる性欲を抑え、極めて平坦に言った。

「知りたければ、俺についてくるかい？」

影は、食べる、幽霊を。 (R15) (残) (後書き)

神村律子先生

いいですねえ、この主人公の冷徹さ。

私、こういうキャラ描けません。

どうしてもちよっぴりお茶目さんにしてしまいます(笑)

短編では勿体ないキャラなので、是非長編で!

などと勝手な事を申しました。

ごめんなさい。

夏は終わらない

「今度の大会、優勝できたら結婚してくれ」

「・・・」

負けられない。

俺はそんな気持ちから、自然とプロポーズの言葉を口にしていた。彼女はいつ通り無言で、俺を受け入れてくれた。

さんさんと太陽が照りつける中、

屈強な男たちが皆、自分の球を磨いている。

「俺は強い、俺は強い、俺は・・・」

「ぬおおおおおおお！」

各々が思い思いの言葉をつぶやき、時に叫び、自分の気持ちを高める。

俺の順番が来た。

アンモニアを鼻から吸い込み、咆哮する。

白線のサークルの中に入り、球を首に挟んだ。いよいよだ。

俺は高鳴る鼓動を抑え、深呼吸する。

そして、

勢いをつけ、遠心力とともに彼女を放った。

「行けー！ー！マイハニーー！ー！」

ゆるい放物線をえがき、彼女は飛んでいく。

彼女はドスンと鈍い音を立てて、地面に落ちた。

審判員が彼女のもとに近づく。

「十五メータ、七十！」

俺の自己ベストだ。

この大会ではほかにこの記録を塗り替えれそうな者はいないだろう。俺の優勝は決まったようなものだ。

俺は彼女、砲丸の球に愛しているよと囁いた。
人間の女なんてもうこりこりだ。
あいつらは嘘ばかり。
結局俺の体が目当てだったのだ。
俺にはお前しかいないよ、ハニー。

「ああ！さっき砲丸投げた方ですよね？」

「はい、そうですけど」

女の子のグループがわらわらと俺に寄ってくる。

ふん、貴様らになどもう興味はないわ。

俺にはハニーがいるからな。

「見えました！すごかったです。砲丸の球ってあんなに飛ぶものな
んですね」

「うわあ！すごい筋肉。触ってもいいですか？」

「いいけど・・・」

「腕、太！」

「胸板大きい！うわ、動いた。ほら、見て。びくびくする〜」

「ほんとだ。すごい」

俺はにんまりとした。

「よかったですら、この後一緒に食事なんか行きますか？」

「行きます〜」

男のカバンの中で砲丸は思う。

所詮人間の男なんて、そんなものと。

夏は終わらない（後書き）

栖坂月先生

タイトルが似ていたので、夏の終わりと比較して読んでしまいました。

向こうが純愛だとしたら、こちらは偏愛でしょうか。しかも浮気性ときている。

サイテーです（笑）

実は私、偏愛って結構ネタ的に好きなんですよ。むしろこれこそ、素直で真摯な（あるいは紳士な）愛の形だと思ってしまいます。しかもそんな真っ直ぐな思いが、アツサリ肉欲に負けようとは、さすがは山羊ノ宮先生ですな。

楽しませていただきました。また来ます。それでは

午雲先生

山羊の宮先生、夏は終わらない、作品読ませてもらいました。暑苦しいというか、熱血というか、夏の終わり、との落差もあって、正直、笑ってしまいました。サッカー少年ならボールと一緒に寝るとか・・・時にはサッカーボールにキスをする夜もあるか知れませんが、マイ・ボールで独りボーリングに汗するおっちゃんなんて、見ると本当に球を愛してそう。プロポーズまではしなくとも、愛称くらいはつけてそうですね（笑）。これも一応、ハッピーエンドじゃないですか？人間的には・・・感想でした。

神村律子先生

はい、早速来ましたよ（笑）

なかなかわかり易い男の一面ですね。
ご本人の私小説ってことはないですよね？

幸福なひととき

私は歯を磨きながら、雑誌を見ていた。

雑誌を見ながらも、携帯電話が気になって仕方がなかった。

彼にメールを送ったのが一時間前。

それから携帯は微動だにしない。

たぶんまだ仕事をしているのだろう。

最近残業が多くて大変だと昨日のメールにも書いてあった。

きつとそうなのだろう。

私は口をゆすいで、雑誌を机の上に放り投げた。

そして、携帯を手にするとベッドに飛び込んだ。

ベッドのスプリングが、私を弾ませる。

私は仰向けに寝転がると、携帯に文字を打ち込んだ。

『今どこにいるの？』

液晶を眺めながら、思う。

私は嫌な女じゃないか？

彼を信じていない。

彼を束縛したがっている。

うざいって思われるかも。

私はクエスチョンマークの後ろにハートマークを付けてみたり、

今どこにいるの？の前に、お仕事ご苦労様と一文添えてみたり、

絵文字を使ってみたり、

いろいろして、私のどす黒い部分を隠そうとするのだけれど、

全然意味はなかった。

彼が好きただけなのに、何でこんな思いをしなきゃいけないんだろ。

私の涙が落ちそうになった時、音楽が流れた。

私の好きな歌だ。

私の好きな彼のメールの着うたである。

私は急いで起き上がり、正座をしてメールを見た。

『ごめん。今忙しくって。後でメールする。愛してる
たったそれだけのメールだった。』

私は気が抜けて、ベッドに突っ伏した。

口元が緩んでいた。

「愛してるって・・・」

私は恥ずかしさに身悶えながら、転げ回り、ふとんを頭からかぶつ
た。

何で明日は仕事なんだろう？

明日が休みだったら今すぐにでも彼のもとに行くのに。

こられても迷惑かもだけど、でも一緒にいたいなあ。

私は彼にメールを返して、眠りについた。

彼の愛と、ふとんのぬくもりに包まれて

永続トラップ、発動。

この国に死刑は、ありません。

目の前にいるこの男は、この国での最高刑、終身刑に服しています。「この前、痛覚のない人のお話を人から聞いたのですが、痛覚がないと骨折していても全然気づかなくて大変らしいですよ。子供のころ、歯の生えかわりを一緒に喜んだら、次の日、その子の歯は全くなかったそうです。もっと褒めて欲しくて自分で抜いたそうです。痛みというのは、案外気づきにくいものかもしれませんが、大切な感覚なのですな」

「何、その話？俺に痛みを感じる感覚がないって言いたいわけ？他人の心の痛みを感じる人間になれって言いたいわけ？冗談。説教ならよそでやれよ」

男は私を挑発するように、品のない笑いをしました。

私は気にせず、顔の前に手を組み、話を続けます。

「先日私は蚊にかまれました、かくともっとかゆくなるのが分かっていましたが、我慢できず、かいてしまいました。かいている最中は気持ちいいのですが、体が傷だらけになっていけません」

「お前何の話してんだよ？ふざけてんのか？」

男は私を睨めつけ威嚇してきます。

私は思わず笑みがこぼれてきました。

ここで私は男に暗示をかけてみました。

初め男は暗示にかかっていることに気づきませんでした。

ボリボリ。

「お前・・・いったい何をした？」

男は全身のかゆみに気づきました。腹をかき、背をかき、腕を、首を、頭をかきながら私を睨めつけてきます。

血走った目で私を見ています。

おそらく目もかゆいのでしょう。

「何を？この分厚いガラス越しに、私に何ができると思われるのですか？」

「ふざけんじゃねえ！」

ここでもう一つ暗示をかけてみることにしました。

「ふざやああああ！」

男は品のない叫び声とともに転げまわります。

その尋常でない男の様子に、看守が男に近寄ります。

「さ、触んじゃねえ！！」

男は看守を押し飛ばし、うずくまりました。

その眼は恨みがましく私を見ています。

「大丈夫、そのままじっとしていれば、痛くないですよ。痛覚が過敏になっているだけですから」

私は一人呟く。

ガリリ。

男は無意識にかゆい首をかいてしまいました。

また無様に転げまわります。

ほどなくして、看守の応援が来て、男を連れて行きます。

「許さねえ！お前絶対許さねえからな！」

男は悪態をつきドアを蹴ります、そして痛みに絶叫します。

看守の一人が私のもとにやってきました。

「彼は君が何かしたと言っているんだが？」

「まさか。私がこの状況で一体何ができると？彼の狂言ですよ。お疑いでしたら、その監視カメラの映像でも確認してはいかがですか？何も映ってはいないと思いますけど」

私は顔の前で組んでいた手をほどき、看守の前で種がないことを示した。

「それでは失礼いたします」

私はその場を後にした。

許さない？

それはこっちのセリフだ。

愛する人と、我が子を奪ったお前を、私は許しはしない。
絶対に・・・

永続トラップ、発動。（後書き）

赤い月先生

何故、「私」が男に催眠術を掛けることが出来たのか、その理由の描写が無い事が気になりました。

それ自体はこの文の書き方から察すると、何故「私」が暗示を使えるのかは書かなくても良い事なのでしょうが、せめて暗示を掛ける時の描写はして頂きたかったです。

ですが、個人的には文の書き方が非常に読み易く、尚且つテンポも良いので、素晴らしいと思いました。

魔女ジルルキンハイドラへのお願

深い森の奥に一人の魔女が住んでいた。

魔女の名は、ジルルキンハイドラ。

その姿は幼女の姿をしているが、数百年の歳月を生き、その知識は海よりも深く、ありとあらゆる妙薬の知識をもっていた。

そして、遠くを見渡せる千里眼をもち、彼女の知らないことなどこの世にはないとさえいわれている。

俗世を嫌い、一匹のペットと暮らしている。

ペットの名はトットルツチエ。

人語を解する稀有な黒いライオンである。

ある日のことである。

一人の男の子が、彼女のもとへ訪れた。

「すみません。ジルルキンハイドラ様はいらっしゃいますか？」

「ふあ~~~~い」

ジルは両手にナイフとフォークを持ってやってきた。

そして、男の子を見るとその両方を床に落としてしまった。

「どうしたの、ジル。お客さん？」

少し様子がおかしいジルを見て、トットルツチエは奥から姿を現す。

「どうしよう、トットルツチエ・・・この子、可愛い・・・」

トットルツチエが男の子を見てやると、男の子はビクツとした。

「ジルの好みって、こんな子なの？」

ジルは、トットルツチエに向かって神妙につなずいた。

「ふーん」

「僕、アトレイアっていいいます。僕のお父さんが病気で。でも、お医者さんには治せないって言われて。だから、お薬欲しくって・・・」

アトレイアは、あくびするトットルツチエにおびえながら、ジルに

説明する。

「要するにお父さんの病気を治す薬が欲しいのね？」

「はい！」

アトレイアは、話を通じたのが嬉しくて、満面の笑顔である。

ジルはその笑顔を見て、にへらと笑みがこぼれてしまう。

「でもタダってわけには……」

「……僕、お金あんまり持ってないです……」

しゅんとするアトレイアをウルウルとジルは見つめている。

「じゃ、じゃあ、体で払うってのは駄目ですか？」

上目づかいにジルを見つめるアトレイア。

ジルは鼻血の花を咲かせて、その場に倒れた。

「ジ、ジルキンハイドラ様?!」

「ああ、大丈夫、大丈夫。ジルってば、男日照りの、耳年増だから想像力がたくましくって。あとで薬持っていくから、外で待っててよ」

「は、はい」

アトレイアはジルを心配そうに見つめながら、外へ出ていく。

「それでジル、薬は何処？」

「そのこの棚の……上の段……右から三番目……」

ジルはひくひくしながら、震える手で指差した。

トットルツチェは薬と取ると、アトレイアに渡した。

アトレイアはトットルツチェにお礼を言うと、家へと急いで帰って行った。

「ジル、大丈夫？」

「うん、もう大丈夫……にへら」

「ジル、楽しそうなところ悪いんだけど。多分ジルの思っているよ
うな展開はないと思うよー」

「何でよー。何でそんな不吉なこと言うの?」

「野生の勘、かな?」

「そんなの信じないんだから。私にだって百年に一度のラブロマンスだって・・・にへら」

「だめだこりゃ」

数日後、アトレイアはまたジルのもとを訪れた。

「ありがとうございます。ジルルキンハイドラ様。お父さん、元気になったよ！」

アトレイアはジルの両手をつかんで、ブンブンと握手していた。ジルの顔は緩みっぱなしである。

「これこれ、アトレイア。ジルルキンハイドラ様に失礼だろ」

アトレイアの後ろから大柄の男が現れた。

「お久しぶりでございます。ジルルキンハイドラ様。このたびは大変お世話になりました」

大柄の男は深々と頭を下げた。

「ええっと、どこかでお会いしましたっけ？」

ジルは見おぼえない男に、首を傾げた。

男はにっこりと笑った。

「覚えておいででしょうか？私、オルソンと申します。私が子供の頃でございます。よくこの森に友人たちとともに遊びに来ておりました。その折、ジルルキンハイドラ様とも一緒に遊ばさせていただきました。後でそのことが大人たちにはれてこっぴどく怒られたものです。無知ゆえの無礼、その節は失礼いたしました」

「ああ・・・そんなことも・・・」

「それでこの度のお礼、私たちができることでよければ何でもいたしますが・・・」

「おとうさーん！ここに畑あるよ！」

「ああ、そういえばメルフォキアが勝手に家の隣に人参畑作ってたねー。もうほつたらかしかだけ」

「それでしたら、私たちが手入れいたしましょう」

「でも、人参食べないしな」

「では、ほかの作物を育てましようか？」

「うん、そうだね。果物とか、甘いものならジルも食べるし。ね、ジル？」

「・・・あ？・・・そだね」

アトレイア親子は、畑の手入れを始めた。

彼らは作業が一段落つくと、また来ますと言って、家へ帰って行った。

「ジル、元気ない？」

「うん・・・なんか、オルソンたちと遊んだのって、つい最近なのになって思っで。私だけ取り残されてるなあって」

「さみしいの？」

「うん。ちよつとだけ・・・でも今はトットルツチエがいるから、大丈夫」

「でも、いずれは僕も死んじゃうよ」

「うん」

「できるだけ、そばにいるから。ごめんね」

「うん」

その後もトットルツチエの命尽きるまで、ジルルキンハイドラの傍らにその姿はあった。

魔女ジルルキンハイドラへのお願い（後書き）

神村律子先生

むう？

高千穂某先生の「DPの云々」と同じで、シリーズものなのですね。
ジルちゃん、いいキャラっす（笑）

魔女ジルルキンハイドラへの嫌がらせ

深い森の奥に一人の魔女が住んでいた。

魔女の名は、ジルルキンハイドラ。

その姿は幼女の姿をしているが、数百年の歳月を生き、その知識は海よりも深く、ありとあらゆる妙薬の知識をもっていた。

そして、遠くを見渡せる千里眼をもち、彼女の知らないことなどこの世にはないとさえいわれている。

俗世を嫌い、一匹のペットと暮らしている。

ペットの名はトットルツチエ。

人語を解する稀有な黒いライオンである。

ある日のことである。

ジルルキンハイドラの妹、ティナエルジカが彼女のもとを訪れた。

「やつほー、トットルツチエ、元気」

玄関に現れた色っぽい女性を、トットルツチエはたてがみを手入れしながら出迎えた。

「ああ、ティナ。どうしたの？」

「ジル姉は今どこにいるの？」

「寝てるよ」

「そう」

「起こしに行く？」

首をぶんぶん振りながら、ティナは答える。

「どうなるか分かってて言ってる？」

「うん。僕が初め起こしに行ったら、髭を二本もむしられた」

「髭ならいいけど、私なんか腕一本丸ごと持ってかれそうになったわよ」

「寝ぼけてるから容赦ないもんねー」

二人は共通の悪夢を共感して、うんうんとうなづく。

「そういえば、ティナってジルの妹なんだよね。何でジルよりおっきいの？前から疑問だったんだけど」

「ああ、私はずっとウルバあちゃんのとこにいたから」

「もしかしてメルフォキアが・・・」

「ええ、いつも人参のフルコースをつくってくれたわ。おかげで今でも人参見ると・・・」

「なんかジルが野菜嫌いになったのも納得できるよ」

トットルツチエは、ティナの遠くをみる姿を見て、金色のウサギの悪夢を思い出してしまい、身震いを一つした。

「どうするジル起きるまで待つとく？」

「いえ、いいわ。まあ、間が悪かったみたいね。出直してくるわ」
「うん。そうだね」

「ジル、おはよ」

「・・・おはよ。トットルツチエ、誰か来てたの？」

「うん。ティナが。さっき帰ったばかりだから、追えば追いつくかも」

「いいよ。どうせティナのことだから、そこら辺にいるわよ」

「ああ、いつものね。そういえば、何でティナってジルのこと目の敵にしてるの？」

「さあ？私、なんかしたかな」

「ふっふっふ、早く出てらっしゃい、ジル姉様。今度という今度は必ずぎやふんと言わせてやるんだから」

茂みに隠れているティナ。

「出てきたが最後、落とし穴で奈落の底に。そして底にはスライムの軍団が。哀れジル姉様は、口ではとても言えないようなとんでもないことに・・・」

ティナの高笑いが森じゅうに響いた。

ジルの家の扉が開く。

ティナはあわてて茂みに隠れ、様子をじっと見つめる。

「じゃあ、ジル。行ってくるよ」

(ああ、トットルツチェ、駄目よ。あなたが落ちても何の意味もないわ)

トットルツチェは、ひょいっと落とし穴を掘っているところを飛び越えると、すたすたと森の中に消えた。

(・・・まさかばれてる？・・・違うわよね。野生動物の勘ってやつよね・・・早くジル姉様出てらっしゃい！地獄を見せてやるわ！) また森じゅうにティナの高笑いが響いた。それから一週間が過ぎた。

「・・・何で出てこないの！ジル姉のことだから、本読んでるか、薬の調合でもしてるんでしょうけど、ひきこもるのもたいがいになさいよ！一言文句言っただけでやる」

怒り心頭のティナは、ずんずんとジルの家に近づく。

そして、

「きゃああああー」
落とし穴に落ちた。

「ジル、なんか声しなかった？」

「うん。今いいところだから。食事は後でいいや」

「いや、そうじゃなくて・・・まあ、本読み終わってからもいいか」

その後、あらゆる意味で瀕死のティナが救いだされたのは、三日後のことであった。

魔女ジルキンハイドラへの嫌がらせ（後書き）

水守中也先生

このシリーズ、いつも楽しく読ませてもらっています。

新キャラ登場で、さらに楽しくなりそうですね。トットルツチェとテイナの会話に出てきた、ウルばあちゃんも気になります。

テイナの落とし穴にですが、ジルのことですから、ばれただったというより、本気でひきこもっていたんでしょうね。あわせて十日間も（笑）

栖坂月先生

ジルキンハイドラシリーズは、読んでて落ち着きます。

それにしても、姉のジルは何だか言って利口者なので魔女という肩書きに違和感もないのですが、妹さんが魔女というのは違和感がありまくりですな。

それとも、この世界の魔女は『成る』ものではなく『生まれる』ものなんでしょうか。だとしたら納得ですね。ドジな魔女というのは、キャラ的にもおいしいです。

ただ今回、序盤のテイナとトットルツチェのやり取りの中で、テイナがジルを目の敵にしているような描写が見られなかったので、ジルの口からそんな話が聞こえた時に、納得感がありませんでした。何かこう、人參をお土産に持ってくるような『嫌がらせ』があれば、しっくりきたように思いました。

それにしても、山羊ノ宮先生のペースは速いですな。しかも長期連載もしつかり進んでいらっしやる。感心させられます。

また来ます。それでは

祝福 (R15) (残)

「おめでとっ」

普段無口で、無愛想な糸井先生が笑っていた。みんなが僕を囲んで、拍手をしていた。看護婦の白井さんなんて泣いてしまっている。

「君のおかげでたくさんの方が助かる。今までたくさんさんの試験をよく耐えてくれた。実際つらかったらう？」

糸井先生は僕を覗き込み、肩を抱いた。

「いえ、つらくはありませんでした。僕にできることは限られているので。先生たちに比べれば、全然平気です」

僕の言葉を聞いて、白井さんはまた声を上げて泣き出してしまった。あまりに泣くものだから、同僚の村田さんに抱きかかえられて、出て行ってしまった。

「まったく白井は情にもろくていかん。職業柄、出会いもあれば、別れもある。当たり前のことだろうに。せめて別れの時ぐらいは、笑って送ろうという気にはなれんものかね」

「でも、白井さんは優しくって僕は好きでした」

「そうか。まあ、個性というものも認めねばいかんのか。私は頑固者だからな。つい文句が出てしまう。気をつけねばいかん」

糸井先生はうーんと唸って、難しい顔になってしまった。

「それに僕、糸井先生も好きです」

糸井先生は驚いた顔をして、僕を見た。

「そうか？私はずきり嫌われていると思っていたが」

「そんなことないです。僕はここにいてみんなのこと好きですよ」

「そうか」

糸井先生はにっこり笑って、懐から銃を取り出した。

そして、僕に差し出す。

「どう使うか、知ってるね？」

「はい。僕はこの時のために生まれましたから」

僕は笑顔のまま、こめかみに銃を当てた。

そして、引き金を引く。

僕の脳みそが、部屋中に飛び散った。

僕が倒れると、糸井先生はいつもの無愛想の糸井先生に戻ってしまった。

糸井先生はリストを取り出すと、読み上げるのだった。

「肝臓の方はA棟の四 二号室の患者に。心臓は、C棟の一 三号室の患者に。ああ、それと腎臓については、加藤先生がすぐにでも手術の方にかかりたいと言っていたので、急ぐかどうか確認をとってくれ。加藤先生次第では摘出後すぐに手術を行うかも知れんからな。それとだな・・・」

それから僕の体は、いろいろな部位に切り分けられた。

そして、みんなのもとに行くんだ。

ねえ？僕は役に立ったよね？

祝福 (R15) (残) (後書き)

午雲先生

うーん、やがてはこうなるかも・・・知れませんか？一種、洗脳？催眠術？某国では人さらいや人身売買も横行し始めて居ると聞きます（金銭になるから）。だれを殺し、だれを生かすか、それを金銭が決める、というのも、皮肉なことというか、非常に恐ろしい気持ちになります。医療、製薬も今や基幹産業にして、壱大産業・・・移植用クローン人間とか・・・うう怖っ！感想でした。

河 美子先生

ホラーと思って、読んでいくと私のほうがよほど残酷な作品と思いい、反省しました。でも、これから臓器移植が簡単に行われると、ここまでいくとは信じたくないけど、意外とあるかもしれないとぞっとしました。

ありがとう

「わ〜〜」

康ちゃんと梓ちゃんは、新しく来たテレビに夢中だった。

大きなテレビに圧倒され、梓ちゃんは瞬きするのも忘れている。

康ちゃんに至っては、よちよちとテレビに突っ込んでいき、頭をぶつけて泣き出す始末である。

「こら、梓。ちゃんと康を見てってお願いしてたでしょ」

お母さんが泣きだした康ちゃんに気付き、抱き上げる。

「だつて〜」

「だつてじゃありません」

膨れてしまう梓ちゃん。

いつもならプイツとその場からいなくなるのに、今日はテレビが気になってその場から離れない。

「ただいまー」

お父さんが帰ってきた。

康ちゃんはお母さんの腕の中でもぞもぞして、抜け出そうとしていた。

「おかえり、あなた」

「ただいま。康ちゃん元気ですか〜?」

お父さんが康ちゃんのほっぺたをつつくと、康ちゃんは声をあげて、楽しそうに笑った。

そして、今度はお返しとばかりに、お父さんのほっぺたを力いっぱいつかむのだった。

「痛い、痛い。康、痛いって」

康ちゃんは痛がるお父さんの姿を見て、また楽しそうに笑うのだった。

梓ちゃんは、その光景をつまらなそうに見ていた。

「それで引き取ってくれるって?」

「ああ、今度の日曜日に電気屋さん来るって」

お父さんは、僕をばしばし叩きながらそう言った。

「ねえ、そのテレビ。捨てちゃうの？」

梓ちゃんは僕に興味がわいたのか、ふてくされるのをやめて、お父さんのもとに来た。

「捨てるっていうか、リサイクルだな」

「リサイクルって？」

「それは、その、なんだ。一回壊して、もう一回使えるようにすることだ」

「ふーん。壊しちゃうんだ」

「もうこのテレビも古いからな。今度の日曜に電気さんに引き取ってもらうんだ。だから今のうちにお礼言っとけよ」

「お礼？」

にやりと笑うお父さんに、梓ちゃんは明らかに嫌な顔をした。

それから梓ちゃんは、眉間にしわを寄せながら、お父さんを睨めつけながら、僕にお礼を言った。

「今までありがとうございました」

それを見ていた康ちゃんは、楽しそうに真似するのです。

いただきますをするように、ペチンと手を叩きお礼を言ってくれた。

「あ〜と〜」

僕は涙が出そうだった。

いや、実際には出ないのだが。

今までの苦勞が報われるようだった。

思えば、梓ちゃんには磁石でいたずらされたこともあった。

康ちゃんに画面をよだれまみれにされたこともあった。

本心を言えば、もっとみんなと一緒にいたかったけど、しょうがないよね。

僕からも言いたい。

今までありがとう。

ねえ？僕は役に立ったよね？

ありがとう（後書き）

神村律子先生

ああ、涙腺が・・・。
感動作でした。

作者は混乱している

俺はあこがれのヒーローのように、スケボーに腹ばいになって坂を駆け下りていた。

「梅干し食べて、スツ マン！」

だんだんと加速していく俺。

視線が低いせいか、ものすごく速く感じる。

こ、怖い。

というかこれはどうやって止まるんだ？

私は尊敬するヒーローのことを思い浮かべた。

『あいつはアホだから』

そう彼は、言われていた。

そうか、これは何かにぶつかって止まれということだな。

俺は背筋正しく、電柱に向かってさらに加速していく。

しかし、電柱にぶつかる寸前、強烈な殺気に襲われ、飛びのいてしまった。

「だ、誰だ！」

俺がいた場所には、白い鎧に身を包んだ奴がいた。

手にはバトルアックスを持ち、肩にはバラの紋様が描かれている。

「ロ、ローゼン ツター?!」

「俺も有名になったものだ」

奴は、にやりと不敵に笑った。

敵わない、そう思った俺は変身することにした。

手をクロスさせ、ネット世界の某有名本屋さんの名前を叫ぶ。

それで変身は完了だ。

「あつけないな。風車くるくるは、ないのか？」

「そんなものはない。だいたい変身シーンにこだわり過ぎなんだよ」

「そんなことはないだろ。子供たちの憧れだろ、そこは。俺もベルト買って、ポーズとかよく取ったし」

「そんなものはおもちゃ会社の策略だ。貴様は踊らされていたのだ！」

「そ、そうだったのか・・・」
奴はがつくり膝をついた。

勝負は決まったようなものだった。

「気にするな。誰も初めの三つの命令が、全て偽情報だったなんて思わないじゃないか。仕方ないんだよ」

「くっそ、波 砲にツールンマー、最近ではレク エム、メン トモリ。まったく日本人って奴は・・・」

「そう、コロー落としにはまった時期もあつたな。でも、それが ロマンってやつだ」

「ロマン・・・」

「の めもプロデビューしたし、もう戦わなくてもいいんじゃないか？」

「しかし、私はバラの定めに生まれた、華やかに激しく生きると生まれただ。今更」

「大丈夫。あなたは死なないわ・・・私が守るもの・・・」

俺と奴は互いに見つめあい、恒例のシット ト踊りとキタ タ踊りを踊って別れた。

そして今では数少なくなった電話ボックスを探すと、俺は変身を解いた。

空を見上げると、鯨雲とともにヴァル リーが飛んでいる。

今日も俺の脳みそは、いい陽気のようだ。

作者は混乱している（後書き）

栖坂月先生

こういうのはアマチュアならではですよー。

プロでやったら怒られます。でも、素人だからの遊びとしては楽しくて大好きですね。この作品の前二つが、妙に考えさせられる作品だったので、余計にギャップが凄くて吹いてしまいました。

まあ、ある意味この作品も考えさせられる作品なワケですが。

とりあえずネタの宝庫でしたが、まあほとんどはわかりました。最後の二つの踊りは調べました。グルルとパアくんは一生懸命見てなかったから、忘れていたようです。

個人的には、綾波の台詞が馴染みすぎていて笑ってしまいました。また来ます。それでは

午雲先生

ふふふ・・・なぞなぞみたい（笑）。こういうのん、案外、好きです。ヒーローもの、よく観て遊んだ世代なもので、ー。鳥山明「アラレちゃん」のヒーロー？しか分かりませんでした（汗）。

バイクに乗って走らないと変身できないのって不便やなあ、と子供心に思っていました（子供は自転車しか乗れないし）。むしろバイク会社のCMだったので、ー。そういえば、変身後のライダーさんはノーヘル？でしたね！？感想でした。

一途な思いと、秋の空

『ねえ、ねえ、愛美ちゃん好きな人いるでしょ？』

麗子がそう行つた時、私はぞつとした。

ついに、ばれたかと。

『ねえ、誰なの？教えてよ』

どうやら、ばれていなかったようだ。

私は、ほつと息を吐いて答える。

『そんな人いないわよ』

『ええ、嘘。だって愛美ちゃん、恋する乙女の目してるよ』

『どんな目だ？それは。だいたい私は麗子と違って、乙女モードには縁がないの』

事実そうであれば、私の心はどんなに楽か。

『そんなのさみしいよ。絶対恋愛したほうがいいよ。好きって気持ちすごく大事だよ』

『それはうまくいっている人の言葉でしょ』

私は思わず、口を滑らせた。
しまったと思ひながら、麗子を見ると、彼女の瞳はキラキラと輝いていた。

『やっぱり恋してるんじゃない。しかも叶わぬ恋って奴？誰誰相手って？もしかして不倫？』

野次馬根性丸出しである。

その気持ちは分からないでもないが、友人に対する態度としてはどうかと思う。

しつこく聞いてくる麗子に対し、イライラを覚えながらも、もうどうにでもなれと告白してしまう。

『雅臣。あんたの恋人の雅臣よ』

眉間にしわを寄せながら、麗子を見ると、麗子は固まっていた。

『……マジ？』

『マジ』

それから私たちは言葉少なに、相談した。

私はずっと眉間にしわが寄ったままで、麗子は薄い中途半端な笑顔を張りつけたままであった。

それから何でこの結論に至ったのか、よく分からないのだが、

「麗子から事情は、聞いてるわよね？分かってると思うけど、別にあなたと麗子の間をどうしようかって気はないから。私のけじめだから」

「ああ」

雅臣は私の前にいる。

彼女に言われたからって、ノコノコ来んじゃねえと思いながらも、来てくれて嬉しい自分も半分いることが、悲しかった。

「じゃあ、言うから」

「ああ」

私は深呼吸を三回して、雅臣を睨めつけた。

「・・・私はあなたのことが好きだ」

雅臣の表情は、私の言葉には一切動じず、ただ私のことをじっと見続けていた。

期待なんてしていない、でも。

「知ってる。いや、知ってた。でも俺、麗子のこと大切だから・・・」

「ごめん。それ以上は・・・お願い・・・」

私は彼の言葉をさえぎり、泣き崩れていた。

彼はその姿を見ていた。

慰めてもくれない。

冷たい男だと思った。

でも、好きだった。

「こういつ時は、抱きしめてくれるもんじゃないのか？」

涙声で、精一杯の強がり。

「でも、麗子そこにいるからなあ。後で変な誤解されても困る。と

「どうか絶対するしな・・・」

彼を見上げると、困った表情をしていた。

彼の差す方向を見ると、隠れているつもりで麗子がいた。

頭隠して尻隠さずとは、よくいったもので、彼女の姿を見れば一発でばれるだろう。

しかし、そんな彼女にも気付かないほど、私はテンパっていたのだと思うと、苦笑してしまう。

「じゃあ。何？麗子がいなきゃ、抱きしめてくれてたって訳？」

意地悪な私の質問に、雅臣は悩んでしまう。

「何迷ってんのよ。そこは迷わず、否定するところですよ」

「いや、どう断ったら黒木を傷つけずに済むかなって・・・」

「その言葉が一番傷つくっての！」

私は雅臣の腹に、空手初段の正拳突きを喰らわすと、崩れ落ちた雅臣をおいて、麗子のもとに向かう。

「麗子！」

あわてふためく麗子。

だが、やがて観念したのか、ばつの悪そうに出てきた。

私は彼女に感謝していた。

素直になれてよかった。

だって、今。

泣きながら、笑っていられるから。

一途な思いと、秋の空（後書き）

午雲先生

泥沼の三角・関係・・・心ここにあらず、絶えず彼女（麗子）に気をつかつてる、雅臣くんが哀れです。幻想・粉砕を期した正拳突きっ！？愛美の幻滅した気持ちがよく現われて居ると見えました（汗）。話してみたら、秋の空ってヤツですかね（微笑）。しかし、雅臣くん、かわいそ過ぎるー！？感想でした。

八町先生

僕と作者とでは、年が違うのか、それに併せて性別も違うのか分かりませんが、相手に対する思いやりの面で、違和感を覚えました。もっともこれが今の若い人の恋愛感であれば、それはそれで仕方ないと思いますが。

トットルツチェの追憶

深い森の奥に一人の魔女が住んでいた。

魔女の名は、ジルルキンハイドラ。

その姿は幼女の姿をしているが、数百年の歳月を生き、その知識は海よりも深く、ありとあらゆる妙薬の知識をもっていた。

そして、遠くを見渡せる千里眼をもち、彼女の知らないことなどこの世にはないとさえいわれている。

俗世を嫌い、一人で暮らしている。

ある日、一匹のライオンが彼女のもとを訪れた。

その時どこをどうやってその場所まで、たどり着いたのか分からなかった。

若いオスにハーレムを追い出され、森をさまよっていた。

偶然見つけたシカを襲おうとして、逆にその角で足を怪我してしまった。

もう満足に獲物を追うこともできないだろう。

僕は死を覚悟し、死に場所を求め、たださまよっていた。

「あら？珍しいお客さんね」

声が出たその先には、人間の女の子がいた。

その女の子は不用意に近づいてくる。

襲おうと思えば襲えたが、何もやる気の起きなかった僕は、ただ彼女のなすがままにされていた。

彼女が小瓶に入った薬品を僕の足にかけると、熱い痛みが走った。

思わず低く吠え、彼女に爪を立てそうになるが、

「ごめんごめん。しみるよね」

そう言いながら、僕を押さえつけ、彼女は容赦なく液体を流し込むのだった。

「よおし！こんなものかな？」

彼女は僕の足に包帯を巻き、腰に手を当てて胸を張った。

僕は足に違和感を覚えた。

先程までの痛みがウソのように消えている。

僕は良くなつた足に驚き、目を丸くした。

「さあ、もう何処にでも行ってもいいよ。ちゃんと治ったからね」

「・・・」

「どうして動かないの？・・・そう、もう戻るところが無いんだね。子供は殺され、今まで君を慕ってきたメスたちは、他のオスに夢中か・・・」

「・・・」

「だったら、居たいんだつたらここにいてもいいよ。私も一人じゃ暇な時もあるし」

その後、彼女は家からナイフを一本持つてきた。

彼女はナイフの先を見ようとはしないで、危なっかしい手つきで、指先を少し切った。

ぽたぽたと赤い雫が垂れている。

「居たいんだつたら、舐めると良いよ。でも、もしほかに行きたい所があるなら、やめといた方がいい。大変なことになるから」

何か含みのある言い方に、警戒してしまうのだが、僕は血のいい匂いに誘われて、その雫をひと舐めしてしまった。

瞬間、背を鈍器で殴られるような痛みに襲われ、軽く呼吸困難になる。

心臓を鷲掴みにされたように、締め付けられる。

全身の血管を蛇がはいずるような感覚に襲われた。

僕は転げ回り、何とか体に入った毒のようなものを出そうとするが、何の抵抗もできなかった。

気がつくくと、全身の毛は黒色へと変化していた。

「ようこそ。私はジル、ジールキンハイドラよ」

彼女はもうろうとする僕に、手を差し伸べていた。

「トットルツチエとジル姉にもそんな過去があったのね」

「あの時血に誘われて舐めないでいたらとか、少し考えるけどねー。まあ、舐めちゃったもんは仕方ないしねー」

「初めて会った時ってそんな感じだったけ。私が覚えてるのは、トットルツチエが熊に追われて『助けてー』って印象しかないんだけど」

「あ、あれ？ジル。いつからここにいたの？」

「初めからいたよ。二人がお話しを始めてからずっと」

「もしかしてトットルツチエ。今までのお話って全部ウソだったの？」

「そ、そんなことないよ。大まかにはあってるよ。嘘じゃないよー。ティナ、そんな目で見ないでー」

その後、ジルルキンハイドラの妹、ティナエルジカに新しい従者ができたのは、間もなくのことである。

トットルツチェの追憶（後書き）

栖坂月先生

よく出来たでつち上げでした。

それっぽい話にすっかりと作っており、トットルツチェの利口さが垣間見えます。リアリティの表現として、とても勉強になりましたね。

それにしても『助けてー』とかライオンが悲鳴を上げていたりするのは、かなり情けない話ですな。トットルツチェが隠したくなる気持ちもわかります。といより、最初から人語を話していたんですな。また来ます。それでは

その銃弾は届きはしない

「何を見てやがる！」

与田はいらいらとしていた。

短くなったタバコをくわえながら、うろうつろとしていた。

「どうせお前らにしたら、俺たちなんて紙くずも同然なんだろ。そんな奴がわめいたところで、なんも感じないんだろうさ。お前たちは！」

部屋の中は、フラスコやらビーカーが並び、机一面に何やら計算されたものが散乱している。

与田は頭をかきむしり、気が狂ったように独白する。

そう、彼は気がふれているのだ。

「人が苦しんでるのを見るのが楽しいのか？人が不幸になるのが楽しいのか？それとも人の幸福になる様を見て、自分の不幸を慰めているのか？人がやつてるのを見て欲情してるのか？そんなに覗くのが楽しいのか？いい趣味だよなあ？ハッハッハッハッ！」

今度は腹を抱えて笑いだす。

笑い声は自嘲を含み、やがて嗚咽に変わる。

与田の目からは涙が流れていた。

「どうせ俺たちは人形なんだよ。何の意味もない。生まれてきた意味なんてないんだ。ただお前たちの暇をつぶすためだけに生まれた存在なんだよ」

与田は膝をつき、天を仰ぐ。

彼の眼鏡は曇り、その意味をなさない。

「悲しいかな俺は天才なんだ。他の奴らと同じように、のうのうと生きれやしない。知っちゃったからな」

与田は力なく立ち上がると、机の中をあさった。

取り出したのは、おもちゃのような銃だった。

「何やつても無駄なあがきなんだよ。でも、あがきなくなるもんな

んだよ。人は。お前に分かるかい？人つてもんがどんな生きもんか」
与田は銃のマガジンに、変な弾を込めた。

弾の形はいびつで、そんなものが飛ぶように思えない。

与田は静かに銃を構えた。

曇った眼鏡の先に彼が何を見ているのか分からなかった。

その構えている先に何かがあるのかも。

「当たるわけねえと思っっているだろ？どうせ俺たちは紙くずと同じだからな。ただの文字の羅列なんだ。そこにいるってことさえお前たちには分からねえんだ。でも、知っちゃまったからな。撃たずにはいらねえ。俺は人だから」

与田は引き金を引いた。

破裂音がした。

銃弾は届きはしない。

与田は眼鏡をとり、肩で息をしていた。

そして、私たちを睨んでいた。

その銃弾は届きはしない（後書き）

栖坂月先生

面白いかどうかは別にして、興味深い作品でしたね。

漫画とか映画とか演劇とか、何かしら視覚的にダイレクトな媒体であるなら、こういう見ている側を巻き込むという作品に違和感が無いものなんでしょうが、小説の登場人物に気付かれたの初めてのような気がします。まあ、有名な作家の一人くらいは、やっていそうな気がします。

私の中では文字が紙から剥がれ、合体して人型を成していました。ある意味ホラーですね（笑）

いずれにせよ、天才の表現方法としては面白いアプローチだと思いません。大変参考になりました。

また来ます。それでは

秋の味覚

今日の晩御飯は秋刀魚だった。

私は秋刀魚の黒い所が苦手で、よく残す。

「おいしいのに」

そう言つて、お母さんは私の分まで食べる。

お父さんと一緒にお酒を飲みながらだから、きっとお酒の肴だからおいしいのだ。

あの黒い所は、大人の食べ物なのだと思う。

旬のものだとしても、子供は子供の食べ物を食べるべきだと思う。だから無理して食べることはないと思う。

でも、秋の子供の食べ物って何だろう。

マツタケ？

柿かな？

梨だ。

梨はおいしい。

私は好き。

でも今は梨がないので、私はさつまいもを取り出した。皮をむいて、適当な大きさに切る。鍋に適度な量の油を入れて、砂糖と芋を入れて、一気に揚げ焼きする。

うちの作り方、お母さんに教えてもらった。

焦げないようにひっくり返して、出来上がった。

お皿に移して、爪楊枝を芋にさす。

そしてゴマを振った。

出来たては、熱くてはふはふ言いながら食べた。

表面はカリカリしていて、中はほくほくしている。

砂糖の甘みと、芋の甘みが口の中に広がる。

これぞ子供の食べ物だろうと、一人納得しているとお父さんがやっ

てきた。

「おお、大学芋か。懐かしいな」

お父さんは、爪楊枝で芋を突き刺し、一気にほおばる。案の定、熱くて一度口から出してしまっ。

「お父さん、きたくない」

「すまんすまん。いや、熱くてな」

その声を聞いてか、今度はお母さんまで来てしまっ。

「あら、いい匂いね」

お母さんは熱さをものともせず、手づかみで芋をつまむ。

「結構おいしいじゃない」

そして、なかなかの評価を貰った。

一人分の夜食は、あっという間になくなってしまった。

私はおいしそうに食べる両親を見て、

(まだまだ子供だな)

そう思った。

秋の味覚（後書き）

まいまい@”先生

ああ、自分も、梨が大好きです。

もうそろそろ、焼き芋の季節。

ああ、今から、食べたくなってきました。

Y A S 先生

暖かい家族の一こま。とつてもほっとする作品でした。

私も短編を書かせていただいていますので、こういうほっとする作品を読ませていただくと、大変参考になります。

私は、秋刀魚のあの黒い部分、血合いというようですが、嫌いではないですよ。

あ、酒の肴だから、ですね。納得。

神村律子先生

もうすっかり秋めいて来ましたね。

でもこのお話、いろいろ我慢してる私には酷です（泣）

河 美子先生

いい家族。こういうの好きです。大学芋、食べたくなりました。

食事風景って、ホームドラマに欠かせないように、向田邦子の小説でも必ず出てきます。読者が食べたくなるものを書くことができる人は、文章力のある人だと思います。今後も読ませていただきます。

「策ちゃん、どうしよう?」

朝学校に行くために、京を迎えに来たのだが、何だか様子がおかしい。

京は、もじもじとしている。

「どうした。なんかあったのか?」

「あの。驚かないでね?」

京は普段はしていない猫耳がたニット帽をとると、

「朝起きたら、耳が四つになっちゃったの」

「ね、猫耳!!!!」

そこには、黒くてモフモフの耳があった。

俺は思わずガツと握ってしまふ。

「い、痛い!痛いよ」。策ちゃん。なんだか敏感なところなの。だから、もつと優しく触って」

「ああ、すまん。ついな。これならいいか?」

サワサワなでなで。

「あう、そ、それなら、大丈夫かも。でも、あ、ん、そんなに優しくされたら・・・」

「触られると駄目なのか?だったらこれならいいのか?」

俺は猫耳に息を吹きかける。

「ひゃん、くすぐりたいよ」

「じゃあ、こっちの耳ならいいのか?」

「あん、だめ。そっちもだめ」。う、ああ、噛んじゃだめだつて」

「朝っぱらから何しとるか!!!!」

俺は猫耳に夢中になりすぎて、側頭部に迫る危険に気づかなかった。ドガアアアアアアアアアアアア!!!

俺は砂煙をあげて、地面を転がり飛んでいった。

見事に晶の飛びげりがさく裂した。

「まったく、朝っぱらから家の前でさかるな。この変態が！それに
お姉ちゃんも、お姉ちゃんだよ。あんな変態、相手にしたら駄目だ
よ。あんなの相手にしてたら腐っちゃうよ」

「晶ちゃん・・・で、でも、私策ちゃんのことを好きなんだもん。
朝からでもいちやいちゃいたいんだもん」

「ああ、駄目だ。お姉ちゃんまであの変態に毒されてるよ。もう関
わらん方がいいかも」

「でもでも、私と策ちゃんが結婚したら、晶ちゃん、策ちゃんの義
妹だよ」

「何?! 義妹?!」

俺は火事場の萌え力を發揮し、晶のもとに音速で馳せ参じた。

「お兄ちゃん、って呼んでごらん」

俺は晶の手をとり、真摯に目を見つめ、訴えた。

晶は、震えていた。

そして手を振りほどき、俺を見つめる。

「私に触れるな!! このばい菌が! 死にさせ! ギャラクティカマ
グナム!!!」

「うおおおおおお!!」

数多の光速の拳撃が、俺を射抜いた。

俺はどさりと地面に崩れ落ちた。

「・・・君は小宇宙を見たか?」

「策ちゃん、学校に遅れるよ」

「フン」

「で、何で生えてきたんだ。猫耳」

「私にも分らないの。朝起きて鏡見たら、いきなり生えてて私も
すっごく驚いたんだよ」

昼休み、互いの机を合わせて仲良く昼食を食べていた。

「でも、耳だけなんだよな。シッポとかは生えてないんだろ?」

「シツポもあるよ」

「あ、あるのか!」

京はスカートの中に手を突っ込んで、もぞもぞする。

そして、耳と同じ毛色のシツポを取り出した。

「・・・触ってもいいか?」

「いいけど。耳とおんなじで敏感なところだから、そつとね」

「分かってる」

モギユモギユにぎにぎ。

「にゃん!・・・や、やっぱりだめ。気持ちいいけど、だめ」

「そうか、それは残念。じゃあ・・・」

ハムハム。

「あん。だめ、噛むのもだめ」

「貴様!公衆の面前で何しとるか!」

予想通り晶が教室に乱入してきた。

そして、俺めがけてソバットキックをかます。

しかし、来ると分かっていれば避けることも容易い。

俺は強靱な腹筋と背筋により、晶のキックを体をそらして避けた。

しかし、良すぎる俺の動体視力は、あるものを見てしまう。

青と白のストライプ。

「し、しまパン!」

俺はつい見とれてしまっていた。

悲しいかな、これは男の性だ。

本能だ。

神は言った。

『しまパンを見よ』と。

気づけば晶のかかかたが、鎌首もたげて俺の頭上にあった。

「しまった!」

「地獄に落ちろ!この腐れ外道が!!!」

グシャ。

「策ちゃん!」

京の悲痛な悲鳴が響く。

そして、ぐちゃぐちゃの俺に駆け寄る。

誰か俺にモザイクかけて。

「策ちゃん、私も妹と同じしまパンはいてるよ。見る？」

にっこりと見つめあう二人。

だが、俺に残された時間はなかった。

「最後に・・・京の・・・しまパンが・・・みた・・・かつ・・・
た」

ガクッ。

「策ちゃん！」

その男の一生は、宇宙にしてみれば一瞬のきらめきだったのかもし
れない。

しかし、誰よりも輝いていた。

そうは思わないだろうか。

儚い命だからこそ、人はかくも輝けるのだ。

「策ちゃん、五時間目移動教室だよ。そろそろ行かないと。寝てた
ら先行くよ」

「フン。そこで一生死んでろ」

猫耳と変態と義妹（予定）

（R15）（後書き）

栖坂月先生

もう手遅れだ、この作者！

すいません、興奮してしまいました。

これは酷い。実に酷い。大好きです。

特に、目の前にある猫耳を差し置いて確定していない義妹に走るところが素晴らしいです。変態というより病気ですね（笑）

ただ、オチの部分で片付けきれていないような印象があったのは少しだけ残念でした。猫耳&姉妹だけで満足してしまっただけでしょうか。いっそ投げっ放しにするのなら、前半部分の小宇宙コスモを見た辺りで終わっていた方がスッキリしていたかもしれませぬ。

いや、個人的には後半も面白かったですよ？

やっぱり尻尾は大事だと思いますし。

また来ます。それでは

ぴいすけ先生

猫耳萌えー！o(´・`o)のぴいすけです。はじめましてです。

良いな〜策ちゃん。猫耳と尻尾が触れてー。羨ましい羨ましい！

でもどちらかと言うと、猫耳メイドさんの方がもっと萌え…（って、何言ってるんだぴいすけは！？）。

ではでは、ぴいすけでしたー。

Water Fall

流れ落ちる水は轟音を立てて、落ちていった。

弾むようにしぶきが飛び散り、波紋を生む。

波紋は幾重にも重なり、やがて一つになっていく。

そして、私の足首にそのリズムを刻むのだ。

見上げるとそこには虹が。

さんさんと降り注ぐ日の光と水の共演である。

波の長さの違うさまざまな色は、折り重なって歌うのだ。

虹のコーラスを見ながら、そのしぶきの一つ一つに目を凝らす。

一定に聞こえるしぶきの音は、よく聞くと違う。

カンタービレ。

そこはもつとピアノ。

だんだんと、そう、クレシェンド。

私は彼らの前で指揮を振るように、囁く。

水上の舞台に観客は、私だけである。

悠久に続くその演奏会は、終わりを知らない。

その圧倒的なまでの存在感を感じ続けた結果、私は水の中に落ちて

しまう。

水の中で気づく、演奏は舞台の上だけで行われているわけじゃない。

まるでシヨアの合間に飛んでいく飛行機のように、泡たちが私の前

を次々に通り過ぎていく。

水の中には魚やら生き物がたくさんいた。

どうやらここのお客様さんは、恥ずかしがり屋らしい。

あら、こんなところにいたのね、それじゃあ、またお会いいたしま

しょう。

と澄ました挨拶をして、私は水面から顔を出した。

目線を変えると、その存在自体は変わらないのに、大きく見えてし

まう。

矮小な自分と卑下していたのは、水の中だったからだろうか？

また波紋が、私の首筋にリズムを刻む。

気持ちがいい。

煩わしいことは何も考えず、ことうしていられる、それだけで私は幸せだった。

Water Fall (後書き)

栖坂月先生

続けて読んでみると、どうしても違和感が(笑)

ついさっきまでシマパンとか書いていた人には思えません。

山羊ノ宮先生は、こういう詩的といいますか、短くて韻を踏むような文章も向いてますよね。私にはない才覚だと思います。同じように短くとも、こういう感じにならないんですよね。何というか、正確性を求めて野暮っなくなるような印象でしょうか。良い意味で適当というか、事実を無視するような描写ができるからこそ、このような文章になるのだらうと思います。

学術書と違って、書くだけなら簡単なのですが、良い物を書くのはむしろ難しいですね。そんなことを思っていました。

また来ます。それでは

トヤさん日記

トヤさんは女性である。

トヤさんは背が小さい。

トヤさんは関西弁である。

トヤさんは変わった人である。

トヤさんはチョコレートとプリンをこよなく愛する人である。

ある日のトヤさんのことである。

「トヤさん、何してるの？」

「うん？うち今な、絶望の淵におんねん」

「絶望の淵？」

「こっからなあ」

トヤさんは、地面に線を引く。

「こっちかわが絶望やねん」

そして、地面に『ぜつぽー』と書いた。

「何か大変そうだね」

「そやねん。今世の中大変やろ。だから、うちもちよつとは大変な
ん味わおうと思つてな。絶望に飛び込もう思つてんねん」

トヤさんは、地面に引いた線をじっと見つめている。

「そっか、がんばってね」

立ち去ろうとすると、トヤさんは服の袖を引っ張った。

「でもな、一人やつたら心細くてあかんねん。一緒に飛び込んでく
れへん？」

その線を越えたからといって、絶望してしまう訳ではないだろう。

しかし、縁起が悪い、悪すぎる。

「あかんかな？」

「・・・いいよ」

ためらいながらも了承して、二人は手をつないだ。

小さいトヤさんの手もまた小さかった。

「んじや、いくで。せーのっ」

二人は勢いをつけ、線を飛び越えた。
別段何の変化もない。

いや、変化があっても困るのだが。

「はあ、良かった。飛び越えたわ」

「良かったね、トヤさん」

トヤさんは目をキラキラさせて、こちらを見る。

「なんかドキドキする。そうか、絶望するのはドキドキするもんな
んやな」

・・・

トヤさん、それ違うと思っよ。

トヤさん日記 R

トヤさんは女性である。

トヤさんは背が小さい。

トヤさんは関西弁である。

トヤさんは変わった人である。

トヤさんはチヨコレートとプリンをこよなく愛する人である。

チヨコレートパフェにプリンが乗っていたら最強だと、トヤさんは語っていた。

ある日のトヤさんのことである。

トヤさんは川の前でかがんでいた。

水面を見つめ、じっとしている。

「どうしたの？魚でもいる？」

「ちやうねん。川の水見とってん」

「川の水？」

「知つとるか？川の源流の水はちよろちよろとしか流れてないねん」

「うん。知ってるよ」

「うちずつと疑問やってん。何でちよろちよろがこんなに増えんねんで。でも、分かってん。何でこんな水が増えるんか」

トヤさんは眼鏡をかけてもいないのに、眼鏡を直すしぐさをする。

「これは、温暖化のせいや」

ビシツと指差すトヤさん。

「温暖化？」

「せや、水はな、温度が高いと膨張するねん。昨日テレビで言うった。山は涼しいやろ。だから、ここまで降りてきたら暖かくて膨張しとんねん」

確かに温度が高いと水は膨張するが、川の水かさが増える理由ではない。

「ここよりもつと下流に言ったら、もつと膨張して大変なことにな

る。日本沈没する言うとった。テレビで

遠い目のトヤさん。

「せやからな、うちもなんかせなあかんと思うてん。だから、これで地球救うねん」

トヤさんはおもむろにバケツを取り出した。

そして、川の水を汲むと草むらに水をぶちまけた。

満足げなトヤさん。

「世界は救われた」

・・・

いや、トヤさん、救われてないから。

まだ地球、ピンチだから。

トヤさん日記 S

トヤさんは女性である。

トヤさんは背が小さい。

トヤさんは関西弁である。

トヤさんは変わった人である。

トヤさんはチヨコレートとプリンをこよなく愛する人である。

プリンアラモードとザッハトルテならどっちも欲しい欲張りさんである。

ある日のトヤさんのことである。

トヤさんは闘っていた。

相手は木に止まっているカラスである。

「てや、とう、バシバシ、ドカドカ」

口で効果音をつけながら、拳を繰り出し、けりを放っている。

カラスは、かあかあ鳴きながら逃げだしていった。

「ちゃらら、らったん、たんたんたー」

どうやらレベルが上がったようだ。

「トヤさん、何してるの？」

「大ガラスを倒した。レベルが上がった。今レベル三」

倒してないけどね。

しゃれこうべも持ってないしね。

「・・・なんか、トヤさんのレベル低いね」

「いや、この前までは戦士やっとなたんやけど、近所のおばちゃんに木の枝振り回したらあかんって怒られてん。だから、今は転職して武道家やねん」

「そうなんだ」

「これからピラミッド行って、黄金の爪探しまわって、結局見つからんで、そのまま屍になんねん」

「そう、がんばってね」

立ち去ろうとすると、服の袖をひっぱられた。

「悪の魔王やって、悪の魔王」

トヤさんのことだから、どうせいいっていつまで離さないのだろう。しびしび了解すると、トヤさんは容赦なく一撃を放った。

「やーらーれーたー」

わざとらしく倒れると、トヤさんは満足したようだ。

「世界は平和になった」

・・・

トヤさん、武道家似合ってるよ。

特にかしこさが低い所が。

トヤさん日記 S (後書き)

栖坂月先生

多分、一般的には凄いとかが、素晴らしいとか、逸品だとか、そんな批評を受ける作品ではないように思います。先生の他の作品にだって、これより優れた作品はたくさんありました。

でも、これはピンポイントにツボでした。

最後に買った漫画が『あずまんが』とかだったりする私には、とても無視することのできない作品です。

うっかり大阪を思い出しました。

トヤさんはメチャクチャ素敵です。楽しませていただきました。

また来ます。それでは

残像

僕はどうしていいか分からなかった。

いろいろ思い返してみるのだが、いい思い出しかない。

もちろん少しは喧嘩したことだってあるし、全部が全部いい思い出じゃないけれど、今では笑いながら、あの時はこうだったよねと語れる。

だったら気づかずに、彼女を傷つけていたのかもしれない。

もしそうだとしたら、僕はなんて愚かなんだ。

一人で舞い上がっていた自分を想像して、自己嫌悪に陥る。

「ごめんなさい。ごめんなさい、ホントに・・・」

彼女は泣きながら、そんな言葉を繰り返していた。

謝られても、僕にはどうしようもない。

振られたのは僕の方だ。

拒絶されると分かっていて、彼女を抱きしめるなんてことはできなかった。

彼女に別れを告げられた今でも、彼女のことを好きだった。

泣いている彼女を見て、愛しいと思う。

気持ちが残っていて、彼女を離すべきではないのかもしれない。

後悔するのは目に見えている。

けれど、僕の気持ちを押しつけて、縛り続けることに何の意味があるのだろうか。

僕は彼女を愛したいと同時に、彼女に愛されたいのだ。

彼女の幸福を本当に願うなら・・・そんな言葉が頭をよぎった。

本当は僕の手で、彼女を幸せにしたかった。

でも、無理だった。

僕は、僕の力の無さを呪った。

結局、僕は彼女の別れを受け入れた。

僕は泣くこともできずに、ただ心にぽっかりと黒くて深い穴が開い

た。

数日後、彼女が男と一緒に歩いているのを見た。楽しそうに笑う彼女を見て、ああ、だから『ごめんなさい』なのかと理解した。

数日前までは、その笑顔は僕だけのものだった。いや、もしかしたら既に数日前も僕だけのものではなかったのかもしれない。

だが、その男が僕と彼女が付き合っていた時からの男なのか、別れてからできた男なのか、それともただの男友達かなんて、分かるわけ無かった。

結局は、僕の想像でしかない。

彼女に聞けば、もしかしたら分かるかも知れない。

もちろんそんなことはできない。

僕はもう終わった男なのだ。

けれど、僕は彼女の笑顔が、なんだか気に入らなかつた。

彼女の幸福を願ったはずなのに。

「お待たせしました」

きれいな女性だった。

あれから数年たった。

僕はあれから異性を意識すると、決まって彼女の泣き顔を思い出す。笑顔で話す女性に、彼女の泣き顔が重なる。

出会いは別れの始まりだと、僕に思い知らせるかのようじ。

けれど、もう彼女の思い出に、さざ波が立つことはない。

今では本当に彼女の幸せを願うだけである。

そう思っている自分は、もしかしたら彼女のことを今でも好きなのかもしれない。

目の前の女性との会話に、うなずき、返答し、一人苦笑する。

男って生き物は、なんて女々しいもんなんだと。

残像（後書き）

栖坂月先生

私はドラマを見ませんが、最近のドラマといえば女性向けというイメージがあります。男性向けの恋愛物に出てくる女性も都合の良い生き物ですが、女性向けの恋愛物に出てくる男性も都合の良い生き物が多いと感じます。

特にドラマを見ているような女性に、この作品は読んでもらいたいですね。綺麗すぎるワケでもない、かといって肉欲ばかりを求めるのでもない、ある程度利己的でありながら理性的な節度を持った男性の、標準的な発想であろうなと素直に感じました。

極論と偏見を愛する私のような人間には絶対に書けない話です。

何というか、ちょっと癒されました。

また来ます。それでは

S F (残)

『WARNING』

警告。

けたたましい警告音が研究所内に鳴り響き、所内は騒然としていた。

「どうやらナノマシンが漏れ出ているそうだ」

「だ、大丈夫なの？」

「大丈夫なわけあるかよ、さっさと直しに行かないと」

「そ、そうよね」

そのナノマシンは初め、軍用に開発されたものだった。

部隊の統制をとるための通信機器としての開発。

しかし、結局活躍の場は与えられず、民間の通信機器への転用を目指し、この研究所で開発が進められていたのだった。

「とりあえず俺たちは、ナノマシンの製造の現場に。サラとアンディは管制室を頼む」

「オーケー」

「分かったわ」

研究所の職員はそれぞれ役割を決め、その対処に奔走した。

「気をつけるよ、サラ」

「分かってる」

二人は管制室の扉のロックを外すと、中に入り込んだ。

銃を構え、アンディは警戒するが、すぐに下ろしてしまう。

サラは思わず、口を押さえ、目をそらしてしまった。

管制室では惨状が広がっていた。

死屍累々、そんな言葉が相応しかった。

「こいつか」

アンディは、メインの管制パネルの前の椅子に座っている男を見た。

男の手には拳銃が握られていた。

その頭には銃痕がある。

その男はアンディのかつての同僚であった。

先日のリストラを理由に、このような暴挙に出たのだろうか。

アンディは、やりきれない気持ちを押しさえ、コントロールパネルを叩く。

事態は一刻を争う。

「サラ、手伝ってくれ」

返事がない。

「サラ！」

「えっ？」

茫然自失となっているサラに、アンディはしつかりしろと声をかける。

「大丈夫よ、大丈夫」

気丈にふるまう彼女だが、その動揺は明らかだった。

もちろんアンディも動揺していたが、彼女のおかげで、自分がしっかりせねばという気にはなれた。

「設定が生産速度も、性能もマックスになってやがる。急がないと大変なことになる」

「そうね、でもこのプロテクト厄介だね。これなら・・・駄目か、エラーが出る」

サラはコントロールパネルをいじくりだしてから、ようやくその持ち前の集中力で、冷静に戻る。

「違うのね、これじゃない・・・だったら、このパスコードを入力すれば・・・もう！ダミーだなんて！」

「ああ！もうやってられん！こんなもんは壊せば何とかかなだよ！アンディは何を思ったのか、手近な椅子を持ち上げた。

「何するの！そんなことしたら、責任問題よ！やめなさいって、そんなことどうまくいく訳無いじゃない！」

「何とかなるなる」

アンディは、激昂するサラにウインクをして、ガシヤン。

椅子は、コントロールパネルではなく、その場に落とされた。

「何？」

二人は同時に口にした。

違和感を覚えた。

自身の声とは違う声が、頭に響いたのだ。

二人は見つめあう。

そして、その瞳に映るものに驚愕した。

片目で相手を見、もう一つの目で自分自身を見ていたのだ。

(ナノマシーン)

それはどちらかの思考だった。

だがしかし、それは両者の共有するものとなっていた。

五感はもとより、感情や思考までもがリンクしていた。

「いやあああああああ！」

サラが叫んで、アンディを突き飛ばす。

そして、サラはへたり込んで、目を塞ぎ、耳を塞ぐが、アンディの

目や耳を通して、自分自身を見ていた。

アンディが背中を打ったのであるう、サラの背中にも鈍痛が走った。

「私の中に入ってこないで！」

サラは自分の中に入ってくる異物に対しての嫌悪感でいっぱいだった。

少なくともその感情は、彼女から端を発したのだが、アンディの心にもその感情は浮かんでいた。

アンディは、その感情を自分のものではないと言い聞かせ、抑え込もうとするのだが、どんどん膨らむ感情に、飲まれていった。

「お前こそ俺の中に入ってくるな！」

アンディはサラに銃を向けた。

サラは目をつむり、うずくまっているが、自分に対してどんなことが起こっているのかよく分かっていた。

「いやあ！やめて！撃たないで！お願い！」

アンディは銃を向けながらも、銃を向けられる恐怖の中、引き金を引いた。

発砲音がした。

気を失いそうな痛みを耐えながら、アンディはようやく安堵した。

やっと両目で世界が見える。

肩で息をしながら、アンディは立ち上がる。

（早く何とかしないと）

自分のしたことに、いらつきながらもコントロールパネルに向かう。

『なんて事を』

アンディは、はっとする。

頭の中に声が響いた。

『かわいそう』

『何も殺すこと無いじゃないか』

『人殺し』

頭の中を駆け巡る非難の声。

そして、アンディに対する嫌悪感がアンディの中を支配した。

「うおおおおおおお！！！」

アンディは吠え、銃を口の中につまむ。

そして、引き金を引いた。

その惨劇は一幕でしかない。

世界中で同じようなことが起きていた。

精神をきたし、自殺、他殺、そうならないまでも、もう人は人と呼ばれる代物ではなくなっていた。

世界を支配していた人の歴史は、こうしてあっけなく閉じてしまった。

そして、それは人だけに限ったことではない。

ありとあらゆる生物が、混乱をきたしていた。

しかし、多様性とはこの時のためにあつたものなのかもしれない。
脳に注がれる大量の情報を処理し、他のものを支配下におけるもの
が現れる。

一なる全、全なる一。

神の誕生である。

かくして、人の時代は終わり、神話の時代が始まった。

栖坂月先生

先生にしては極端な作品であるような印象を受けますね。

でも、その経緯は面白かったです。もう少し長い作品になれば、きっとナノマシンの詳細や、あるいは彼らの意思までも表現されていたのかなと感じます。

一見すると事故に端を発する偶発的な出来事に見えますが、あるいはナノマシンにとって都合の良い神をつくるためのプロセスだったのかも、といったような想像をしてみました。

神に支配される神話の時代、むしろ平和な世の中かもしれませんね。それでは

午雲先生

山羊の宮先生、作品、読ませてもらいました。相互・不信、集団・発狂というキーワードが思い浮かんで来ます。一行、一行に黙示的なメッセージを含めてありそうな予感がします。

この謎のナノ・マシン、遠隔・相互・感応と名乗る能力を有すると考えてやるべきでしょうか？脳波から五感までもれなく同時・共有してしまう・・・まさに一大パニックですね！

このパニックに耐えうる者、それは、ミミズのような単性・生殖・生物かも知れません。両性・具有、もしくは単性なる生物なら、相互不信とも無縁でしょうから。

なかなか刺激的な内容とお見受けしました。精神・感応の能力は、こと、社会の維持という方面にとっては、両刃の剣ですね、確かに、個人・個人の管理も行き過ぎると、息づまる思いが来たすばかり、少し、ゆるみというか遊びをもたせてほしい感じがします。北風と

太陽ですね（苦笑）。感想、以上です。

秋雨 (R15)

私は携帯を見つめていた。

見つめていたからといって、かかってくる訳ではない。

もう何日もあいつの声を聞いていない。

メールを打つても、取り合ってくれない。

学生の頃は良かったな、と携帯を握りしめながら思う。

学生の頃は、付き合っただけで欲しかったら、告白したものだ。

『付き合ってください』

明確な区切りがある。

ところが大人になったら、そんなもの曖昧なものだ。

初めて会って、気が合えば、連絡を取り合うようになって、友人たちと一緒に遊んでいたのが、二人だけでもよく遊ぶようになっていく。

私はあいつとは付き合っていると思っていた。

けど、それは私だけのことで、あいつはそんな風に思って無かった。

何度か寝たのに。

それでもあいつにとっては遊びで、私なんてどうなっても良かったんだ。

私がひどいこと言っても、あいつはいつもへらへらしていた。

結局、私の話なんて真剣に聞いてなんていなかったんだ。

それを優しいなんて勘違いして、最悪だ。

男なんてみんなそうだ。

やることしか考えてない。

美人を見れば、目がいくし、胸元が開いた服着てれば、そこに目がいく。

『そんな服着てる方が悪いんだろ』

お前は猿か。

人間ならちよつとは理性を持って、我慢しろ。

あいつみたいな下半身で思考しているような男は馬鹿だ。
そんな馬鹿を体に受け入れて、今が人生で一番幸せな時だと思って
いた私は、もつと馬鹿だ。
どうしようもない阿呆だ。
救いようのない間抜けだ。
私は袖で涙を拭う。
しとしと降る涙は、私の渴いた心を潤しはしない。

魔女ジルルキンハイドラへの復讐

深い森の奥に一人の魔女が住んでいた。

魔女の名は、ジルルキンハイドラ。

その姿は幼女の姿をしているが、数百年の歳月を生き、その知識は海よりも深く、ありとあらゆる妙薬の知識をもっていた。

そして、遠くを見渡せる千里眼をもち、彼女の知らないことなどこの世にはないとさえいわれている。

俗世を嫌い、一匹のペットと暮らしている。

ペットの名はトットルツチエ。

人語を解する稀有な黒いライオンである。

ある日のことである。

金色のウサギ、メルフォキアとジルルキンハイドラの妹、ティナエルジカが彼女のもとに来ていた。

この日、皆は一緒に食卓を囲んでいた。

「ふっふっふ、この野菜スープに唐辛子をたっぷり入れて、ジル姉のと取りかえれば、哀れジル姉は大変なことに・・・」

ティナの高笑いが、食卓に響いた。

「後は、これをジル姉のと取りかえるだけね さあ、ジル姉覚悟しなさい！」

「いただきます」

「いただきます」

「あ、あれ？」

ティナが高笑いしているうちに、食事は始まってしまった。

「どうしたの？ティナ。食べないのー？」

「い、いや。食べるわよ。トットルツチエ。でも・・・ねえ、ジル姉。替えっこしない？」

「嫌だよ。そんな赤いの。私辛いの嫌いだもん」

固まってしまうティナ。

その様子を見て、メルフォキアが動く。

「もしか、ティナエルジカ様も野菜嫌いでしたか？ウルリカロナエルザ様のところにいらっしやっした時には、そのようにお見受けできませんでしたが」

「そ、そんなこと無いわ。ウルばあちゃんのところに行った時もちやんと食べていたでしょ、メルフォキア。食べる。食べるわよ」

メルフォキアのくりくりした目で見つめられながら、ティナは意を決して、スープを一口・・・

「か、辛い！！痛い！！う、み、水」

「ミミズー？」

「ちがーう！トットルツチエ、水！！」

ティナは水を一気飲みすると、ようやく一息ついた。

そして、ジルを指差し、宣言する。

「絶対許さないんだから！ジル姉、首を洗って待ってなさい！！」
そう言うと、ティナは飛び出していった。

「ねえ、トットルツチエ。私何かしたかな？」

「さあ、いつものことだし、いいんじゃない」

「そっか」

「でも、ジル。野菜普通に食べれるようになっただね。知らなかったよ」

「エッヘン。私だって本気出せばこんなもんよ」

「・・・って、待って。ジルのだけ、僕らと中身違うじゃん。ずるーい」

「ず、ずるくないもん。たまたま昨日の残りがあって、そのまま置いてたら腐っちゃうし、やっぱり食べ物は大切にしなきゃだし・・・」

「もういいよ」

「ホントだっ〜」

森の中をさまよい、ティナはジルにどうやって復讐するか考えていた。

「もう、絶対許さないんだから。許してって言っても許してやらないんだから。でも、一体どうして、仕返ししようか……」

「私に妙案があります」

目の前に一匹のウサギが飛び出してくる。

「メ、メルフォキア?!」

「本来私が手をお貸しするべきではないかもしれませんが、私の丹精込めて作った人参畑が、何やら違う野菜が植えられて、見るも無残な様になってしまっている。許せません。ここはジルキンハイドラ様に少々痛い目にあって、反省していただかなくてはなりません」

「そ、そうなの。でも、具体的にどうやって?」

「では、こちらへ」

ティナは、メルフォキアの後についてやってくると、そこはジルの家の前だった。

「先程、ジルルキンハイドラ様の家の前に、落とし穴を掘りました。ジルルキンハイドラ様が出てきたら最後、落ちたそこには人参の山が! それから数日放っておけば、野菜嫌いも治って、一石二鳥」

「お、恐ろしい……でも、なんだか既視感が。気のせいかしら?」

「では、ジルルキンハイドラ様を呼んで、落とし穴に誘い込んでください」

「ええ、分かったわ。任せなさい」

それから自信満々にティナはジルの家に向かった。

そして、落とし穴に落ちた。

「いやああああああ!!」

その絶叫に誘われて、ジルとトットルツチェが家から飛び出してくる。

「何、何? どうしたのー」

「何、またやったの、ティナ」

「今です!!」

メルフォキアが叫ぶと、穴は広がり、ジルとトットルツチエも落とし穴の中へと吸い込まれてしまった。

「はわわわわわ」

メルフォキアは懐から人参を取り出すと、ガリリとかじった。

「人参の敵は、世界の敵です」

そして、メルフォキアは遠くの空を眺めていた。

一方、落とし穴の中では、ティナの泣き声が響いていた。

「ジル姉のせいで、これからずっと人参生活だ。何でこうなるのよ」

「私何にもしてないよ」

「あれ、何やら、ジル。余裕だね。こんな状況下じゃ、泣きだしてもおかしくないのに」

「ふっふっふ、トットルツチエ、私を誰だと思ってるの。深緑の魔女ジルルキンハイドラ様よ。こんなこともあるつかと・・・」

ジルが、落とし穴の壁を叩くと、人一人通れる横穴が現れた。

「すごいね」

「エッヘン」

「ジル姉ー、ごめん、ごめんね。今までしてきたこと全部水に流すから、全部許すから。だから、私のことも許してー」

ジルに泣きつくティナ。

その頭をなでながらジルたちは横穴を抜け、無事脱出したのだった。

「ジル、ここは？」

「私の秘蔵書物保管場所、ホントは地下じゃなくて、もっとしっかりとしたところがいいんだけど、湿気対策はしっかりしてるし、なかなかいいでしょ」

「そうだねー」

「トットルツチエ、全然興味ないでしょ」

「無いねー」

「す、すごい。この本なんか・・・あっ・・・」

「ティナ・・・なんか今、嫌な声が聞こえたんだけど?」

「いや、うっかり手が滑って、わざとじゃないんだよ、ジル姉。ね、許して」

「許すわけ無いじゃない!!!五体満足で帰れると思っつな!ぐちやぐちやの目茶苦茶にしてやる」

「こ、怖いよ。ジル姉。許してー」

その後、ティナは命からがら逃げ出し、ジルへの復讐の決意を新たにすのだった。

魔女ジルルキンハイドラへの復讐（後書き）

栖坂月先生

どうしてティナは魔女をやれているんだろう。

つくづくそんなことを思っていました。

それとも、姉が絡まないところでは凄く優秀な人なんじゃないか。
いや、そんな筈ありません。

あるいは、姉に対する執念だけで魔女をやっているんじゃないか。

これはあるかもしれませんが、あまりに間抜けです。

ティナ、ある意味恐ろしい子ですね（笑）

ハッスル爺

誰もが平和を願う。

しかし、真の平和はいつまでもやっては来ない。

二十一世紀が始まった今でも、世界は安寧を迎えていない。

この腐った世の中で、孤軍奮闘する者がいた。

彼は正義の使者、その名は、

「ハッスル爺見参！そこな童どもよ。外に行ったら体を動かさんか！外で携帯ゲームで遊ぶんじゃない」

「うるさい変態ジジイ！黙ってる。俺たちがどう遊ぼうと関係ないだろ」

「なぬ？！反抗的な態度。もしかこれは・・・ハッスルスコープ！」

ハッスル爺は、老眼鏡をかけた。

ハッスル爺は、老眼鏡をかけると、字が良く読めるようになるのだ。

「私は判断した。貴様、反抗期だな。覚悟しろ」

ハッスル爺は、螭螂拳とつろけんの構えをとり、子供を威嚇する。

「もう、うつとおしいな。しょうがないから遊んでやるよ」

子供の一人が立ち上がり、斜はすに構える。

無駄の無い構え、この子供は一体？

勝負は一合、一瞬で決まるはずであった。

しかし、ハッスル爺は敵わぬとみて、今度は蛇拳の構えをとる。

その変則的な動きに子供は驚き、手を出せないでいた。

「どうじゃ、伊達に年をとってはおらんぞ。さあ、かかって来い！」

「どうやら僕も本気を出さないといけないみたいだね」

子供が服を脱ぐと、そこには隆々とした筋肉があった。

「フンッ」

華麗にポーズングする子供。

「よっちゃん。キレてる。めっちゃめっちゃキレてるよ」

よっちゃんと呼ばれた子供は、不敵に笑う。

「この筋肉に勝てるかい？ハッスル爺」

「そんな見かけ倒し、この私が恐れるとでも？」

「そうかい、本当に見かけ倒しかどうか、試してみるがいい!!」
常人には見えないすさまじいやり取りの後、二人は背を向け合い、固まった。

「なかなかやるな、童」

「貴様もな、変態ジジイ」

どさりと崩れるハッスル爺。

「フンッ」

流麗にポーズングするよっちゃん。

「よっちゃん。キレまくってるよ!!」

ああ、正義はいずこに・・・

「ハッスル爺、ハッスル爺・・・」

「あ、あなたは？」

ハッスル爺の目の前には、きれいな女神がいた。

「ハッスル爺、あなたが力尽きるにはまだ早すぎます。さあ、お立ちなさい。あなたはあなたの地平線を目指して！」

「あなたは私の生き別れた妻！」
グサッ。

女神は、手にしていた金の斧で、ハッスル爺の頭をかち割った。

私が落としたのは、その斧ではありません。
もつと普通の斧です。

「何をボケているのです。さっさと生き返って、戦いなさい」

「ですが、このままではあの童にも勝てません。何かパワーアップを！」

「パワーアップ？」

「そうです。女神さまの乳をもめば、私はさらにパワーアップ・・・

「
グサツ。」

女神は、手にしていた銀の斧で、ハッスル爺の頭をかち割った。私が落としたのは、その斧でもありません。もつと普通の斧です。

「くだらないことばかり言っていると、アビスに落としますよ」

「はい」

「さっさと行く！」

「はい！」

女神は手にしていた斧をきらめかせると、ハッスル爺は一目散に駆けだした。

その斧です。

私が落としたのは！

「では正解者には、御褒美を」

わーい。

グサツ。

女神は私の頭をかち割った。

「あまりくだらないことばかりやっていると、頭かち割りますよ」
にこやかに微笑む女神さま。

あの、私、もうかち割られてますけど・・・

ハッスル爺が目覚めると、もう夕方であった。

あたりに人気など無い。

「あの童はいずこに？もういないのか？仕方がない、勝負はお預けか」

ハッスル爺は頭にささっていた金銀の斧を抜くと、夕日に向かって駆けて行った。

両手に斧を持ちかけ去る様を見て、道行く人は皆道を譲った。捕まるのは時間の問題だろう。

戦え！ハッスル爺。
負けるな！ハッスル爺。

ハッスル爺（後書き）

磯巻 宗春先生

会話のやりとりは面白かったです！ ただ、少々展開が急激すぎると、女神様登場がちょっと無理矢理だったかも、です。最後はハッスル爺が普通に童をぶっ飛ばしてもよかったですかなあ。すいません、ハッピーエンド主義者で。

まいまい@”先生

がんばれ！ハッスル爺！

本当は、強いんですよ。ハッスル爺。

……すぐ来るであろう次に戦う敵に、めげるな！ハッスル爺！

楽しく読ませていただきました。

これからもがんばってくださいね。

ある能力についての考察

その現象は、ある意味怪異的であり、常識外れの能力であった。もちろん人に言いふらすこともできなかつたし、話したところで信じやしないだろう。

もし信じられたとしたとしても、未は見世物小屋である。

だが、もしかしたら私の能力は、さほどすぐくもないので、見世物にもならないかもしれない。

私はその程度の能力、その程度の人間である。

しかし、もしもつと違う能力なら、そんな風に思わないかもしれない。

例えば、火や水を操る能力であつたり、時間を移動したりできるような能力であつたなら。

そんなアニメやSFなんかに出てくる能力なら、かつこよかつたのにと、何度思つたか。

しかし、何度願おうと私の能力が変わるわけでもない。

もちろん私の能力を紹介するには、いささか抵抗があるが、紹介しないわけにはいかないだろう。

私の能力は『脇に本を挟むと、一瞬で内容が分かる能力』である。

・・・実に使えない能力である。

この場合の『分かる』とは、理解できるではなく、読むことができるといった意味合いである。

よつて、問題集や百科事典を脇に挟んでも、その内容は理解できず、ただ眺めていたに等しい。

そして、読んだあとの疲労感は変わらないので、日に何冊も本が読めると言つた便利機能はついていない。

もちろんこの能力を何かに活かそうと考えたことはあつた。

例えば本屋で、立ち読みし放題とか。

だが、想像してみたい。

本屋で本を脇に挟んだ男が、いきなり笑いだしたり、泣きだしたりしだすのだ。

私はそこまでして本を立ち読みしたいとは思わない。もっとも立ち読みとか、そんなロマンの無い話をするべきではないかもしれない。

例えば、そう、機密文書を運ぶ途中、その内容をひそかに読むことができる。

その内容は会社全体を揺るがし、いずれ国家を左右する大事な内容。それを手にすることができるとだ。

実にロマンあふれる話であるが、しがない一般サラリーマンである私が、そんな重要な機密文書に触れる機会すらないことは明確である。

ただ、翻訳家という道はあった。

外国語の本であつても、その内容は日本語に訳されていた。

しかし、翻訳家というのは、ただ訳せばいいというものでもない。文章のセンスがいるのだ。

あいにく私はそんなものは持ち合わせてはいなかった。

自慢じゃないが、私は理系である。

小学生の頃、先生が、

「この時の主人公の気持ちは？」

という質問に、私は、

「私はその主人公とは別人なので、そんなものは分かるはずがない」と言い切ったひねくれた性格であつた。

我ながら、可愛げのない子供であつたと思う。

まあ、なんだかんだと考えるわけだが、結局のところ、使えないものは、使えないのである。

ピンポン。

インターホンが鳴り、私は玄関に向かった。

宅急便であろうか？

ガチャリと鍵をあけると、スーツを着た男がいた。

「どうも」

にこやかに挨拶するその男を一目見、ドアをすかさず閉める。

「痛っ、すみません。お忙しいとは思いますが、少々お話を聞いてはもらえませんか？」

憎々しいことに、男はドアの間に自分の足を挟み、抵抗した。

「セールスは間に合ってるんで。というか、さっさと足どけないと警察呼びますよ」

「いえ、セールスではありません。私、こういうものでして・・・」

男はドアの隙間から名刺を忍び込ませる。

名刺には、有限会社能力開発機構、営業、浅木と書かれてあった。

「有限会社能力開発機構？」

怪しさ爆発のネーミングの会社だ。

宗教？詐欺集団？どちらにしても関わりたくない類である。

「そうです。私どもの会社では、能力者をスカウトして、世のため人のために役立てようという会社なのです。かくいう私も能力者で、あなたをスカウトしてきたという訳でして・・・」

こいつは私が能力者だと知っている？

私は警戒しながらも、ドアを少しだけ開いた。

「能力者？あんた一体何言ってるんだ。頭おかしいのか？」

私はとりあえず自分が能力者であることを隠して、探りを入れた。

「ええ、そうです。私もあなたと同じ能力者です」

男は動揺した様子もなく、にこにここと笑っていた。

もしかしたら本当にこいつも能力者なのだろうか？

そう思うと、自然と興味がわいてきた。

「あんたの能力は？」

一応聞いてみる。

「はい、私の能力は『なんとなく能力者がいるところ分かる能力』です」

「なんとなくくっつてどういうことだ？」

「そうですね。本当になんとかくっつけて感じます。この辺りかなーっ
といった。ちゃんとした場所も分かりませんし、相手がどんな能力
かも分かりませんね。なので、こちらに来るまで何度も違うお宅を
訪問してしまいました」

これまた微妙な能力である。

「間違っ行って行った家でもこうやってスカウトするのか？」

「いえ、そこはピンポンダッシュで。私こう見えても小さい頃から
ピンポンダッシュは得意なんです」

いや、そこは自慢するところじゃないだろ。

「それで、早速本題なんですけど、さっきも言った通り、私はあな
たの能力が分からないんで教えて欲しいんです。その能力によって
は、いろいろ会社の方でサポートさせていただきまし、一見役に
立たない能力でもこちらのデータを照合してみ、役に立つ能力に
できるかもしれないです。どうですか？」

私の能力が何かの役に立つように思えないが、もし役に立つのなら
興味がある話ではある。

「・・・私の能力は『脇に本を挟むと、一瞬でその内容が分かる能
力』だ」

「これまた微妙な能力ですね」

お前が言うなお前が。

お前の能力もたいして変わらんだろうが。

それから男は携帯を取り出し、会社に連絡を入れていた。

私の能力を報告し、役に立つか聞いているのだ。

結果は見えていた。

「なんかできるだけすぐに来て欲しいらしいですよ。なんかすごく
役に立つらしいです、その能力。会社の電話番号とか連絡先は名刺
に書いてあるんで、もしよかったら会社の方に来てみてください。
それでは」

男はまるで嵐のように現れ、そして嵐のように去っていった。

私はただ茫然と取り残されていた。

私の能力が役に立つ？

そんな馬鹿な。

私は名刺を見つめる。

有限会社能力開発機構。

行ってみる価値があるのだろうか？

私には分からなかった。

結局、私はその場所に来ていた。

有限会社能力開発機構の事務所である。

出迎えてくれたのは初老の男性と学生のような男女二人である。

「ようこそ。君を待っていたよ」

初老の男性は握手を求め、私はそれに答えた。

「そもそもこの会社というのは・・・」

それから初老の男性はこの会社の成り立ちを話し始めようとした時、男の子の方が初老の男性の袖を引いた。

「社長、話の前にとりあえず僕たち試してみたいんだけど？」

「おお、そうか。そっちが先の方がいいか。君たちにはずいぶん待たせたからな。待ちきれんじやろな」

何の話か要領を得ない私は、とりあえず説明を要求した。

「実はこの子たちも能力者でな。この男の子、名前はすまないが伏せさせてもらうが、この子は未来や過去を見ることが出来る能力者でな」

おお、すごい、これぞ私が望んだ能力である。

私もこの子と同じようなすごい能力がつくかもしれないと思うと、わくわくした。

「しかし、見ることでできるのは一瞬で、その内容もすぐに忘れてしまっんじゃ」

「僕には何かを見たって感覚が残るだけ」

あれ？なんかその能力、全然使えないよね。

「そこで彼女の出番なんじゃが、彼女は他人の思い浮かべたことを文章にすることが出来る」

「でも、私の書いたのは・・・」

女の子が私に差し出したノートには、良く分からない文字が並んでいた。

ヒエログリフや甲骨文字にも見えなくもないが、違う気もする。

「これは何語？」

「私にも分からないんです」

これまた全然使えない能力ではあるが・・・

「そこで、君の出番じゃ。これを君が読むことさえできれば、未来も過去も全て分かかってしまう。すごいことだと思わないかね？」

・・・確かにすごい。

私は自然とノートを持つ手が震えていた。

「そうですね・・・では、試してみましよう。うまくいくか分かりませんが・・・」

皆が固唾をのんで見つめる中、私は脇にそのノートを挟んだ。

「どっつ？」

「どっつかない？」

「どっつじゃ？」

「・・・すみません。私の能力は日本語しか読めなかったようです。今まで洋書は試したことが無かったものですから。すみません、お

役に立てなくて」

私は嘘をついた。

がっくりとする三人。

「今度はどんな文字でも日本語にできる能力者が、出てくるのを待つしかないのお」

「気の遠くなる話だね」

それからいろいろ能力者同士のあるある話で盛り上がり、その場を後にした。

楽しいひと時であった。

そして、私は今までと変わらず、サラリーマンをしている。

例えくだらない能力を持つ、超能力者であっても、一般人となんら変わりないのである。

そう、例え人類の過去と未来を全て知っているとしても・・・

ある能力についての考察（後書き）

水守中也先生

微妙な能力から話のつなげ方はさすがですね。
超能力といっても、そのいまいちな感じから妙に親近感が湧いて、
先が気になり、一気に読んでしまいました。
とても面白かったです。

午雲先生

山羊の宮先生、これは面白いですね！知らん顔して隠れ住む異能力者……しかし、こう起承転ずるとはっ！？そして結末もいかにも先生流です（納得）。ただし、彼が見出されるシーンが少し安易かな？？これでもいいんですけど、あそこはひとつの見せ場だし、少し文章に波をもたせてもよかったですか？でも、ちょっとパクリたいくらいに面白かったです。感想、以上です。

ヴェルディカの灰羽 (残)

「おなか減ったなあ」

ヴェルディカは道端でうずくまり、通り過ぎる人々を見ていた。

ここ何日も食事をしていないせいで、ヴェルディカの羽根は灰色がかったている。

もとは純白であったが、このままでは黒くなって、墮天してしまうかもしれない。

何か食べなくては、そうヴェルディカは思うのだが、どうにも食事するのに気が引けるのだ。

「おなか減ってるの？」

ヴェルディカに少女が声をかけてきた。

「これいる？」

少女の手には真っ赤なりんごが握られている。

ヴェルディカのことを乞食だと思ったのだろうか。

確かに、そう見えても不思議ではない風体ではあるが。

少女は屈託のない笑顔を見せてはいたが、一向に受け取らないヴェルディカを見て、不安そうにする。

「もしかしておなか減って無い？」

実際ヴェルディカは飢えていたし、目の前に食料があるのだが、手を出せずにいた。

ああ、この純真な魂に牙を立てたなら、どんな甘美な味がするだろうと思う。

それでも手を出すことにためらっていたヴェルディカであったが、飢えは自身が思っていたよりもひどく、自然とヴェルディカの手は動いていた。

そして、ヴェルディカはりんごをつかんだ。

「じゃあね」

手を振る少女をヴェルディカのことが見えない人間たちにはどう映

ったのだろうか。

少女が去り、見えなくなると、ヴェルディカはリンゴを見つめた。ヴェルディカは自製の効いた自分に安堵し、そしてリンゴをひとかじりした。

リンゴはヴェルディカの空腹を満たすことは無い。

ただ口寂しさを慰めるだけである。

「おなか減ったなあ」

ヴェルディカはリンゴの芯を放り投げ、一人ごちた。

『何でそんなに人間の魂を喰らうことに、抵抗を感じるんだ？あいつらは家畜だ。何のために時々あいつらに手を貸していると思ってる。あいつらの味を良くするためだけだろ。そんな常識に今更疑問を抱いてどうする？飢えて死にたいのか、お前は？』

ヴェルディカは友人の言葉を思い出しながら、当ても無くさまよっていた。

ヴェルディカは、多分人間を自分たちと重ねているのだと友人に答えた。

必死に生き、泣き、笑い、幸せを求める様に共感しているのだと。人間は私たちに食われるために必死に生きている訳では無いだろうと。

『人間の家畜は草を食む時、人間に食われることを思うのか？そうではないだろう。生きるために草を食む。子を増やし、子孫を残そうと必死に生きている。それとどこが違う。人間は飼われていることを知らないだけだ』

友人の言葉がヴェルディカの心に重く響いた。

確かに牛や豚は、屠殺とくされるまで自分が飼われていたなんて思いもしないかもしれない。

人間だって、その魂を引きずりだされるまで飼われていたなんて思いもしないかもしれない。

そうは思うのだが、ヴェルディカは人間の魂を喰らう事に抵抗を感じてしまうのだ。

ヴェルディカがリンゴを食べて空腹を満たされれば、問題無いのだが、いかにせん人間の魂でしかヴェルディカの空腹は満たされないのである。

結論の出ない思考の堂々巡りは、満月の闇夜に溶け込むのだった。

「許してください！お願いです！許して・・・」

「許してもねえだろうが。いいからさつさと金出せよ。払うもんはちゃんと払えつて言ってるだけだろうが！」

狭い路地裏で若い男が中年の男を殴ったり、蹴ったりしていた。

何でそんな風に殴るのか、痛いだろうにとヴェルディカはぼんやりと眺めていた。

空腹は最高潮で、ふらふらとした足取りで、目もうつろであった。

「てめえ、何見てんだ。見せもんじゃねえぞ」

若い男がヴェルディカに気づいた。

ずんずんと若い男はヴェルディカに近づき、睨めつける。

いつかの少女に比べたら、その魂はまずそうだった。

しかし、こんな屑くずの様な人間なら食べてもいいかもしれないと、ヴェルディカは思った。

もちろんそれはヴェルディカの判断であり、実際は誰かにとってその若い男は唯一無二の男かもしれないなかった。

「ああん？なんか文句あるの？お前・・・」

ヴェルディカは若い男の腹に腕を伸ばした。

そして、その魂を引きずりだした。

崩れ落ちる若い男、手にした魂は明らかにまずそうだったが、背に腹はかえられない。

ヴェルディカはシャリシャリと音を立てて、味わった。

その魂は思ったよりもまずく、吐きそうになるが、せっかく口にし

た食料を吐き出すまいと、口を押さえ、腹に押し流した。

そして、久方ぶりに満腹感を味わっていた。

だが、腹の中でうごめくようなむかむかがあった。

まるで食中毒にでもあったかのように。

気分が悪い、ヴェルディカはそう思った。

その上まだ腹の中の魂に意思があるように、ヴェルディカをいらいらとさせ、破壊衝動がむくむくと沸きあがるのだ。

やがてヴェルディカはいらいらを周りにぶつけ始めた。

手近なものを蹴り飛ばし、壁に拳を叩きつけた。

そして、ヴェルディカは、見つける、おびえた表情でヴェルディカを見つめる中年の男を。

ヴェルディカは舌なめずりをして、それを壊した。

哄笑するヴェルディカ。

その翼は真っ黒く染まっていた。

もはやヴェルディカは人間を喰らうことに、何ら躊躇ちゅうちゆすることは無くなっていた。

今日もよりうまい魂を探し求め、空を駆け巡るのだ。

「食いものは腐るほどある。さて、どれから頂ごうごうか」

その漆黒の翼をはためかせて。

ヴェルディカの灰羽 (残) (後書き)

栖坂月先生

無視のできない作品が続きました。

この作品と『ある能力に』の二つは、どちらも素晴らしいと思います。それぞれに趣は違いますが、スッキリとした文体で、興味深く怪しげな物語で、思考する余地の残しながら明確な答えを示していると感じられました。読み応えのある作品、まずはありがとうございました。

特にこの作品、こういう話で私が釘付けになるのは、珍しいと思っています。矛盾を上手に描いた作品ではあると思うのですが、この全体に漂う虚しさ、悲しさは、なかなかすんなりと出てくるようなものではないように思っています。

純粋な魂を考え無しに食べる白い翼の者と、望まぬ魂を食して黒く染まった者、どちらがより正しい存在なのか いや、そもそも正しいなどという価値観こそ正しいのか、そんな堂々巡りをさせられてしまいました。

それにしても先生、最近特にコメディの切れが増しているように感じられます。大変結構なことなのですが、使いすぎると私のように羽が黒くなってしまうので、お気をつけを(笑)

また来ます。それでは

午雲先生

山羊ノ宮先生、ヴェルディカの灰羽、作品読ませて頂きました。異界の存在が有つ禍々しさ、その雰囲気がよく出て居ると思います。ヒトの生き霊？生の魂を喰らう天使……そう、妖精とか天使といえは善の化身として描かれる例がふつうだけど、異界の存在

とは本来、まがまがしきもの、との認識が存りしもの、とも予感され
れます。生き肉を喰らう鷹と死肉を喰らう鴉と、どちらが残酷か？
そんな命題すら感じ取れます。あの魔女もののようにこの天使もこ
れから活躍を始めるのでしょうか？主役のキャラが際立ち、その分
脇のキャラや筋立てが印象薄くなってしまう、バランス的にどうか
？とも想われましたので、あえて星四つとしておきます。しかし、
なかなか刺激的でありました。感想、以上です。

情報屋 KASASAGI

「お前、KASASAGIさんところ行ったこと無いんだって？」

「ああ、無いよ」

「一度もか？」

「一度も無いな」

「じゃあ、連れてってやるよ」

そんな会話を同僚としたのが今朝のことだ。

大きなお世話だと思いながら、同僚の強引な誘いを断りきれず、その夜KASASAGIさんのところへ行くことになった。

「あのさ、基本的なこと聞くけど、KASASAGIさんってどんな人なの？」

「どんな人って言われてもなあ。そもそもKASASAGIさんっていうのはコードネームみたいなもので、実際にはいろいろいるんだよ。メイド喫茶のメイドだったり、執事喫茶の執事だったり」

「なんかすげー、嫌な予感がするんだけど・・・」

「ここだけ」

そこは一見すると居酒屋の風である。

「邪魔するよ」

同僚は何の気兼ねも無く、その店の暖簾のれんをくぐった。

俺は仕方なく同僚の後を追い、暖簾をくぐった。

「いらつしゃい！」

威勢のいい声が店の中を響いた。

そこには板前風の若い兄ちゃんが、カウンター越しに構えていた。

「おい、あれがKASASAGIさんなのか？ただの板前じゃないのか？」

「まあ、そう見えるだろうな。一応違法行為だから、分からないようにするのは当たり前だろ」

「そうだけだよ」

なんとなく納得がいかない。

「それよりもあれ持ってきたのか？」

「ああ、国民IDだろ。けど、こんなもんどうすんだよ」

「その食券機があるだろ。そこに入れんだよ」

「は？」

「まあ、いいからやってみるよ」

普段ならお札を入れるはずのところに、めったに使わない国民IDを入れた。

前に使ったのは、引越して役所に届け出に行った時だから、随分と経つ。

ガガツと音を立てて、食券機は国民IDとレシートのようなものを吐き出した。

そして、食券機の上にある電光掲示板に1と表示された。

「あとはその整理券とデータを交換するだけだ」

同僚は一通りの説明を終え、手慣れた様子で俺と同じことをする。すると、電光掲示板には2と表示された。

「じゃあ、これ頼むよ」

「毎度ありがとうございます」

「いつもここに來ているのか？」

「ああ、ここは仕事が早いからな」

「いえいえ、私はまだまだ半人前で。お客さまに満足していただけるデータを提供できているか、不安で仕様がないですよ」

「そうか、まだ半人前だったのか。早く一人前になれると良いな」

「はい。精進いたします」

俺たちは板前姿のKASASAGIさんに整理券を渡し、かわりにデータを受け取った。

そして、そのデータを見て俺は驚いた。

「なんか必死に頑張ったつもりでいたけど、全然成果出てないな」

「まあ、そうだろうな。俺のも見てみるよ」

「何これ？全然数字違っじゃん。何で？」

「そこはコツつてもんがあんだよ。教えて欲しいか？教えて欲しい
だろ？」

「・・・なんだよ。結局お前そのコツ教えたくって、仕様がなかつ
ただけだろ？」

「ばれてしまったか」

「まあ、いいや。それでそのコツつてのは？」

「それはだな・・・」

俺たちは店を後にし、その数字を酒の肴にして楽しんだ。
久しぶりにうまい酒だった。

なんたつてやりがいが出てきたのだ。

この国が成果主義を悪と決め、徹底的に平等を求めた結果、我々は
ゆるいノルマが与えられるだけで、自分のした仕事の結果は分かり
もしなくなってしまったのだ。

唯一分かるとすれば、K A S A S A G Iさんのところだけだろう。

今夜もK A S A S A G Iさんのところで得たデータを見て、ある人
はほそく笑み、ある人は悩んでいることだろう。

情報屋 KASASAGI (後書き)

紗英場 渉先生

こんばんは。はじめまして紗英場渉と申します。この「小説家になるう」にて執筆させていただいています。

さて、このお話ですが、元ネタがなかなか面白いので、更に印象的にするためにも、もう少し先まで描いて欲しかったですね。(あくまでも僕の個人的な意見です)僕的には「えっ……ここで終わり!？」と言う感じでした。最初は何だかよくわからなくて、物語の社会背景がわかったところで成る程!となったのは良いのですが、この作品が伝えたいことがいまいち伝わって来ない感じがいたしました。

凄くいい題材なのにもったいない!と言うことで、期待感を込めて物語、文章 3つとさせていただきました。(もちろん、自分のことは棚上げです!)

ではまたお会いできたら光栄です。お互い頑張りましょう!

そこら辺にある話

ある日、田舎に宇宙船が落ちてきた。

当然大騒ぎになって、いろんな人が宇宙船の周りに集まってきた。

みんなが注目する中、宇宙船の扉が開かれた。

中から宇宙人が出てきて、みんな驚いた。

「僕が行こう」

みんなの中で、一番偉いおじいさんが宇宙人のもとへ行った。

おじいさんは、鉛筆を宇宙人に向けてこう言った。

「でいす、いず、あ、ぺん」

宇宙人が驚いてこう言った。

「ざつつ、あ、ぺん」

そして、二人は握手した。

人々にどよめきが起こった。

「なんか通じてるぞ」

「何で鉛筆なんだ？」

「筆談でもするつもりだったんじゃないのか？」

「いや、あの爺さんボケてんだ」

「何でそんな奴に行かせるんだよ」

「その方が面白いだろ」

「そういう問題じゃないだろ」

などといういろい話している。

「ないす、とう、みー、とう」

宇宙人が言った。

おじいさんはうなずき、親指を立てて、突きだした。

そして、近くにいた者にこそこそと話すと、何かを用意させた。

「らいす、とう、みーと、とう、つー」

おじいさんは、ご飯のつがれた茶碗を二つ、肉の盛られた皿を二つ、宇宙人に渡した。

宇宙人は驚いた様子で、それらを受け取ると、宇宙船の中に消えていった。

人々にまたどよめきが起こる。

「何で飯渡したんだ？」

「聞き違えたんだろ」

「違うって、あの爺さん昼飯食ったの忘れてるから、また催促したんだって」

「ばあさん、飯はまだかのーってか」

「だから、何でそんな奴に行かしたんだって！」

「面白いからだろ」

「何で……」

などという話している。

宇宙人がまた宇宙船から出てくる。

「あいむ、みず、うおるたー」

そう言う宇宙人に、またおじいさんはうなずき、親指を立てて、突きだした。

そして、また近くにいた者にこそそと話すと、何かを用意させた。

「水、うおーたー」

ペットボトルに入った水を宇宙人に渡すと、宇宙人は小躍りして、宇宙船の中に消えていった。

そして、宇宙船は轟音を立てて、宇宙へ旅立っていった。

「一体なんだったんだ？あの宇宙人？」

「それよりも誰だあの爺さんを俺たちのトップにおいたのは？」

「別にいいじゃん。気にすんなよ。楽しかったんだから」

「いや、普通気になるだろ」

「宇宙人がか？それともあの爺さんか？」

「それは……」

などという話しながら、みんな宇宙船の飛びたつた空を見上げていた。

『いや、こんな辺境の惑星の墜落した時にはどうなるものかと思
いましたけど。なんとかなるもんですね』

『要は心なんだよ。誠心誠意尽くせば、きっと相手も分かってくれ
るってことだよ』

『そうですね。ちゃんと食料と燃料の補給出来ましたもんね』
宇宙船の中を宇宙人たちの笑い声が響いた。

そこら辺にある話（後書き）

かかし先生

こんなのが小説だなんて、信じられない。つまらない。

北極へ

「北極へ行きたい」

リビングへ飛び込んできた妻の第一声はこうだった。

「えっ？」

「とありきたりだが、当然の反応をする。」

「北極へ行きたい」

「何で？」

「暑いじゃん」

「暑いね」

「だから、北極行きたい」

「何でそうなるかな」

ため息混じりに2週間前に買った車の雑誌に突っ伏した。

「行きたくないの？北極よ。オーロラに白熊、ペンギンに、氷がいっぱいあるのに」

「ペンギンは南極だろ。それに氷なら冷蔵庫にあるだろ。それで我慢しようよ」

「やだー。行きたい、行きたい。北極ー」

妻はソファーに寝転がっている俺にのっかかってきた。

そして、グリグリと肘で俺の後頭部を痛めつける。

「分かった。行くから。行くから、やめてくれ。頼むから」

「え？ホント？さっすが私の旦那様。物分かりいいー」

俺は呆れ顔の俺の頭をよしよししている妻の顔を見つめる。

妻のいいところは好奇心が強く何にでも興味を持つことだ。

結婚したのも彼女の好奇心の強さによるところが大きいので、それについてあまり悪いとは思わないのだが、ここまで来るとさすがに少しきつい。

去年の冬にはアフリカのサハラ砂漠に行った。

砂漠の暑さは尋常ではなかったが、それよりも苦になったのは夜

である。

夜になると急激に冷える。

暑さ対策だけは万全にしてきたのだが、防寒具の一つも無いので砂漠のまん中で危うく凍死しかけた。

それにも懲りずに妻は北極に行きたいと言っているのだ。

呆れを通り越して、尊敬の念すらも抱いてしまう。

「でも、休みが取れたらだからな。冬に二週間も休暇を取ったんだから、難しいと思うけど…」

「大丈夫。お父さんが許してくれない訳ないじゃない」

妻は自信たっぷりにウインクして見せる。

アバタもえくぼとはよく言うが、人が見れば何とも言えない妻のチャーミングな仕草は、俺の胸の奥をくすぐるのだった。

「まあ、一応言わないと分からないだろ」

「大丈夫、大丈夫」

妻は俺を解放して、手をヒラヒラと振って自室へと戻って行った。恐らく今から準備し始めるつもりなのだろう。

気の早いことだ。

こっちは上司に北極行きのことを言わなくちゃいけないと思うと、気が重いうちに。

翌朝、課長であり、義父でもある田中勝也氏に休暇の申請をしていた。

課長は黙って休暇申請書類を眺めている。

当然だと思う。

そうそう部下の休暇を許していたら、仕事になどならない。

「……ついに北極へ行くのか」

「そうですね。この次は宇宙にでも行きたいと言いますので、正直困ってます。旅行というよりは既に冒険に近いですからね。妻は専業主婦兼冒険家と言ったところでしょうか」

「迷惑・・・かけるね」

課長は俺の顔をまじまじと見つめ、目を細めている。
少し言い過ぎただろうか。

「でも、私も何だかんだ言いながらも楽しんでいるので、何ともいえないのですが。本当は」

「そうか、そう言ってもらえると私も嬉しいよ・・・娘を頼む」

課長はそう言って、書類に判を押す。

意外なほどあっけなく休暇が取れた。

同僚から白い目で見られるのだろうなと皆を見回すと、一様に哀れみの目を向けている。

今までくぐった死線の数を考えると、この反応も仕方ないのだな、一人苦笑してしまう。

「そうか。北極へ。次で終わらせるつもりなのだな」

課長は窓に向かって独り言を言っている。

その姿を見ていると他人事のように、少し哀れんでしまう。

「ね、ペンギンいたでしょ」

明るい妻の声が無線機から聞こえる。

「でも、あれは・・・ちよっとねえ」

スノーモービルで先導する自称現地ガイドのほうを見る。

彼は着ぐるみを着ていた。

妻曰く、これが現地の正装なのだと言っているということだった。

そんな子供でも信じないようなうそを言って放つ、怪しさ満点のガイドに連れられて、俺達は北極点を目指した。

「この先にオゾンホールを観測所があって、そこで一泊してから北極点に向かうそうよ」

妻が自称ガイドの言葉を通訳して伝えてくれる。

妻は伝えるだけ伝えると、落ち着き無く辺りのをキョロキョロと眺めている。

一面真白の幻想的な世界。

妻にとつては珍しくて仕様がないのだろ。

さつきからずつとこの調子である。

俺はというと、寒さにあえいでそれどこではなかった。

息苦しい、呼吸するのがこんなに痛いなんて思わなかった。

普段体験できないことを体験する、それが旅の醍醐味だとは誰が言ったのだろうか。

出来ればこんな体験はする必要は無い、とってしまったのは毎度のことである。

「見えたわ。あれよ」

舞い上がる雪煙の先に見えた小さな建物を見つけて、ようやく景色を楽しむことが出来た。

圧倒的な白。

冷酷で、何物も寄せ付けけないような潔癖さを持つ。

その無慈悲さに比例して、美しい。

施設の中は風が凌げるといっただけで外とあまり寒さは変わらない。

「こつちに来てって」

ここに来てようやく妻も不審に思ったのか、怪訝そうな顔をしている。

どこからどう見ても怪しいペンギンガイドは奥の部屋で床を引っ

剥がし、その先にある階段を指さしていた。

「地下室に行くように言っているわ」

この先蛇が出るか蛇が出るか、どっちにしたってもう戻ることは出来ない。

「やあ、よく来たね。ミス・スコープオン。こんなへんぴなところだが、ゆっくりして行ってくれ。おや、そちらはミス・スコープオンのパートナーかな？初めまして、私はクライバトル・エルシユタ

ツトです。どうぞ宜しく」

現れたのはガタイの大きな黒人の男性だった。

彼の着ているペンギンスーツのおかげで、妙に愛嬌のある印象を受ける。

彼は地下施設の案内を流暢な日本語でしてくれた。

客室は意外と狭く、それでもくつろげるだけの空間はあった。

妻によると外の状況が悪くならない限り、ここで一泊して明日にはここを出る予定らしい。

その夜、のどの渴きを覚え、ふらふらと彷徨っていた。

廊下を歩いていると、階段の上から聞き覚えがある声があった。

昼間の黒人の声、そしてもう一つは妻の声だった。

「ホント寿命が縮むかと思っただわよ。いつもあの服着てうるついでいる訳？今までよく沈まなかったものね。あれじゃ見つけてくださいって言うてるようなものじゃない。ここは相手のテリトリーの中だっということをわかってるの？」

「すまない」

妻のきつい叱責に、クライバトル氏はうな垂れている。

大柄である彼が子猫のように見えてしまう。

「今までどうしていたの？まさかあれで一度も襲撃されていないなんてことはないでしょ？」

「定期的に移動しているので襲撃はなかった。わざと目立つようにして、敵に悟られる前に移動している。いわば攪乱作戦の一つだとそう思ってくれ」

「今までに一度もない？あれで？・・・」

いったい何の話をしているのだろうと疑問を持って、階段を上がるうとした時、けたたましいサイレンと共に、インド系の男性が慌てた様子で、駆け上がってきた。

「白熊が五機、こちらに接近してきます！ー！」

「何!？」

「やはり泳がされていたようね。私がおこに来るのを待ってたつて
どこかしら」

「迎撃用意!取り付かせるな!」

クライバトルは部下に檄を飛ばす。

「旦那を使つてまでカモフラージュしてきたつていうに、これなら
連れてくるんじゃないわ。なんて申し訳すればいいの。やつぱ
り、北極は焦りすぎた?・・・いや、南米を押さえたところで、ま
た奪い奪われの繰り返し。ここで本当に終わらせなければ意味はな
い」

「白熊三機撃破。残り二機、ペントロスに侵入しました!!」

「クライバトル、この船に搭載されているペンギンは何機?」

「先程白熊が侵入したのは格納庫だ。今動くペンギンが何機あるの
かわからない。運が悪ければ、全滅している可能性だつてある」

「何てことなの!」

妻は悪態をつく。

「船首に離脱用のが予備で一機あるが・・・」

「それで私の旦那を逃がして!私は格納庫を押さえて、ペンギンに
乗つて、敵の本拠地を叩くわ。あんた達はできるだけ派手にやつて、
囹になつてちょうだい」

「そ、そんな囹なんて・・・」

「今までずつとやつてきたんでしょ。囹は十八番のはずよ」

妻はおどおどする船員に冷たく言い放つ。

クライバトル艦長はゆつくりとその重い口を開く。

「ミス・スコープイオンの言う通りだ。これは我々が招いたミスだ。
我々が何とかするのが筋だろう。まず艦内に侵入した白熊を掃討後、
ペントロス浮上、敵本拠地に向けて一斉射、敵を引き付けるだけ引
き付けてから潜行。敵を攪乱しつつ、ミス・スコープイオンの敵本拠
地撃破を待つ」

クライバトルが目配せすると、さっきの臆病風はどこへやら、そ

の場にいた船員は敬礼一つして、持ち場へと速やかに移動するのだった。

「御武運をお祈りしています。ミス・スコピオン」

「お互いに、でしょ。まずは旦那を捜してくるわ。とりあえずはそれからよ」

クライバトルの敬礼に対し、手をヒラヒラと振って答える妻。

階段で妻たちの会話を立ち聞きしながら、ずっと考えていた。話を要約するとだな。

つまり、妻は主婦にして、実はアマゾネスで、今までの過酷な旅行は、実は戦場へ遠征していた、ということ。

そして、この北極には敵の本拠地があつて、そこに攻め込もうとしたら、逆に攻め込まれてピンチになっている。

それから、今から俺は安全なところへ避難させられて、妻は敵の本拠地へと攻め込む、ということ。

悪い夢なら覚めて欲しい。

しかし、けたたましく鳴る警報音と鉄製の階段から伝わる冷たさに、これは現実だと思い知らされる。

「やあ」

驚きすくむ妻に対して気の抜けた挨拶をする。

笑おうとはするが、引きつって笑顔を作れない。

「さっきの話聞いていたの？」

「んー、まあ大体はね」

「なら話が早いわ」

妻は俺の腕をつかみ、速足で駆け出す。

俺を避難させるために船首へと向かうのだろう。

「どこへ行くんだ？」

「この先にペンギン、小型の潜水艇があるの。とりあえずそれであなをここから逃がすわ」

「一緒には・・・逃げないんだよな。やっぱり」

妻の足がぴたりと止まる。

「ええ・・・私にはやらなきゃならないことがあるから」

妻の困惑した表情は、やがて戦士の顔付きへと変わる。

「・・・サハラを横断し・・・樹海をさまよい・・・エベレストにも登った」

「????」

「そして最後には銃弾の雨の中をくぐるか・・・悪くない」

「えっ!？」

「さあ、急ぐんだろ。死線なんてもう何度もくぐったんだ。今更気にすることはないさ」

俺は妻を抱き抱え、走り出した。

「今度は本当に危ないのよ!本当に。死ぬかもしれないのよ」

「それならなおさら一人で行かせられない。死ぬときは一緒だろ」

「・・・馬鹿」

俺達は自分たちの部屋により、荷物をとり、船首へと向かった。

「それにしてもミス・スコープイオンは無いよなあ。丸つきり俺のと無視してるみたいで、嫌な感じだ」

目の前で轟音が鳴り響く。

3メートル程の白熊型アンドロイド、通称白熊が倒れる。

「それはしょうがないわ。だって本当に私は独身だっていうことになってたんだもの。だからこそ夫婦でいること自体が、カモフラージュになってたんだから」

妻は両手に持った小さなリボルバー式の拳銃を小気味よく撃ち鳴らす。

「今度はそこに!」

彼女がそう言うと、俺は彼女の拳銃に弾を込めるのを止め、床に転がる毒々しい薬莢につまづかないように、壁に爆弾をセットした。

「あと、もう少しだから頑張っつて」

そう言っつて、妻はリボルバーから空薬莖を抜き落とし、俺に投げつてよこす。

それと同時に新しく弾を装填した真つ赤な拳銃を彼女に投げると、後ろ手に受け取る。

白熊の巨体で道が塞がらぬよう、引き付けながら撃ち倒す。

リズムカルな発砲音は、まるで楽器をかき鳴らすように響く。

「行くわよ」

白熊たちの隙間を抜け、走り出す。

「もう少し、あともう少し」

妻は自分に言い聞かすようにつぶやく。

俺は妻の作り出した血路を、息を切らせてやっとのことで追いついている。

そして、薄暗い通路を抜け、明るい光溢れる場所へ出た。

そこは大きなドーム状の広場だった。

「ここが・・・目的地？」

荒い息を整えながら、妻へ質問する。

妻はこちらを向かず、一点だけを見つめていた。

「そう、ここが目的地・・・北極点よ」

「・・・何も無いな」

俺は率直な意見を口にする。

妻も同意したように頷く。

「敵の本拠地の中心だから、もっとすごい歓迎を受けると思っつていたけれど。正直拍子抜けだわ」

二人は中心に向かい歩き出す。

「それはだね」

正面の通路から声がした。

妻はとっさに構える。

暗い通路からゆっくりとした足取りで、声の主が現れる。

「それはここが我々にとつて聖地だからだよ。主にここは祭事に使われる。お前達が望むような組織の施設はここより放射状に広がっているんだ。しかし、それもお前達がここに来るときにほとんど破壊してしまつて、もう役には立たないだろうがね」

妻は引き金を引くことができなかつた。

その男が二人の目の前に来るまで、俺たちは蛇に睨まれた蛙のようにならなかつた。

「課長……」

ようやく俺の口は動いた。

かすれた小さな声が静かなドームに響いた。

「お父さん」

妻のワントンポ遅れた声には、明らかに困惑の色が見えた。

「初めはね、こんなことになるなんて私は想像もしていなかつたよ。自分の娘がスパイ先の戦士となり、次々と戦果を上げていく。私が何度手を引くように言つても、聞き入れようとはしない。頑固なところは私によく似てしまつたようだ。だが、今更何を言つても遅い。お前達がここまで来た以上もう後には引けない。例え、実の親子だとしてもね。それは……分かつているね」

課長は懐から銃を取り出し、妻へ向けた。

「そんな！お父さん！一言言つてくれれば……」

「組織を抜けたというのかい？きつと抜けることはなかつたはずだ。なぜなら……」

課長の銃の照準がゆっくりと俺に向く。

「私と彼の命を天秤にかけなくてはならなくなるからだ」

課長の言っている言葉の意味が分からなかつた。

なぜ組織を抜けるのに、俺と課長の命をどちらか選ばなくちゃいけないんだ？

妻はその答えを知っているのだろうか、険しい顔付きで課長を睨みつけていた。

「私と一緒に来るか、それとも彼と一緒に組織に戻るか？」

妻の目から涙が落ちる。

それでも流れ落ちる涙を拭おうとはせず、両手に真っ赤な拳銃を構えたまま首を振った。

「私は……」

妻は涙声で訴える。

「私は彼と、お父さんと一緒に組織を抜ける。それで、今度は一緒に楽しい旅行に行こうって。ハワイとか、グアムとか、在り来たりだけど、すごく楽しい旅行に行こうって思っていたのに」

課長は眼鏡をくつと上げると、

「甘いな」

冷たく言い放った。

課長の指が動く。

照準は俺の方を向いたまま。

くぐもった銃声が響いた。

いつもパリツとしているYシャツが、血で染まっていく。

俺の耳元を通過した銃弾のせいで、耳鳴りがキーンと響いている。

そして、課長はゆっくりと倒れた。

「お父さん！！」

妻はお義父さんへ駆け寄る。

悲しいかな俺は腰が抜けて、すぐ駆けつけることができなかった。

妻は血溜まりの中に沈み込むお義父さんを抱き起こす。

「お父さん……」

「この奥……に……私の乗ってきた……ペンギンが……」

「もういい、しゃべらないで。さあ、一緒に戻りましょう。それで今度は楽しい旅行に」

「いや、私はこれでいいんだ……コホツ。正直ね……私は……怖かったのだよ。お前の言う通り……こうなる前に打ち明けていれば……違う結末が……あったのかもしれない。でもね、私は真実を知って……軽蔑されるんじゃないかって、怖かったんだよ。

・コホッ。お前を・・・仲間を裏切っている。そんな私に救いなんてないのに・・・ただ無性に怖かったんだ・・・だから今心安らかに逝ける。娘に看取られて死ねるなんて、結構私は・・・満足しているんだがね」

お義父さんは優しい笑みを浮かべて、静かに目を閉じた。

妻の目からはとめどなく涙がこぼれ落ちる。

俺は気の利いた一言も言えずに、ただ彼女を抱き締める。

弱々しく震える柔らかな体をきつく抱きしめる。

俺はここにいと存在を主張するかのようにな。

「行こうか・・・」

「ええ」

俺達は二人で支え合いながら立ち上がった。

そして出口へ。

「お互い無事で何より！」

ペントロス艦長クライバトルが、満面の笑みで俺達を迎えてくれた。

「一時はどうなることかと思っただけど、何とかなるものね。いろいろ無茶なお願いしたけど、緊急事態だったって事で許してちょうだいね」

「いえいえ、こちらこそご迷惑をおかけして。あれぐらいの無茶は大丈夫ですよ。ハッハッハッ」

クライバトルの豪快な笑いが、艦内を響いた。

「じゃあ、無茶なお願いについても一つお願いしてもいいかしら」
クライバトルの顔が固まり、笑いながら一時停止状態になる。

「私達今度バカンスにハワイがグアムあたりに行こうと思ってるの。エスコートお願いしていいかしら？」

「そ、そんな御用でしたらお安い御用です。どこへなりとも行きますとも。ハッハッハッ」

一抹の不安を抱えたまま、クライバトルの安堵の笑いが再生される。

そんなクライバトルの様子を妻と顔を見合わせて、微笑み合うのだった。

「今度こそ、楽しい旅行になりそうね」

「ああ！」

南極へ

そこはつい先程まで戦場だった。

今はつかの間の平和という静寂に包まれている。

人々の脳裏には耳鳴りのように銃声が響いているだろう。

ひそひそとしか話し声がしない。

そんな中、一人浮いた人間がいた。

今から会社にも出勤するのではないかと思うほど、しわひとつないスーツ姿の青年。

彼の名をイーグルという。

端正な顔にかかった少し大きめの銀縁眼鏡のずれるのを直しながら、彼は身支度をしていた。

イーグルが自分の荷物を背負い、出発しようとしていたその時、
「・・・」

自分を見つめる視線に気がつき立ち止まる。

視線の先には少女がいた。

戦渦に巻き込まれて、親とはぐれたのだろうか？

ズタボロの格好の少女はゆっくりと近づく。

イーグルは懐の拳銃に指をかけた。

「食べ物はない」

少女は何も言わず、イーグルの前で立ち止まり、彼を見つめていた。

しばらく見つめあった後、イーグルは少女に拳銃を向けた。

それを待っていたかのように、少女は静かに目をつむる。

ぱんつとひとつ銃声が鳴った。

周囲のものが反射的に自分の獲物を取り出し、イーグルに向けた。

少女の頬には一筋血が走っていた。

「来るか？」

少女はコクリと頷く。

イーグルは少女の名をラビとする。

某年、某月、某日、ラビは戦っていた。

敵は目の前の山盛りのサラダである。

ラビは時にマヨネーズを使い、時にドレッシングを使い、次々に敵を胃の中へ放り込む。

難敵セロリの筋を抜き、マヨネーズ付けにしてついにこの戦闘に終止符を打った。

そして、彼女は戦果であるイーグル特製のチョコレートをつツピングしたシュガートーストをほお張るのだった。

「ラビ、口を拭け」

イーグルは二枚目のイーグル特製トツピングチョコレートにシュガートーストをほお張りながら、ラビを注意する。

イーグルの口元も汚れてはいるのだが、そこは突っ込まずに素直にラビは頷く。

「食べ終わったら、下に行くぞ」

ラビは真剣な表情で頷く。

その顔はチョコレートで髭をつくっている。

そのアパートメントの地下二階、その施設はある。

そこでは絶え間ない銃声と硝煙の匂いが支配していた。

そこは射撃場。

次々と出てくる人型に向けてラビは発砲している。

教科書に載っているかのような背筋のピンと整ったきれいな姿勢でラビは的に向かっていく。

その後ろで二人の男が腕組みをして真剣なラビの姿を見守っている。

一人はイーグル、もう一人はベアという大柄な黒人である。

ベアは無表情でラビを見つめるイーグルとは違い、ラビが一発撃つごとにクルクルと表情を変える。

「なかなか筋がいい。これならもうじき使い物になりそうだね。ねえ、イーグル？」

「いや、まだまだだ。的を絞ってから撃つまでの時間が長い。撃つていて、疲れてくると姿勢がどんどん歪んでくる。これじゃまだ使い物になんかならないさ」

ベアはやれやれと首を振る。

「イーグルは一体ラビをどうしたいんだい？イーグルがラビを連れてきたときは、イーグルにこんな趣味があつたなんてって驚いたけれど。別にかこつて楽しんでるようにも見えなかつたから、何か作戦で彼女を囮や使い捨ての道具のように使うのかとも思ひもしたけど、そうでもない。彼女に銃の使い方まで教えて、もしかして彼女を僕たちの仲間にもするつもりなのかい？いや、そんなはずないか。今のラビの銃の腕前なら仲間内では上手いほうだ。十分に一人で暗殺でも出来るほどに」

イーグルは懐の銃を抜き、撃った。

ベアは背筋にスローで汗が流れていくのを感じながら、ため息をついた。

イーグルはラビのすぐ後ろにつき、ラビと同じ的を撃っていた。

ラビよりの早く正確に的に銃弾は吸い込まれていく。

「やれやれ、もっとクールになれよ。イーグル。野兔一匹に何そこまで熱くなってるんだい。僕の愛しのイーグルはもつと孤高で気高かつこいいぜ。まったく、本当に何がしたいんだい？イーグル」

ベアは射撃場に二人を残し、去って行く。

二つの銃声はやがて一つになり、ラビはただイーグルの射撃の根本に見とれていた。

（俺はクールさ、ベア。いつでも。俺は師匠と同じことをしているだけ。俺を生かし、育ててくれた師の真似事をしているに過ぎない）
銃を撃つたびにそこには師の面影がよぎる。

構え、撃つスピード、リズム、それは自分であり師でもある。
銃を撃つたびに死した師がそこには現れる。

（師匠は何かを残したかったのかもしれない。今まで奪うことしかしていなかったから。今の俺と同じく）

イーグルはラビを見る。

（こいつは次の俺。そして次の師匠でもある）

ラビは咎められたと思ったのか、また銃を構え撃ち始めた。

「帰りは遅くなる。先に何か買って食べておくといい」
テーブルの上にお金を置き、イーグルはラビに仕事に行くと言え
る。

ラビは了承したと頷く。

ラビはイーグルが部屋を出て行ったのを確認してから、テーブル
のお金を鍵付きの引き出しがついたオルゴールにしまう。

ラビは何かを確認したように一人頷くのだった。

それからしばらくラビはいつも通りボーっとしていたら、コンコ
ンと玄関のドアがノックされる。

「やあ、ラビ。僕だ、ベアだ」

ラビはとっさにベッドの下に隠れる。

ハッパで声色を変えた狼ではないかというふうに、恐る恐るベッ
トの下の隙間から玄関の方を覗き見る。

「ラビ？開けるよ？いいかい？」

ベアの大きな足が床をきませる。

「ラビ。仕事だよ。イーグルのお手伝いだ。出ておいで、ラビ」
ベッドの下から首だけラビが姿を現す。

巢穴から顔を出す小動物のようで、思わずベアは破顔する。

「早く支度しといて。僕は下で待っているからね」

それだけを告げるとそそくさとベアは部屋を出て行く。

残されたラビはベッドの下から抜け出し、服についたほこりを払

う。
首をかしげ、少し考えた後、ラビは拳銃を手に部屋をあとにするのだった。

イーグルは見晴らしのいいその部屋に陣取った。
大通りに面したそのビルの十六階。
スコープ付のライフルに迷彩をかけてかまえ、ターゲットを待つ。
ゴキブリのようなかてかした高級外車から降りてくるはげづらの男。

点火したらよく燃えそうな贅肉を蓄えている。
スコープごしに見えるのは、もはや人ではない。
ただの標的。

いつもどおり迅速に。しかし、的確に相手に照準をつける。
引き金を引く寸前、そこに人が現れる。

「ラビ！」

イーグルは思わず叫んでいた。
イーグルの撃つはずだったターゲットに拳銃を向けるラビ。
イーグルの指は思考よりも早く動く。
ラビに拳銃を向けたターゲットの護衛三人を続けざまに、撃ち落とす。

身をかがめてラビに迫る二人を撃ち。
ターゲットを逃走しようとする車ごと破壊。
経験が警鐘を鳴らしている。

これ以上はやばい。
場所がばれば、自分の命も危ないのだ。
いつもならとつくに引き上げている。
暗殺に一秒もロスは許されない。
それだけシビアな任務なのだ。
しかし、指は止まらない。足は動かない。

(ラビ、ラビ！何してるんだ。馬鹿が！)

心でつぶやく、指は止まらない。

もはや撃っている相手が敵かすら判別できない。

道を阻むもの、ラビを追うもの、そこには一切の躊躇はない。

(早く逃げる。もっと早く)

ラビの姿がもう視認出来なくなってから、ようやくイーグルはその場を離れた。

(もう駄目かもしれないな)

イーグルは体中についた硝煙の臭いを気にして、人気のない通りを選んでラビの元へと急いだ。

(ラビ、ラビ！)

「らしくない、らしくないよ。どうしたのさ？」

迷路のような細い路地。

声のしたほうにとっさに構えようとするイーグルだったが、既に相手の銃口はこちらを向いていた。

「焦ってズンズン進むのはいいけれど、いかんせん周りに気が届いていない。僕が敵だったら、声をかける前にズドンさ」

道幅とちょうど同じくらいの巨大な体躯、聞き覚えのある声、ベアだった。

「ラビは？ラビを知らないか？ベア？」

「ラビ？やはり彼女か。君をおかしくしているのは」

巨体がゆらりと動いたと思ったら、一瞬で間を詰めていた。

「なぜ抜かない？君の抜きの手は僕が良く知っている。数々のミッションで、何度君に助けられたか？まるで西部劇でも見ているように鮮やかで、美しかった。でも・・・」

「ラビは？」

イーグルの語気は強くなるが、ベアの張り付いたような笑顔はものともしない。

そして、ベアは拳を固めた。

それが何を意味するかイーグルは分かっていたが、体は動かなかった。

気がつけば、息苦しさで痛みが襲っていた。

「失望、そんな言葉がもつともふさわしい。あこがれていたんだよ、僕は。強い君に、美しい君に。それがなんだい、女の子一人に見る影もないじゃないか？」

イーグルはゆっくりと銃口をベアに向ける。

しかし、そのことを気にも留めずゆったりとした足取りでベアは近づき、イーグルの両の腕を鷲掴みにした。

「安全装置ぐらはずしなよ？本当に君は馬鹿だな」

そして、鈍い音と共に両翼は砕かれた。

イーグルの絶叫をベアは狂喜の瞳と、哀愁の表情で見つめていた。

「ラビ……」

「そんなに会いたいかい？なら会わせてあげるよ」

遊び飽きたおもちゃを捨てて、ベアはイーグルに背を向けた。

「彼女の死体とね」

イーグルの体にカツと血がめぐり、今まで鈍かった体は水を得た魚のように躍動する。

ベアが一步踏み出すかの間に背に蹴りを放っていた。

革靴に仕込まれたナイフは、見事にベアの心臓を突き刺し、致命傷を負わせる。

何が起こったのかわからず、ベアは信じられないような瞳でイーグルを見つめる。

「君が暗器を使うなんて知らなかったな。僕の知らない君がいた。ただ、それだけのことだったんだね」

ベアの体が砂埃を上げて、地に沈む。

イーグルは何とか自宅に戻っていた。

負傷した状態で闇雲に探すのは得策ではないと判断したからだ。もしかしたら、もう自宅へラビが戻っているんじゃないかと淡い希望も抱きながら、玄関を何とか開く。

「ラビ……」

静かな部屋に声押し殺したような泣き声が聞こえた。

安堵感を覚えながら、ベッドの前に膝まづく。

「ラビ。出ておいで」

目をぐしぐしとしながら、ベッドの下からラビは出てくる。

乱れた髪、汚れた服、赤く晴らした瞳。

必死に逃げてきたのだろう所々に小さな傷がある。

怒られると思っているのだろうか、しゅんとうつむいたまま黙している。

いや、怒らねばならないとイーグルは声をかけようとした。

何故あんなことをしたのか？

自分がとつた行動に対して、どんな影響が出たのか。

そして、声は暖かな雫となりて、頬を伝う。

「痛いのか……怪我。してる……」

抑えきれない小さな嗚咽に気づいて、ラビはイーグルに声をかける。

抱きしめたくとも、両の腕は思うように動かず、声は声にならず、ただ首を振るしかなかった。

ラビの小さな手が頬の涙をぬぐう。

少し冷たい感触がほてった心に心地よく、涙はなおも止まらない。

「怖いのか……大丈夫……もう、怖くないよ」

ポツリポツリと発せられる言葉は、まるで子供をあやすかのよう

に。
イーグルは小さな肩に身を預けゆっくりと、まどろみの中へと溶けていった。

イーグルが気がついたのは三日後、体ははまだ熱っぽく、医者からは全治三ヶ月と診断された。

その三ヶ月間、ラビはイーグルの世話を甲斐甲斐しくした。

「何故、掃除する前より汚れるんだ」

「何故、レトルト食品で食べられるものが出来ないんだ」

「何故、着せてくれる服は決まって後ろ前反対なんだ」

「いや、さすがに風呂まで手伝ってもらわなくても、一人で何とかするから」

その三ヶ月間、周りの状況は急激に変化していった。

自分たちの組織の親元である組織が壊滅状況になり、組織は解散しつつあった。

疎遠になっていく仲間たち。

このまま普通の生活に慣れていくのも悪くないと思いかけていた矢先、一本の電話がかかる。

そして、最後のミッションが下された。

豪華客船ペンタリア。

世界六大大陸めぐりと称された、この遊覧旅行は出発をスエズ運河とし、終着点を南極とした、一風変わった旅行プランとなっている。

案件は要人暗殺。

壊滅寸前の組織にとっては一矢報いたいという心意気なのだろうが、肝心の何時その要人が船に乗り込むという情報がないので、二人は普通に旅を楽しんでいた。

その要人が乗り込んできたのは喜望峰。

終着点の南極のひとつ手前の停泊先であった。

喜望峰を出発してから二日目の夜、盛大な爆発音とともにミッションは開始された。

イーグルはターゲットの部屋に激しくノックをする。

「襲撃です！早く避難してください！」

「ああ、分かっている」

相手の返答は緊急時だというのにのんきな返事である。

部屋から出てきたのは、燕尾服姿の初老の老人。

にこやかな笑顔とともに、銃をイーグルへと向けていた。

「さあ、入りたまえ。襲撃犯君」

イーグルは手を頭の上に組んで、おずおずと部屋に入っていく。

広い部屋であったが、燕尾服姿の人間が所狭しと詰め込まれていて、本来の広々とした開放感など微塵も感じさせない。

「やあ、ごきげんよう。私が君のターゲットというわけだ。さあ、それでは何故君が襲撃犯かわかるのか？その疑問に答えよう」

ガラス製の高級感あふれるテーブルに立っている燕尾服姿の青年が語り始める。

「この船はわれわれの組織の重要な拠点であり、ほとんどの乗組員が我々の組織に属している。だからこそ、君たちをマークすることなど簡単だったというわけさ。この襲撃のことも筒抜け、まったく運がないねえ君は」

その青年は高笑いとともにオペラのようにイーグルに語りかける。

「無論君のこともリサーチ済みさ。我々の仲間になれ。これは命令さ。断れないだろ、この状況じゃあねえ」

イーグルは辺りを見回す。

「ああ、そうだな」

イーグルは青年に対して手を差し伸べ、握手を求める。

「素直でよろしい」

青年はよつと声をかけテーブルから飛び降り、イーグルに近づくと

イーグルは手を引き、懐に手を入れた。

周りの人間が引き金を引くよりも速く、銃を抜き撃つ。

踊るように、燕尾服の男たちがみな崩れ落ちる。

イーグルは何事もなかったようにスーツのよれを直す。

そして、ドアノブを引こうとした瞬間、勝手に扉は開いた。

目の前にまたもや燕尾服の男。

しかしイーグルが銃を抜く前に、男は白目をむいて倒れた。倒れた男の背後にはラビが息を切らして立っていた。

手には消火器が握られている。

「・・・大丈夫？」

イーグルはやれやれとため息をつきながらも、ラビの手を引いて急ぎその場を去った。

周りには敵しかいない。

けれど不思議とイーグルの中には不安はなかった。

イーグルはその理由を知っていた。

それは・・・

豪華客船ペンタリアに搭載されていたペンギンという潜水艇を奪い、何とかイーグルたちは逃げおおせていた。

疲れ果ててしまったのかラビは、イーグルの懷で丸くなって眠っている。

乱れた髪をイーグルはかきとかし、額に静かに口付けした。

（イーグル君は一体何をしたいんだい？）

「ベア、今ならちゃんと言い切れるよ。俺はラビを守りたい。ずっと、いつまでもこいつを守っていたいんだ」

イーグルは懷で眠る小さなぬくもりを静かにかみしめていた。

レトロの記憶

夢も希望もいらなかった。

そんなものではおなかは膨れないし、寒さもしのげない。

私が欲しかったのは、一切れのパンと温かい毛布だった。

私がもう少し大きければ、体を売って何とか食いぶちぐらいにはありつけたかもしれない。

親もいないような私と同じような境遇の人間は、そこいらにいくらでも転がっていた。

私たちは、人の同情をかって乞食になるしかないのである。

偽善者が分け与えている食料は、笑顔で受け。

そして、裏では子供たちの殺伐とした奪い合いがある。

そんな中私は彼に出会った。

彼は一人浮いていた。

銀縁の眼鏡をかけていて、しわ一つないスーツを着ている。

ここは戦場なのにもかかわらず。

お金持ちなのだろうか？

私は不用意に彼に近づいた。

「食べ物はない」

彼は冷たく言い放った。

なんてきれいな人だろう。

私は思わず見つめていた。

彼は懐から、銃を取り出し、私に向けた。

彼は警告しているのだ。

私に立ち去れと。

けれど私は彼になら殺されてもいいと思った。

静かに目をつむる。

ものすごい音が鳴った。

頬をかすめただけなのに、ものすごく痛くて転げ回りがかった。目を開けると、彼は変わらない表情でそこにいた。

「来るか？」

彼は問いかける。

私はコクリとうなずいた。

彼は名前をくれた。

私の名前はラビ。

『ラビ』

『ラビ』

『ラビ』

彼が私の名を呼ぶたび私の心が温かくなった。

私は幸せだよ、イーグル。

ラブレの記憶（後書き）

栖坂月先生

極点シリーズ（？）をいただきました。

実に厚みのある、読み応えのある物語でした。全体としてはお約束な感もありますが、それでも十分な魅力は備えていると思います。

北と南にはほとんど接点はありませんでしたが、それがペンギンというところに奇妙なセンスを感じます。恐らくもつと深いところでは繋がっているでしょう。

ここまで力の入った作品に、私が取り立てて言うことはないように思います。コミカルな部分もシリアスな部分も、このままどんどん追求していつてください。

ちなみに二つ、誤字らしきものを見つけたのですが、どちらもそのまま意味が通る、というより本来の形より相応しいように思ったので、そのままでも良いと思います。

一応挙げておきますと、一つは北極への前半『怪しさ満天のガイド』です。本来は満点でしょうけど、北極の澄み渡った空と相まって、むしろいい感じです。もう一つは南極への中盤『ゴキブリのようなてかてかした高級外車から降りてくるはげずらの男』のはげずらですね。禿面と漢字を当てるなら『づら』なんでしょうが、このはげずらにどうにも味わいがあって、変えるのは惜しいとすら思いました。

まあ、どちらも厳密な間違いとも言えないように思うので、山羊ノ宮先生のセンスで判断してください。話の邪魔をしているわけでもありませんしね。

ともかく楽しめました。

また来ます。それでは

ヤギノミ

彼女はとある旅の楽団に身を置いており、その歌の評判は国中に広がっていた。

小さな街一つぐらいなら、彼女が来ただけでお祭り騒ぎになるほどだった。

そんな彼女にも、旅の途中で声が出なくなった時期があった。思いつめた少女は死のうと考えた。

暗い森の泉に身を投げようとしていたとき、一匹の奇妙な獣に出会った。

その姿を簡単に言えば、二足歩行の山羊である。

ヤギノミと今では言われる、人語を解する変な奴らだ。

「死ぬのかい？ いや、死ぬほどでもないだろう？ 声が出ないだけで」

「獣如きに何が分かるの！ 私にとっては歌うことが全て、歌えない私なんて死んだほうがましよ！！」

魔女のようなガラガラ声で叫ぶ少女は、自虐的な雰囲気もあいまってなかなか様になっている。

「俺は歌えないからなあ。いや、別に他に何か特技があるって訳でもなく。本当に何にもないんだよなあ、俺って。こんな俺でも死んだ方がましなのかなあ？」

ヤギノミはくりくりとした目で少女に訴える。

「別にあんたと私は関係ないでしょ」

「関係ないんだけど、ただのおせっかい焼きで。いや、目の前で誰かが苦しんでいると放っとけなくって」

「獣に心配されるほど、落ちちゃいないわよ」

「それだけの威勢があれば大丈夫かな。泉で自殺をはかるような可憐な女の子かと思つたら、意外と神経ず太いし・・・」

わなわなと拳を震わせる少女に気づき、慌ててヤギノミは逃げ出す。

「私は可憐な美しい歌姫よ！！獣如きに私の魅力なんて分からないわ！！」

「はいはい、分かったよ。じゃあ、明日の朝、その自慢の歌声を聴かせてくれよ。みんな連れて聴きに行くから！」

少女はヤギノミが去った後、狂ったように笑って、楽団の待つテントへと帰っていった。

楽団員はさぶ濡れの少女の姿に驚き声をかけたが、少女はなんでもないわと突っ返した。

そして何事も無かったように着替えて、たらふく食事を取り、十分な睡眠を取った。

次の日の朝、少女は朝早く目覚めていた。

自分の声が出るのか不思議と不安は無かった。

どこからか草笛の音が聞こえる。

素朴な草笛の合唱。

それに合わせて、少女は歌った。

おせっかい焼きの獣

気をつけて

奴らのつばらな瞳は畏だから

抱きついたら最後

奴らの毛皮は

夜露で湿っている

おせっかい焼きの獣

気をつけて

奴らの言葉は嘘だから

抱きついたら最後

奴らの毛皮は朝露でも湿っている

不快感と後悔で涙が溢れる

少女の美しい歌声に楽団員達が次々とテントからでてくる。

そして、この歌は少女の名とともに、奇妙な獣ヤギノミの名を世間に広く伝えるものとなった。

「じいちゃん、その話、嘘だろ」

「ああ、嘘じゃよ。だが、即興にしてはよくできていると思わんか？」

「思わない」

「つまんない」

暗い夜の森に小さな明かりが灯っている。

森の奥にあるヤギノミ族の集落で、ヤギノミの子供達が老いたヤギノミの家に集まっていた。

「やれ、素直な子じゃ」

「ねえ、おじいちゃん。もっと人間の話が聞きたいなあ」

子供のヤギノミは老いたヤギノミに次の話をせがむ。

「そうじゃのう、次はなあ・・・」

平和な夜の一時、老いたヤギノミの話は延々と続いた。

ヤギノミ（後書き）

紗英場 渉先生

山羊ノ宮さんこんにちは！はじめまして紗英場渉と申します。こちらで執筆させていただいています。

面白い作品でした。二足歩行のヤギ“ヤギノミ”。彼らの瞳から写る人間はどんな生き物なのか？ 助けてやる程のものなのか、ヤギノミ達の気まぐれか。

ヤギノミが山羊ノ宮さんのペンネームをもじってつけられたとしてももう脱帽です。

しかしながら場面が変わるときに空行を多様するのは避けた方がよりよかったですかと思いましたが、4つとさせていただきます。

では、またお会いできたら光栄です。

箱の中の災厄

紙きれのような薄っぺらい自信は、いとも容易く斬り裂かれた。

どんな暴言を吐かれても大丈夫と思っていた自分は虚構で、そんな強い自分なんてどこにもいやしなかった。

言葉も思いも彼女にはまるで伝わってはいない。

ひとえに私の魅力の無さによるものなのだろう。

伸ばした手を拒絶されるのは怖い。

怖いんだ、私は。

それなのに。

怖いはずなのに何で私はまた手を伸ばすのだろうか？

もう諦めるよと。

何やっても無駄なんだとか。

自分の中の自分が闇へと手招きをしている。

またあのまどろみの中に戻るのだろうか。

もう傷つきたくない。

そう思うのにまた手を伸ばす。

多分私は馬鹿なんだろうな。

そんな風に自嘲しながら、また手を伸ばす。

その手を君は無造作にはたき落すのだろうか。

分かっているさ。

そうなることくらい。

でも、いつかこの飾らない自分を受け止めてくれるかもしれないと

淡い期待を持ってしまう。

そんなことあるはずないだろうに。

だって、決して私は魅力的なんかじゃない。

拙い言葉で思いのたけを語る、幼稚な人間なのだ。

それに馬鹿だし。

いい加減学習すればいいのにね。

無駄なんだって。

でも、パンドラの箱の中に最後に残ったものの名は『希望』だから。

『希望』もまた災厄の一つ。

だって、またこうして手を伸ばしてしまう。

また傷つくって分かってるのに。

苦しくって仕様ががないのに。

でも、涙流しながら思うんだ。

ああ、いつか君に私の気持ち伝わらないかな、って。

箱の中の災厄（後書き）

N先生

抽象的すぎる。もったいない。
もっとパンドラの箱を活かした方が。タイトルにもなっているくらいですし。

トヤさん日記 SS

トヤさんは女性である。

トヤさんは背が小さい。

トヤさんは関西弁である。

トヤさんは変わった人である。

トヤさんはチョコレートとプリンをこよなく愛する人である。意外と辛いものもいける口である。

ある日のトヤさんのことである。

一緒に月見をしていた。

「あのな、十五夜のお月さま言うやろ。あれは十五日目の月やっちゆうことやねん」

「うん。知ってる」

トヤさんは皿いっぱい積んだみたらし団子をつまみながら続ける。「そやったらあの三日月のバッタもんの名前知ってるか？」

「バッタもん？」

「こーんな形のやなー、お月さんや」

トヤさんは団子の串で、月を宙に描く。

「それも三日月じゃないの？」

「違っんやなー」

チツチツチツと串を横に振る。

トヤさんは嬉しそうだ。

「実はあれは二十六夜の月っちゆうんや」

「へー、よく知ってるね。トヤさん」

「辞書で調べたからな」

トヤさんに辞書は、馬の耳に念仏と同意義である。

トヤさん、熱ある？

「一応聞いた方がいいのかな？」

「何で月の事調べようと思ったの？トヤさん」

「それはな、ホントは秘密やねんけどな。実は月の裏側には秘密基地があつて、宇宙人が地球侵略を狙つとうねん。でも、うちがある限りそんなことさせへん。覚悟しとき、宇宙人」
またトヤさんは変なテレビを見たんだろうな。
変な掛け声とともに串で月を突く。

「ちりゃー」

・
・
・

トヤさん、月に届くと良いね、その串。

トヤさん日記 SS (後書き)

栖坂月先生

ども、トヤさんファンの栖坂月です。

ファンなので星は五つです(笑)

何というか、トヤさんを見ていると穏やかな気持ちになってそのまま真っ白になってしまふ気がします。私には決して書けない味わいですね。

こいつは強力な武器ですよ、親分!

とはいえ、催促するつもりはありませんので、ジルクインハイドラ同様の向いた時に読ませてください。

それでは

午雲先生

ふふふ・トヤさん日記シリーズ、不思議な味わいがありますね・
・憎めないというか気がおけないというか・人畜無害と言いますか?

俳諧風味な感じもします。次回も(ひそかに)楽しみにしています。感想でした。

忍と亜希

「この木の葉が全部散つたら死ぬんだとかいう話なかったっけ？」

「ああ、昔英語なんかの授業でやった気がするな」

「その木が落葉樹じゃなくて常緑樹やつたらどうかな？」

「どうかなって言われても」

「例えば松とか」

「松はなんか雰囲気でんなあ」

「じゃあソテツとかやつたら？」

「時代背景が原始時代やつたら合うか・・・いや、合わないか？」

病室のベッドの上から外を眺める弟の着替えを入れ替えながらそんな話をしていた。

「他に洗うものないな？」

「最期にもう一度マンモスの肉が食いたかった・・・とかになるのかな？」

「いや、マンモスとかどうでもいいから。洗いもんじゃないかって？」

「ない・・・でもマンモスの肉っていつペン食ってみたくない？」

「いや」

「何で？おいしいかもしれんで？」

「だって象の肉やぞ。俺は牛の方がええわ」

「昔、アニメでやつとつたやんか。なんて名前か忘れたけど、原始人のアニメ。それにマンモスの肉が出てきておいしそうか思ったけどなあ」

真剣に考え込む弟ににんまり笑って、病室を出ようとしたとき、入り口に弟と同じ年ぐらいの女の子が立っていた。

花柄のパジャマを着た可愛らしい女の子だ。

この子も弟と同じくこの病院に入院しているのだろうか。

「忍ちゃん。今日はお兄さんがお見舞い？」

「うん。今日は体の調子いいの？」

「大丈夫。全然息苦しい感じもないし、絶好調って感じ」

「忍、この子は？」

「あ、兄さん。この子は宮部亜希ちゃん。二週間くらい前に入院してきた子」

「はじめまして。宮部です」

「おう、忍と仲良くしてやってくれ。それじゃ俺飯食ってくるから」

「うん、分かった」

生まれながらに心臓に疾患のあった弟は、今状態が悪化して心臓が止まるか分からないという状況だ。

ペースメーカーを付ける手術を、激しく嫌がっていたあの弟が、手術を受ける決心をしたのはあの女の子のおかげかなと一人ほくそ笑む。

電波がいろいろなところで飛び交っている現代において、ペースメーカーは結構不自由なものかもしれない。

けれど、いつまでも胸に爆弾を抱えたままである訳にはいかない。小さいころは不整脈があるくらいで、心臓に負担をかけないように生活していれば問題なかった。

このまま何の心配も無く過ごしていけると思っていたのに、なぜ弟がこんな目に遭うのだろうと恨みをこめてエビフライを串刺しにする。

病院の食堂で日替わり定食を食べ終えた頃、さっきの女の子が熊のもふもふしたスリッパをならしながら近づいてきた。

「どうも。えっと宮部ちゃんだっけ？俺に何か用かな？」

「はい。忍ちゃん、もうすぐ手術受けるんですよね？」

「うん、受けるよ」

お茶が熱すぎて、冷ましながらちびちび飲む。

「私も受けるんですけど、私が手術受けるの怖いって泣いてたときに忍ちゃんに励ましてもらったことがあって。それでそのときはあ

りがとうつて。手術頑張つてつて伝えてもらえませんか？」

「別に全然かまへんけど。そういうことなら本人に直接言った方がいいんじゃない？その方が早いし」

「でも、面と向かつて言うのはなんだか恥ずかしくて」

「まあそういうもんか。わかった。伝えとくわ」

「ありがとうございます。お兄さん。それじゃ、失礼します」

彼女の両側で縛られた髪がひよこひよこして可愛らしい。

お兄さんという響きも女の子に言われるとまた違った趣がある。

家に帰ったら親に妹が欲しいとねだってみようか。

いや、絶対しないけど。

「忍も青春してるんやなあ」

生まれてこのかた色恋沙汰とは縁の無い生活を送ってきた自分には正直弟が羨ましい。

そんなことを思いながら秋晴れの気持ちのいい空を眺めながら一杯目のお茶を口にする。

やはりお茶はまだ熱かった。

「言えた。ああ緊張した」

自分の病室へ戻る途中、一人そうこぼす。

まだ心臓がばくばくと鳴っている。

お兄さんに言うのでもこんな調子なのだから、直接本人になんてできる訳が無い。

病室に戻って、一つ大きな息をつくくとヒューと音がする。

自分でも知らずに足早になっていたのだろうか。

宮部亜希は両手を胸に添えて、規則正しく鼓動する心臓とその後ろで自分を苦しめている肺を思い浮かべた。

後何日かすれば、気管支を広げる手術をして、苦しい思いをしなくて済むはずである。

ふと、カレンダーに目をやると、手術日は黒く塗りつぶされ、他

の日にまではみでている。

そして、その黒を囲むように赤で力強く丸が描かれている。黒く塗りつぶしたのは自分で、赤で囲んだのは忍である。

「この日はお前が生まれ変わる日だろ。だからこんなにグチャグチャにすんなよ。いい日なんだから」

「忍ちゃん・・・言ってるで恥ずかしくない？」

「何で？っていうか、ちゃんづけやめてくれって」

「いいじゃない。忍ちゃんの方が年下だし。それに忍ちゃん可愛いから大丈夫」

親指を立てて嬉しそうな亜希に対して忍はげんなりした表情である。

「大丈夫って・・・っていうか、可愛いってどういうこと？男が可愛いって言われても嬉しくないんだけど」

「そう？褒められたら誰でも嬉しいと思うけどなあ」

「俺は嬉しくないの。可愛いなんて言われても」

「忍ちゃん・・・」

亜希はすつと忍に顔を近づける。

二人の距離が5センチほどになったとき、もう一度亜希が忍の名を呼ぶ。

「忍ちゃん・・・可愛いよ」

忍はゆでだこのように真っ赤になって後ずさりする。

「忍ちゃん、耳まで赤くなって。やっぱり可愛いね」

ほどほどにしないと忍の心臓に悪い。

「ねえ、忍ちゃん。本当にいい日になるかなあ」

玉のように笑い転げていた亜希は、いつの間にかカレンダーを見つめ、しんみりしていた。

「なるに決まってるだろ」

ヒューヒューという息遣いとともなう嗚咽が混ざる。

笑い過ぎて小さな発作が起きているのだ。

「ほんとに?」

亜希は自分でも苦しくて泣いているのか、それとも不安で心細くて泣いているのか分からなかった。

「本当に。だから泣くな。馬鹿」

「忍ちゃん、可愛いけど、優しくない」

「優しくなくて結構。っていうかお前泣き過ぎ。この前も泣いてたじゃん」

「だって、忍ちゃんも手術受けるんでしょ。全然怖くないの?」

「怖い訳ねえだろ。馬鹿にしてんのか?」

「ごめん。でも忍ちゃんって顔に似合わず男らしいんだね」

「顔に似合わずってのは余計だ」

亜希は瞳に涙を溜めて、忍と微笑みあった。

今ではその黒く塗りつぶされた日にちを見ても不安にはならない。その日のことが思い出されて、ただただ心が暖かくなるばかりだ。

ため息ばかりが出る。

忍ちゃんこと豊島忍はたまらなく後悔していた。

彼は注射が嫌いである。

注射を打つときは絶対に注射から目をそらして堅く目をつむる。

少しだけちくつとしますよと医者が言うたび、ちくつとするなら止めてくれと心から願う。

もっと科学が発展して痛くない注射針ができればいいのにと願う。多分俺は生まれてくる時代を間違えたのだと本気で思う。

苦しいのも嫌いである。

だから、苦しいのを耐えている彼女のことを尊敬する。

後二年経ち、彼女と同じ歳になるうとも苦しいのを耐えることは自分にはできないだろうと思う。

彼女のことは尊敬するが、同じように苦しいのを我慢できる体に

なりたいとは思わない。

できれば手術だつて逃げ出したいのだ。

しかし、彼女の前で手術を受けると言ってしまった以上受けざるを得ない。

タイムマシンで過去に戻つて手術を受けると言つたことを無かつたことにしたい。

いや、でも待てよ。

タイムマシンってどうやって作るんだ？

そんなことを真剣に悩んでいたとき、兄が帰ってきた。

「よう、忍。青春してるか？」

「は？何言つてんの？そんな今の状況でできるわけないだろ」

「ん、ああ。そうか。いや、亜希ちゃんから伝言頼まれてな。手術頑張れつてさ」

亜希の名を聞いて喜ぶかと思いきや忍は大きなため息をひとつつただけだった。

「なあ、兄さん。タイムマシンってどうやって作るんだ？」

「タイムマシン？確かタイムマシンって理論上不可能じゃなかつたっけ？」

「不可能を可能にするのが科学じゃねえのかよ。兄さんの役立たず」

「その科学で不可能だつて言つてんだろ。というか俺科学者じゃ無いし」

「やっぱり無理なのか。タイムマシン」

「無理だろうな」

「冷たいよ。兄さん」

「冷たいな。もうすぐ冬だからな」

手術当日がやってきた。

タイミングよく二人の手術日が重なり、その日の朝は二人とも言葉少なに語り合っていた。

まるで今生の別れでもしているようなやり取りだったので、思わず飲んでいたお茶を吹きそうだった。

確かに大変な手術なのだろうが、生きる死ぬというのはいささかオーバーな気がしてしまう。

それにしても最近は医療の情報の開示が進んでいるらしく、弟さんの手術の様子を見ますかと言われた。

謹んでお断りした。

それは俺が薄情だからでも、楽観主義者だからでもなく、単に血が嫌いだからだ。

小学生の頃、フナや蛙の解剖で気を失って保健室に担ぎ込まれたのは、たぶん俺だけではないはずだ。

いざ手術が始まると、手術中は意外に暇なのだと気が付く。仕方がないので病院の周りをぶらぶら散歩することにした。

病院横の楓の並木道は葉が舞っていて美しい。

俺はふと、弟の言った『この木の葉が全部散ったら…』のフレーズを思い出した。

フツ。

俺は馬鹿馬鹿しいなと思いつつも、弟の病室前の楓の木の葉にセロハンテープを貼ることにした。

木登りなどずいぶん久しぶりだったが、案外うまく登れた。

ようやく貼り終えて降りようとしたとき、世界が回った。

落ちながら俺の頭によぎったのは走馬灯ではなく、猫が高いところから落ちたとき、クルクル回転しながら見事に着地するシーンだった。

動物名珍場面集を見てよかったぜと心から思う。

さあ、猫のように華麗に美しく膝を抱えて回転しようとしたとき、地面が足を強打した。

痛みに悶絶しながら、ゴロゴロと地面を転げまわった。

一通り暴れまわった後、痛みで見える幻覚の猫が鼻で笑って通り過ぎていった。

「骨折したんだって？」

何の因果か、病院の配慮か、弟と同じ病室で寝かされている。

「何でまた、そんなことに」

そんなことは聞かないでくれ、弟よ。

兄心からとはいえ、木から落ちたなんて理由を言える訳がない。

「まあ、言いたくないならいいけど」

ありがとう優しい弟よ。

いや、これは彼女ができた男の余裕なのだろうか。

くそつ。

「元気だせよ。俺みたく兄さんも病院で出会いがあるかもしれねえじゃん」

俺はうずくまっていた布団から顔だけ出して、弟を見つめた。

「そうか？」

「ああ、そうだな。あの木の葉が全部散るぐらいにはできてんじやねえの」

忍と亜希（後書き）

抹茶小豆先生

山羊ノ宮さんの作品は、常習性がありますね。
「クセになる美味しさ」とでもいうのでしょうか。
今後も作品を楽しみにしております。

干されている少年

これじゃあ、干物だぜ。

物干しざおに縛りつけられた俺は、穏やかな陽気にげんがりしていた。

これが夏ならもうとっくに俺は死んでいると思う。

ビバ、秋風。

だがしかし、いつまでもこうしている訳にはいかない。もうすぐ夕方だ。

俺にはしなくてはいけないことがあるのだから。

「どう？少しは反省した？」

「沙希姉さきねえ、いくらなんでもこんなところにつるし続けるなんて、そりやないぜ、セニヨリータ」

沙希姉は腕組みをしながら、俺の前に現れる。

沙希姉は顔も良ければ、スタイルもいいのだが、いかんせん性格が悪い。

ちよつとした事でこんな風なお仕置きをするなんて信じられないぜ。性格さえよければ、今すぐにでも俺が抱いてやるのに、ジューテムいつでもその組んだ腕に乗ったスイカのように熟れた胸を揉みだしてやるぜ、ハニー。

「あんたがパンツめくりなんてするから悪いんですよ」

「そんなの見たからっていつても減るもんじゃないし、いいだろ」

「そんなの扱いするなら見なきゃいいでしょ」

「そこは男のロマンだから・・・」

「何が男のロマンよ。ガキが何言ってるのよ」

「頼むよ、俺のも見せてやるから、許してくれよ」

「バ、バツカじゃないの！そんなの見ても嬉しくないわよ！」
頬を赤らめる沙希姉。

可愛い所あるじゃねえか、子猫ちゃん。

「何ならパンツの中身も見ていいからさ」

「何言ってるのよ！いい加減下品すぎるのよ！」

そう言ってる沙希姉は俺の股間を蹴りあげ、悶絶する俺を放って家中へと消えていった。

男にしか分からない痛みなので、沙希姉は容赦という言葉を知らない。

もし子種ができなくなったら沙希姉に責任を取ってもらうしかない。ヘッヘッヘッ。

沙希姉との新婚初夜を想像していると、あっという間に時間は過ぎ、いつもの時間がやってくる。

くっそ、今日も間に合わなかったか。

しかし、いずれ必ず！何故ならそれが男のロマンだから！！ザパーン。

風呂場の方からお湯が音を立て、沙希姉の音痴な鼻歌が聞こえる。

あー、今日も沙希姉の風呂を覗けなかった・・・

夜の秋風はもう肌寒く、物干しに干されたままの俺の心をさらに物悲しくさせるのだった。

干されている少年（後書き）

抹茶小豆先生

なんだか、なつかしい感じのする作品でした。
少年と沙希姉が見せ合いっこする日が、早く来るといいですね。

道

桜の花が舞っていた。

その木下に一人の少年が立っていた。

その少年は遠くの坂の向こうを見ていた。

「何を見ているんだい？」

僕は思わずその少年に声をかけてしまった。

少年は何も言わず、ただ微笑んで手にしていたものを僕に差し出した。

少し季節の早い花だった。

鮮やかな黄色。

皐月きげきの花である。

「これを僕に？」

少年はゆるゆると首を振った。

そして何も無い道を指差した。

「これは僕の。君のは向こうに。ほら僕の花きれいだろ？」

僕は皐月の花と何も無い道を見た。

僕は手折るべき花を知らず、道に行こうとしていた。

そのまま道を進んでいくと、向日葵畑ひまわりばたけへと出た。

どこまでも続く道と、その両脇に自分の背丈ほどある向日葵が元
気良く咲いていた。

サフランライスのような鮮やかな黄色が、目にも鮮やかである。

少し行くと少女が一人かがんでいた。

麦藁帽子に、白いワンピースが良くあう。

この暑さに具合を悪くしたのだろうか。

声をかけることにした。

「大丈夫かい？調子でも悪いのかい？」

「話しかけないで。邪魔しないで。忙しいの」

少女はこちらに見向きもしないで、一気にまくし立てた。気になって、少女の方を覗きこんだ。

少女の目の前には、蟻が列をなしていた。

その列に、少女は砂をかけたり、石で道をふさいだりしていた。

「頑張れ、頑張れ」

少女は蟻たちを応援しながら、また一つ石を置いた。

「何をしているの？」

「だから邪魔だと言ったでしょ。これは私の生きがいなの。迷惑なの。干渉しないで。貴方は私にかかわる前にすることがあるでしょ。さっさと行きなさい」

少女は道の先を指差した。

そして、僕は歩き始めた。

その陽炎揺らめく道の先に。

なすべきことも分からずに。

道をさらに行くくと、^{かえで}楓の木の葉がはらはらと舞っていた。

赤や黄色の木の葉と一緒にクルクルと回っている少女がいる。

スカートをひらひらたなびかせて、楽しそうだ。

「ねえ、見て。きれいでしょ。美しいでしょ。こんなに美しいものなんてこの世に他に無いわ。貴方もそう思うでしょ？」

少女は僕に尋ねる。

僕は首をかしげ、

「何だか僕には美しさよりも儂さを感じる。寂しげな感じがする」
そう素直な感想を言うと、少女は激昂したように一気にまくし立てる。

「貴方は何も分かっているわ。こうやって役目を終え、散っているもの達の美しさなんてちっとも理解できないのね。命は散るから美しいのよ。そんなことも分からないなんて最低ね。生きる価値な

いわ。さつさと私の前から消えてちょうだい」

何もそこまで言わなくてもと思うのだが、少女に氣迫負けしてお
ずおずとその場を立ち去るのだった。

「結局貴方は何も分かつてはいないのよ。だったらとつと先に行
くべきよ」

そう言つて少女は何処に続いているか分からない道を指差した。

その先に何かがあるのか確かに僕は知らない。

それでも、僕は少女の指差す道を歩き始めるのだった。

僕は呆然とその場に立ち尽くしていた。

辺り一面の真白の世界。

歩んで来た道の僕の足跡は雪に埋もれ、もう何処から来たなんて
分からない。

もちろん進むべき道なんて分かりもしない。

もう道なんて雪で埋もれて見えもしないのだから。

見えているのは枯れ木と雪がしとしと降る様だけである。

足も埋まつてしまつて歩くのに一苦労だ。

よいこらせと掛け声一つ、僕は雪から足を抜き、一步踏み出した。
多分こちらなのだろうなという方向に足を運ぶ。

確かに僕は何も知らないし、分からないけれど、それでも歩み続
けるしかないのかもしれない。

僕を待つ花も、やるべきことも、この世界の美しさも、歩み続け
る理由も、何も分かりはしない。

いつか分かる日が来るのだろうか？

こんな僕にも。

そして、また一步。

踏み出した足は、雪の中にずぶりとささり、また苦労して抜かな
くてはならない。

道（後書き）

栖坂月先生

そしてまた春が来る、でしょうかね。

人生なんてそんなもの、なんて言葉に頷くこともありますが、自分の足で歩くことだけは諦めたくないものです。その道が冷たく、あるいは乾いていたとしても、振り返った時にきつと、その形に深い感慨が生まれるであろうと思いますからね。

いやー、こういう作品を見ると私も書きたくなってしまいます。

しかし今の私では煩雑になるばかりで、こう上手くまとめられそうもありませんな。

お見事です。

また来ます。それでは

午雲先生

山羊の宮先生、道、作品読ませてもらいました。幻想の世界ですね。一本の道、道中にすれ違った三名の少年少女、四季の移り変わり……この三名はテーマの擬人化と見えます。道は文学的な思索の過程、四季が時間の経過を知らせて呉れます。どのテーマにも未だ打ち込め無い、ーといって立ち止まることは出来無い、ーそんな時期、思索する者なら誰しもが経験するものと思えてふつと共感してしまいます。妖精の声とは自身の内なる声とも受け取れますね。冬来たりなば春近し？その日が至るまで、ゆくのみ……ですな。感想でした。

終わりつつある世界、始まりつつある世界（前書き）

何をそんなに感傷的になっている。

あいつらと俺たちは違う。

そうだろ？

終わりつつある世界、始まりつつある世界

世界が終ろうとしていた。

だからと言つて、すさまじい変化がある訳では無かった。

空は青く澄み、心地よい風が頬をなでる。

隕石なんて落ちても来ないし、宇宙人も攻めてこない。

悪秘密結社もこの世にはいないし、戦争はあるけれど核がどんどん使われるような大規模なものではない。

だがしかし、確実に明日になればこの世界は終わる。

私は最後の晚餐を楽しむでもなく、恋人と永遠の愛を誓う訳でもない。

ただ草原に寝っ転がって空を眺めていた。

「お母さん、僕達死んじゃうの？」

子供の声が聞こえた。

漠然とした恐怖（まるで得体のしれないお化けを怖がるように）で子供は泣きそうになっていた。

子供の不安そうにしているのがよく分かったのか、母親は優しく諭すように子供に言い聞かせる。

「大丈夫よ。この世界の人たちはみんな一回消えてしまっけれど、またすぐに同じように生き返るんだから。この世界は正確には終わるのではなく移行するのよ」

子供には母親の言葉は難しすぎて、疑問符を顔に張り付けている。

しかし、大丈夫というセリフに子供の漠然とした不安は漠然とした安心感によって払しょくされていた。

去りゆく母親の背に私は、移行した世界の私は本当に今の私と寸分違わぬものなのだろうか、という疑問を投げかけたくて仕様がなかった。

私の中にもあの子供のような漠然とした不安があるのだ。

だが、私の中にはこの世界がどのようになっていくのだろうかとい

う期待もあつた。

この世界がより良いものになっていくことは、この世界に住む者なら誰もが思うことだろう。

けれどもこの世界が一度死んでしまうことは確かなだろう。

その時私のこの思考している魂はどうなってしまうのだろうか？

ある神の下では死んだら神の世界に行けて、魂の世界は魂の行った数だけ世界は広がるらしい。

ある神の下では魂は輪廻して、いろいろな生き物になるらしい。

この世界が終る時、私の魂は神の元へ行くのか、それとも移行した世界でも同じ魂でいられるのだろうか？

私には分かりもしない。

確かに今は分からないが、時間がたてばそんなことはすぐに分かることでもある。

だから、私は空を眺め、世界が終るのを待っているのである。

終わりつつある世界、始まりつつある世界（後書き）

その通りだ。

あいつらは『0』と『1』の二文字で構成され、俺たちは『A』『G』『C』『T』の四文字で構成されている。

この事は決定的な違いだ。

ただ俺は思うのだよ。

世界が終り、次の世界があるとして俺と同じ塩基配列の人間は俺の姿形だけのコピーであり、俺自身ではないと果たして言い切れるのかと。

俺のこの思考する魂にいかほどの価値があるのかと。

お前はそんな事を考えたりはしないのか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1597i/>

ローデンフロートのフラスコ

2010年11月21日03時07分発行